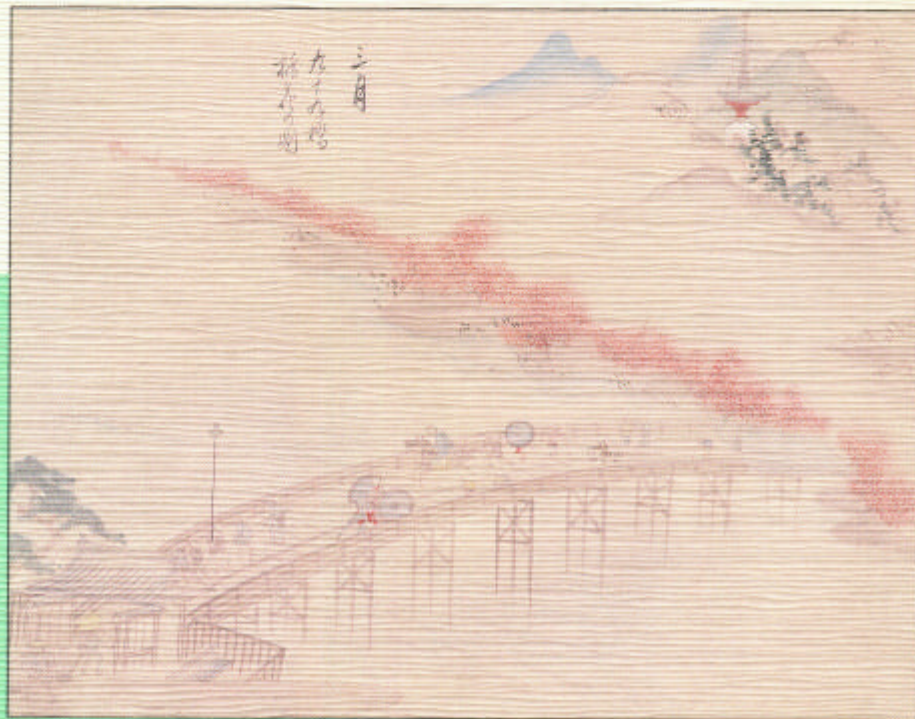


足羽山の 主な史跡と墓碑石



足羽山の主な史跡と墓碑石

福井市立郷土歴史博物館

足羽山の主な史跡と墓碑石



目次

運正寺・妙観寺

- ① 高野春華墓……………三
- ② 高野真齋墓……………三
- ③ 旧福井藩士奉納石燈籠・同寄付者名列碑……………四
- ④ 橘健子墓……………四

愛宕坂・百坂

- ⑤ 橘曙覧黄金舎跡……………七
- ⑥ 細井順子紀功碑……………元
- ⑦ 齋殿清水跡……………三

郷土歴史博物館

- ⑧ 松玄院常夜燈……………五
- ⑨ 橘曙覧歌碑……………三
- ⑩ 岡倉天心像……………三
- ⑪ 松岡屋吉兵衛石像……………七
- ⑫ 真田地蔵……………六

足羽神社

- ⑬ グリフィス遺愛の日時計と台座……………三
- ⑭ 敦賀セメント株式会社記念碑……………四
- ⑮ 乾出雲墓……………三
- ⑯ 小竹才六碑……………四

茶臼山

- ⑰ 天壤無窮碑……………七
- ⑱ 綱長井……………四
- ⑲ 足羽神社小燈籠……………五
- ⑳ 橋元近碑……………五
- ㉑ 九頭龍川修治碑……………五
- ㉒ 継体天皇御世系碑……………五
- ㉓ 足羽宮碑……………七
- ㉔ 六地藏宝塔……………六
- ㉕ 発摘如神碑……………三
- ㉖ 石田一恵碑……………六

②7 軍馬碑	六
②8 松島清八記功碑	六
②9 茶白山（龍ヶ岡）古墳改葬地	七
③0 山本条太郎像	七
③1 久津見晴嵐像	七

三段広場

③2 笠原白翁碑	七
③3 天魔池	八
③4 芭蕉句碑	八
③5 継体天皇石像	八
③6 足羽山公園展望所屋上石	八
③7 富岡仲次郎像	八
③8 高島鷹洲寿碑	九
③9 内藤喜右衛門献金碑	九
④0 浅田外吉碑	九
④1 吉田東寧碑	九
④2 伴閑山碑	九

④3 大久保盤山碑	九
④4 宝加墓	九
④5 筆塚	一〇
④6 荒川汶水碑	一〇

孝顕寺・孝顕寺坂

④7 村田氏寿墓	一〇
④8 鈴木主税墓	一〇
④9 三界万霊塔	一〇
⑤0 道路改修記念碑	一〇

黒龍神社・藤島神社・白山社

⑤1 石渡八幡祠碑	一一
⑤2 松旭齋天一奉納石燈籠	一一
⑤3 国島君紀徳碑	一一
⑤4 藤島神社遷祀碑	一一
⑤5 白山社狛犬	一一

泰清院・通安寺・山奥

- ⑤6 田代養仙墓……………二九
- ⑤7 川地柯亭墓……………二九
- ⑤8 四時庵暮江墓……………三〇
- ⑤9 狛家累代墓……………三三
- ⑥0 天保飢饉塚……………三三

招魂社・七面山

- ⑥1 杉田定一記念碑……………三七
- ⑥2 上田喜作碑……………三九
- ⑥3 高田藤助碑……………三〇
- ⑥4 足羽敬明墓……………三三
- ⑥5 潮田由元墓……………三三
- ⑥6 小出左織墓……………三三
- ⑥7 齋藤長君殉職紀念碑……………三五
- ⑥8 忠勇安川君墓……………三五
- ⑥9 半井南陽墓……………三六

- ⑦0 矢島立軒墓……………三六
- ⑦1 根本志賀墓……………三九
- ⑦2 前田助藏墓……………四〇
- ⑦3 牧田謙齋墓……………四一
- ⑦4 久野又兵衛・池田作太郎碑……………四三
- ⑦5 檜皮吉三郎碑……………四四
- ⑦6 高村親像……………四五
- ⑦7 中根雪江和歌の燈籠……………四六
- ⑦8 西南の役殉難碑……………四七
- ⑦9 太平の礎……………四九
- ⑧0 岡島佐三郎碑……………五一
- ⑧1 死事十二人碑……………五三
- ⑧2 菓子塚……………五四
- ⑧3 皇太子殿下（大正天皇）御手植松……………五五
- ⑧4 坪川信三像……………五七
- ⑧5 題目塔……………五八

福井平和塔（仏舍利塔）

- ⑧⑥ 軍馬碑……………一三三
- ⑧⑦ 明治神宮記念碑……………一三三
- ⑧⑧ 藤野巖九郎碑……………一三三
- ⑧⑨ 足羽山古墳群表示石柱……………一三五
- ⑧⑩ 北栄造顕彰碑……………一三六
- ⑨① 福井平和塔（仏舍利塔）由来碑……………一三六

三十三間堂・郷土植物園

- ⑨② 労魂賦……………一三七
- ⑨③ 齋木重一碑……………一三七
- ⑨④ 三十三間堂跡……………一三七
- ⑨⑤ 北緯・東経・標高表示石柱……………一三七

瑞源寺

- ⑨⑥ 三宅丞四郎機業功績碑……………一三七
- ⑨⑦ 富田鷗波墓……………一三八
- ⑨⑧ 河津直入墓……………一三八
- ⑨⑨ 松平吉品御霊屋……………一八三

○本書は、足羽山に散在する史跡・墓碑石の中から広く一〇〇箇所を選び解説し、足羽山散策の案内書として編集したものである（但、西墓地公園・福井市忠霊場を除く）。

○本書は全体を二三の区域に分け、足羽山の北から南へ順を追って解説してある。

○各区域毎に分布図（周辺図・部分拡大図）を収めたので、散策の折に利用されたい。

○付図には福井市基本図を使用した。

●石材に福井特産の笏谷石（火山礫凝灰岩）を用いているものについては、特に「笏谷石」と注記した。

●解説部分の通し番号は、

付図に記された番号とすべて一致している。

●行間に②などあるのは参照番号で、その番号の解説を参照されたい。

①●高野春華墓（笏谷石 南面）

運正寺墓地

福井藩儒学者。名は謙、通称惣左衛門。宝曆十一年（一七六四）四十四歳の時、家職を真齋に譲り、諸国を歴遊して、文政六年（一八二四）詩歌俳諧・音楽等の奥義を究め、中でも、福井の雅楽は春華に七十九歳で病歿した。

●墓は真齋の墓と台石を共用しており、表面に「春華先生之墓」墓誌が見える。

● 碑文の行数を示した。注

記のないものは原文形のまま植字してある。

○ 使用字体は原則として常用漢字を用いた。

● 欠損によって文字が判読できない場合は□および

□で示し、その右横に推読される文字を()

で注記した。

○ 本書の編集・解説は、学芸員西村英之・足立尚計が担当した。

(表紙 福井藩十二ヶ月年中行事絵巻部分)

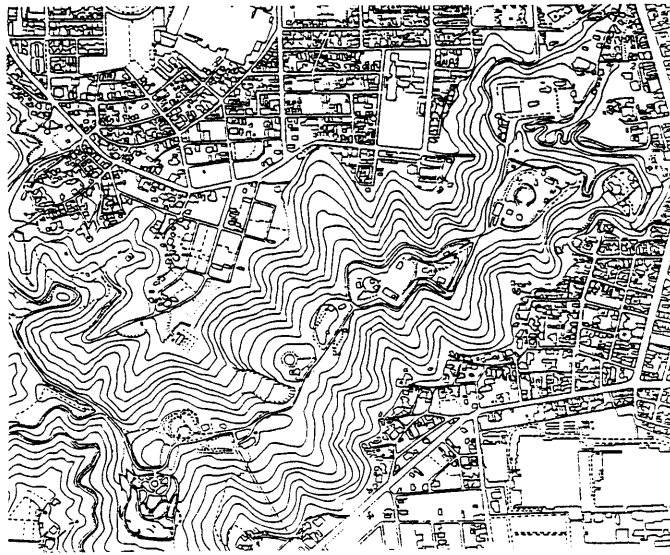
(裏面) ● 一七字×九行

先考諱謙字君素高野氏春華其号宝曆十一年六月十一日生寛政六年代考祐齋府君継業仕□文化紀元以病休息爾後屢遊于四方文政六年在江戸応召入藩邸為世子親随十一年罷家居十

二年
月廿

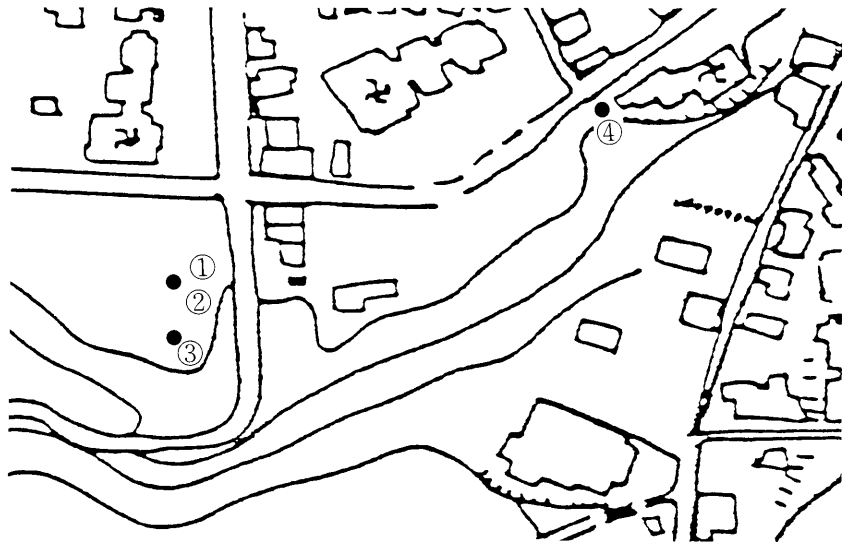
② 高野真斎

福井藩



二誌

運正寺・妙觀寺



① 高野春華墓 (笏谷石 南面)

運正寺墓地

福井藩儒学者。名は謙、通称惣左衛門。宝暦十一年(一七六一)六月、藩の儒官の家に生まれる。四十四歳の時、家職を真齋に譲り、諸国を歴遊して文政六年(一八二三)再び藩に仕えた。書・兵学・武術・詩歌・俳諧・音楽等の奥義を究め、中でも、福井の雅楽は春華に始まる。天保十年(一八三九)二月、七十九歳で病歿した。

墓は真齋^②の墓と台石を共用しており、表面に「春華先生之墓」と題し、裏面に真齋撰文の墓誌が見える。

〔裏 面〕一七字×九行

先考諱謙字君素高野氏春華其号宝暦十一年六月十一日生寛政六年代考祐齋府君継業仕国文化紀元以病休息爾後屢遊于四方文政六年在江戸応召入藩邸為世子親随十一年罷家居十二年再起為文学格式末番外天保六年加内班文学如故十年二月廿三日病歿享年七十九無正室妾出一女義子名進

孝子進泣血稽顙誌

② 高野真齋墓 (笏谷石 南面)

運正寺墓地

福井藩儒学者。名は進、通称半右衛門。天明七年(一七八七)



高野春華・真齋墓(右が春華墓)

四月、福井藩士広部延庸の次男に生まれ、藩儒高野春華^①の養子となる。少年期の藩主松平春嶽（慶永）に儒学を教え、のち、藩校明道館の教授となった。安政六年（一八五九）九月、七十三歳で歿した。

墓は養父春華の墓と台石を共用しており、表面に「眞（高）□□高野先生之墓」と題し、裏面に長男勉撰文の墓誌、台石表面に「高野氏」と刻まれている。

〔裏 面〕 二二字×一〇行

先考諱進字德卿号真齋広部延庸之次子也天明八年丁未四月十一日生享和三年癸亥為祖考春華府君義子是歳春華府君致仕先考嗣天保十年己亥歳五十三擢為儒者見習数従公駕于江戸弘化三年丙午以功増賜俸禄為儒者本役班書院番組嘉永五年壬子加内班安政二年乙卯始創明道館以先考為教授班末番外内班如故四年丁巳以老致仕勤仕五十五年祇役于江戸凡五次六年己未九月朔病歿歳七十三娶塚谷氏有三男三女長子勉襲禄二男一女天二女適某々

孝子勉泣血稽顙誌

③ 旧福井藩士奉納石燈籠・同寄付者名列碑 （笏谷石 北面）

運正寺墓地

幕末の福井藩主松平春嶽（慶永）の一周忌にあたる明治二十四年（一八九一）六月、旧藩士等が運正寺の廟所に奉納したもの。

燈籠は左右一对、廟所へ登る階下に建立され、現在は基礎石・竿のみが残る。向って左、竿の部



旧福井藩士奉納石燈籠(中央が寄付者名列碑)



同上 (越葵文庫蔵)

分に「従一位慶永公広前」(正面)、「旧福井藩士」(右側面)、「明治二十四年六月」(裏面)と見える。また、燈籠の奥に寄付者名を刻んだ名列碑があり、寄付者総数は七八七名を数える。その中には東京美術学校々長「岡倉覚三」(天心)の名前も見え(正面十一行)、福井との係わりを考える上で興味深い。

運正寺は松平家の菩提所の一つ。戦前まで松平家代々の御霊屋みたまやがあった。「家譜」草稿によれば、春嶽の廟所は明治二十三年十一月に完成し、遺髪が納められた。

〔名列碑正面〕 一行一五名×一六行

從一位松平慶永公広前石燈籠寄附者人名

狛	甲	江	福	福	高	長	柳	有	渡	高	津	細	鈴	佐	從
教	斐	守	島	島	橋	谷	下	賀	邊	村	田	井	木	々	一
澄	信	諒	忠	敬	寬	川	士	琢	洪	成	束	修	周	木	位
	夫		平	典	輔	喬	興	二	基	存	束	吾	一	長	松
														淳	平
														厚	慶
														亮	永
														大	公
														島	広
														正	前
														人	石
														人	燈
														名	籠
														者	寄
														附	附
														者	者
														人	人
														名	名

長谷部辰連	青木成一	半井澄	瓜生寅	柄田弥三治	村田熊造
小木淳	市村祥彦	南部彦夫	杉田惟衛	大井健一郎	塩見栄三郎
古市八音	香西正雄	田辺政之助	松平正直	水野行敏	石原虎雄
山形修人	吉田為誠	増村嘉則	中野公武	大橋小太郎	横山彦六
佐野影規	東郷龍雄	石塚左玄	真柄孝	大山重	山田董
南部球吾	中根牛介	柳本直太郎	出浦力雄	加藤恒	埴原三十郎
中山幸吉	伊藤勉之助	寺島小五郎	菅沼秋	辻岡卓	井上穆
桑原秀作	蘆野三省	水谷虎作	青山貞	南部広矛	大谷如水
前田端	寺木定芳	中野哲之助	小栗重固	岡倉覚三	山形廉夫
毛受洪	鈴木重弘	乙部尚志	後藤雄吉	大谷深造	新宮涼園
由利公正	能勢久成	横井速雄	福島与三郎	大森利学	岡倉真範
山田又左	木下十之助	多喜民也	萩原縫	原益雄	武田正一郎
川崎実	浅見岱輔	大館尚氏	田辺良顕	佐々木千尋	狛元
増田敬信	高橋捨六	妹尾義稠	山田慎	海福悠	小笠原幹
鈴木準道	土屋時之助	山崎弘威	田島蕃樹	高村高	有賀清門
齋藤修一郎	栗塚省吾	阿部正義	川崎久吉	今北一清	牧野洋
増田綱	吉川忠彦	水野珍義	田川乙作	滋賀有作	横山軍治

林野 曠	八尾 彰	東郷理平	久須見賢葉	瓜生 復	野村朝重	日比 登	本多三重	荒川沢之助	南部常次郎	高屋新太郎	天谷五郎七	村田氏寿	堀 運平	齋藤秋夫	牧野 実
山田 博	加藤良平	加藏忠太郎	塩見 規	楠 量志	山品捨録	坪川鋭夫	鈴木浅次郎	牧田新太郎	岩路維平	沢崎廉二	山 昌	佐々木 曠	水野太郎	笹川章門	猪坂順進
勝山千百里	大久保武雄	若林 寿	大西敬春	小栗 環	山本鏗一	波多野 進	広部守根	下山輔助	高桑 実	笠井 直	山崎幾太郎	松本源太郎	鈴木亦一	松平正秀	内田 衝
長谷川 剛	松原栄之助	大谷一枝	生駒耕雲	山本居敬	川崎熊治	森田政武	山形仲芸	津保知良	齋川夏吉		久我次郎	中村正彦	高島以正	和田直静	山脇 玄
三好喜十郎	水野 清	大谷 巖	溝江八郎	市橋乙吉	岩城五平	伊藤金八	東 美庫太	樋口幾太郎	島田重民		水野 巽	小栗 誓	国本孝造	大野外吉	本田釣月
佃 貢	島田清太郎	石川 雪	土屋 智	多賀谷 淳	山口秀二	太田 寿	勝木十藏	山口 透	波多野寅三郎		村野達雄	海福 雪	石田厚哉	林 勝利	狛 林之助

〔左側面〕 一行一五名×一八行

井原頼尊	牧野恒雄	長谷部他作	中村 清	西尾正樹	川崎捨次郎	辻岡直江	福山 基	指物常吉	長谷川浜之丞	小村 績	鈴木 薫	勝木立根	平井忠弥	高階常夫	萩原庸介	横山 強
西岡豊一	佐藤 甫	高村慎吾	長谷川巳喜馬	波伯部捨四郎	川越沿之助	油比景頼	安西五郎吉	円乗嘉吉	岡本金吉	西村元長	荒木初次郎	相沢唯之助	石井久次	山口友信	阪野秀雄	高田波門
比企 忠	松原四郎	酒井楳三	平瀬作五郎	石崎宜陳	粕谷智恩	桑山 正	稻沢金五郎	高松清平	宮川精一	西本信良	中村義三郎	石渡秀実	高橋恒太郎	山崎 悠	永見 裕	松村志計里
木村正敏	仙石友雄	川崎数衛	河野通経	中村岩人	木内盛潔	安本喜太郎	奥山政堅	木内盛裕	稻葉俊之助	永田 重	千田 中	屋代 豊	西川小源太	鈴木 敏	米岡斯近	和田春孝
山口 基	八田知勝	永山以清	菅沼 宗	長谷川源之丞	栗原義信	横井 豁	今村平六	野村 晋	堀 庸	上野 弘	佐藤喜平	井部初吉	野村 邃	矢崎 章	中村理喜三郎	中島五三郎
石田孫作	下山貫雄	戸田成輔	木谷不二夫	皆川広継	木村 連	杉山 寛	吉池喜藤太	堀 庸明	秋田三吾	南部貞介	中村量哉	美濃部八十二	中村 申	長谷川貫一	平岡平蔵	岡 規

水谷恒次郎	波多野 惇	山田卓介	小川俊一	高橋星雄	竹下丈夫
周防謙介	藤田平吉	長 啓吉	太田 正	吉岡 守	山本新太郎
尾崎庸夫	松平正道	萩野秋夫	田辺 栄	彦坂矩平	高島忠愛
谷口安定	村野文次郎	沢田清志	島津将監	波多野義衛	竹内弥生
飯島源橘	河崎復太郎	市村庸義	加藤藤左衛門	林 興子	山元堪七
武田信敏	松本壬生	野坂 豁	東条他次郎	依田勘介	小野武次郎
加藤勝太郎	水野盛栄	島田開造	成田重喬	林 松蔵	三崎 豊
加藤寛治	萩原直衛	大宮藤太郎	喜多島鉄三郎	関 雄也	小野 寛
若林鐘太郎	飯沼静夫	<small>故加賀九郎右エ門 妻 慈鏡</small>	中山復根	来成 明	土屋淳介
玉村敏弥	比企儀長	大平嘉忠太	三好文夫	矢崎政次郎	草間宗軒
甲斐十一郎	木沢佳年	土屋靖也	梯 三男	中川 節	朝倉謹尔
鈴木マキ	今村喜与作	井原頼一	田辺源吾	岡田喜藤太	雨森元成
草尾一馬	井原多頼	石田喜之介	皆川 亘	並木立弥	高橋 昇
田辺朔郎	溝口興禎	津田左蔵	川崎 一	八木十九一	土屋且造
小栗諒之介	野瀬武志	出淵 肇	屋代数馬	内田恒太郎	山田 均
相馬 恒	細井登良	高島愛之	海福成夫	神谷豊功	寺田 遙
戸田 承	神谷常之助	川崎平三郎	相馬収夫	辻岡精輔	牧野四郎

	〔裏〕〔面〕 一行一五名×一〇行・一行一四名×八行	原田 博	佐久間 正	三坂 功	林田弥之助	武 直二	宇都宮 務
		皆川 徹雄	小野友之助	野村 敬藏	熊川 知之	山田 誠也	小島 喜平
		北下 熊藏	宇野 実	波々伯部繁辰	川村 豊作	堀 復太郎	岩上岩三郎
		鮎川 平藏	中村 真藏	土生 彰	中島伊藤治	毛利 元藏	長崎 基敏
		奈良 高陳	吉川 素行	鈴木金太郎	吉田 義氏	鈴木外次郎	榊原 厚
		竹内 武平	相沢 猶之助	久野 清恒	黒川宣太郎	大西 林助	佐久間 直
		秋田 豊介	生駒彦太郎	南部 雅広	横山 順	齋藤 熊雄	寺本 弥六
		尾高 小太郎	谷島 吉郎	堀 一二	今村 弥太郎	蜷川 涼	加藤 茂門
		西尾 雄藏	竹中 栄四郎	和田 彦六	佐々木 明順	浅井 政由	高橋 外六
		水谷 一枝	松山 喜勢太	宮川 喜又	加納 庸吉	西沢 栄太郎	石川 潔
		数賀山久門	円 乘博之	引間近思郎	吉田 弘	金沢 正和	山本 牧二
		吉田 保寿	高田 利雄	川村 涼	大井田 豊	新海 雄次郎	大越 直暁
		菱川 喜之	山崎藤十郎	吉樹友太郎	吉田源八郎	伊代 栄太郎	高木 政治
		島田 庄八	上野利喜次	野村 勘吾	恒岡 琢磨	真田 幸衛	小沢 重吉
		林 新太郎	沢田弥三郎	村井 敦	梅野 源吉	佐久士 賢造	今村 良助
		山口 喜貞	富田 久夫	大藤 直哉	井坂 末吉	秋月 久	加藤 銀

堤 捨吉	吉江德衛	小林 寿	村野近良	町村金弥	荒川喜六	室田文吉	河崎鉄弥	牧野喜代太	岡部 □	宮塚又五郎	村松元吉	吉田利平太	小牧徳一郎	朝倉友八	久野 新	宇都宮孝一
奥村初太郎	藤井 実	上野 孝	伊藤義見	渡辺真十郎	松村重規	吉田一学	古市利三郎	矢野虎太	梶川助之丞	大橋正至	加藤常之助	明石 力	松尾新太郎	中田牛蔵	増田 新	渡辺 蓬
大谷光熙	大野淑人	窪田貫一	安達光敬	田辺庄司	村上正孚	西脇坤太	川村隆輔	磯田執敬	藤田寿三郎	今川益太郎	石黒方尔	生田準内	大村敬太郎	神谷定準	藤井鉄二郎	谷口三郎
泉 利吉	石黒光信	藤田朴治	高村歌織	波々伯部弥六	長 金吉	松永秀太郎	薬師寺宇一	岩井末吉	室田文六	小島平馬	岩佐 資	山田右仲	武沢松五郎	山中雷之介	伊藤又太郎	牧野雄五郎
内海謙士	坂部簡太郎	柳下一郎	渡辺嘉平	武内惣太郎	若杉八百太郎	武田正雄	瀬尾 嵐	岩佐新介	小島逸八	大久保介寿	青木玄成	大森東八	寺本曾登八	横田兵蔵	吉田秋秀	飯島多三郎
戸倉志賀八	河津直入	樋口悌吉	加藤弘毅	野坂貞雄	本多七平	小村新十郎	中村陽三	杉坂養道	杉山保定	久野武雄	岩佐平造	高橋吾之輔	松村清三郎	吉田居直	来栖寛之介	土肥祇雄

久世 久	森田 伝衛	林 泉友	青木 正敏	松尾 仙十郎	竹下 丈太郎
沢田 畦造	竹島 仙太郎	広部 藤太	久世 正治	村田 千熊	藤本 恒幸
上野 幾平	白崎 磯次	藤沢 豁亮	白石 小十郎	桑山 十蔵	下坂 康次
青木 修太郎	安川 幸吉	漆崎 昌直	高橋 敏重	吉村 丈太郎	竹内 珪三
中川 ナヲ	岡他 家男	桑原 市三郎	沢崎 洵	内田 恒太郎	堤 武門
森沢 直衛	都築 專吉	堀 繁治	町田 賀寿雄	高垣 栄次	皆川 屯
依田 周造	国沢 肥久馬	佐野 喜多次	栗田 智則	久保 フサ	竹村 鎮平
笹倉 練平	沢木 浅之助	富田 知剛	金井 捨三郎	川地 宏	寺田 祐綱
宇野 新	林 信勝	竹内 捨吉	田辺 操	荒木 主馬	大久保 熊二
中村源之丞	飯塚 荒士	望月 琢二	山崎 完蔵	久津見 登志衛	木村 静寿
山本 美文	津保 文之助	宇野 魁介	丹羽 三省	島津 武門	大久保 恒
中村 惇	義江 新平	渡辺 一九郎	三田村 千瓢		

〔右側面〕

明治二十四年六月

皆川 広繼謹書

建設委員

萩原 乙作
田川 乙作

石工 藤間 庄之助

④ 橘健子墓 (笏谷石 南面)

幕末の歌人橘曙覧の三女。天保十五年(一八四四)

二月、曙覧三十三歳の折、痘瘡を患って夭折した。享年四歳。

墓は正面に「(男)遊童(女)□□」(女)とあり、左側面に曙覧自筆の歌が彫り込まれている。

〔左側面〕 六行

今とし四歳にて身まかりける むすめ健子かなきからを 此所にをさめて

迦しのみひとりはいかて おくつきをならへて父も こゝにすむ身そ 橘尚事

〔松籟草〕(『志濃夫廻舎歌集』所収)

むすめ健女、今とし四歳になりにつれば、やうく物がたりなどしてたのもしきものに

思へりしを、二月十二日より痘瘡をわづらひていとあつしくなりもてゆき、二十一日の

暁みまかりける歎きにしづみて

きのふまで吾衣手にとりすがり父よ父よといひてしものを

健女みまかりて後、いくばくもあらぬほどに山本氏が府中にもものして帰るさ、れいは

待むかへよろこべりしをさなきことをせちに思ひいでて

声たてぬすもりかなしみねぐらにもかへりうくする親鴉かな

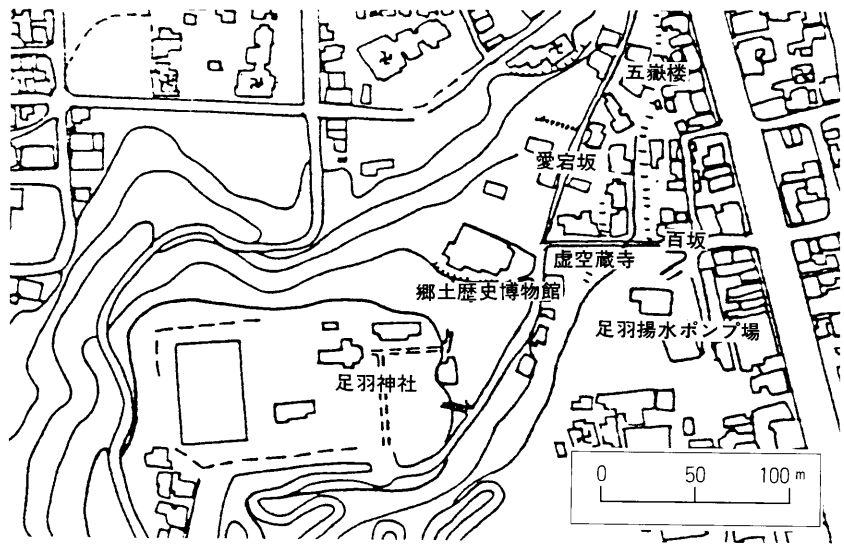


曙覧三女健子の墓

妙観寺墓地

橘 健 子 墓

愛宕坂・百坂



⑤ 橘曙覧黄金舎跡 (笏谷石 西面)

五嶽楼前

幕末の歌人・国学者として知られる橘曙覧の宅跡。曙覧は文化九年（一八一二）福井城下石場町（つくも一丁目）に紙商正玄五郎右衛門の長男として生まれる。少年時代は府中（武生）の母の家で養育され、日蓮宗妙泰寺明導に就き仏教を学び、のち京都へ遊学して児玉三郎から漢学を学んだ。しかし、我国の古典の研究に志して飛騨高山の国学者田中大秀（宣長門）に入門し、弘化三年（一八四六）家業・財産を異母弟に譲って足羽山に隠棲した。これが黄金舎である。その後、三ツ橋（照手三丁目）に移ったが（藁屋、のち志濃夫廼舎）、清貧の中で国学と作歌に精神し、近世末期の国学の精神に燃えて独自の歌風を樹立した。慶応四年（一八六八）八月、五十七歳で歿した。碑は昭和二十五年十一月、福井市によって建立された。

〔正面〕 二〇字×一〇行

橘曙覧黄金舎跡

曙覧が家業を弟直に譲つて隠栖後最初に居住したのが此処である。彼は此処に居住して之を黄金舎と名づけ、終焉の地三ツ橋に転居するまで三年間即ち三十五才より三十七才までを此処に過して、文学にいそしんだ。歌集の第一首目に阿須波山（註足羽山）にすみける



橘曙覧黄金舎跡

ころと詞書して 此処で詠んだ あるじはと人もし問はば軒の松あらじといひて吹かへしてよ
という歌が載っている

〔左側面〕

昭和二十五年十一月 福井市

〔松籟草〕（『志濃夫廼舎歌集』所収）

阿須波山にすみけるころ

あるじはと人もし問はば軒の松あらしといひて吹かへしてよ

秋のころ人しげく来にけるにわびて

顔をさへもみぢに染て山ぶみのかへさに来よる人のうるささ

朝ぎよめのついでに

かきよせて拾ふもうれし世の中の塵はまじらぬ庭の松の葉

世をのがれてのちは、それとたのむべき生業もなく貧しう物しければ、人もやしなはず

何わざも自らうちしつづ辛きめのみ見つづぎにけるを、此ころひでりうちつづき汲む

井の水涸れぬれば、さらに遠きわたりより妻のくみはこびつづ苦しともせで物するをあ

はれに見なして

汐ならで朝なゆふなに汲む水も辛き世なりと濡らす袖かな

⑥ 細井順子紀功碑 (笏谷石 南面)

虚空蔵寺境内

製織技術者。名はじゅん。天保十三年（一八四二）、足羽郡下六条村（福井市）の農家竹下久次郎の長女に生まれ、長じて福井の呉服商細井万次郎に嫁ぐ。明治九年（一八七六）、官費伝習生として京都府織工場に派遣され、バツタン機による製織技術を学び、帰郷後、織工の養成と技術の向上に努めた。福井に於けるバツタン機導入に多大な功績を残し、大正七年（一九一八）九月、七十七歳で歿した。

紀功碑は明治四十一年、順子六十六歳の時に建立されたもので、その右隣に「細井順子碑」（裏面

「昭和四十一年八月補修再建 細井保二」がある。

〔正面〕 四〇字×一四行

細井順子紀功碑

余嘗修福井県機業史 至女子細井氏 始伝泰西飛梭機用法 歎曰 福井県機業之盛 昉□用飛



細井順子碑



細井順子紀功碑

梭機 用飛梭機 始于細井氏 区区一女子 而為機業勃興之功首 使鬚眉男子 瞠若於後 可謂寄且偉矣 細井氏 名順子 足羽郡六条村竹下久左衛門女 以天保十三年七月三日生 長嫁細井万次郎 從事紡織 明治九年 以官命 學泰西織法於京都機業場 業成歸鄉 会有創設織工会社者聘氏為師 氏欣然諾之 教授徒弟 當時未通於工學 無製造修繕飛梭機者 是以操業之際 左支右吾 困蹶拜臻 而氏不毫屈撓 拮据黽勉 研鑽弗懈 換七裘葛 而其技頗□ 其業大振 以迄今日 泉人無不知飛梭機者 產絹至算一千九万円之多 蓋氏率先之功也 今茲戊申 氏齒六十有六 行將告老 有志者相語曰 凡有功於機業者 如酒井小川三宅諸氏 皆有刊石之文 而独無功首細井氏之碑 豈非一大闕典哉 乃欲建石勒其功 謁文於余 余嘉其志 乃叙概略 繫之以銘 曰

織々之手 以紡以織 富潤一泉 名播四域 斯建貞珉 大書深刻 永示後昆

庶靡懈忒

明治四十一年七月 土生 彰撰

發起人

黒田与八

堀江次郎作

西野市兵衛

安川平三郎

〔左側面〕

浜与左衛門	竹谷彦平	柳田与平
開田幸吉	竹内勝馬	松下藤吉
笠島留吉	田中由左衛門	藤井伊太郎
加藤伊右衛門	竹下久米太郎	藤田治平
吉江多吉	村上武雄	宮川吉之助
吉田甚□	野尻平三郎	

⑦ 齋殿清水跡 (笏谷石 東面)

百坂登り口

足羽山中腹に鎮座する足羽神社の御饌炊水と伝える清水で、「足羽社記略」(足羽敬明 享保二年一七七)に「諺曰是古盛時足羽社朝夕之御饌炊水宜哉齋忌之言也」と見える。

〔正面〕 一三字×八行

齋殿清水跡

この場所には 昭和初期まで齋殿清水と呼ばれる泉があり 古くは足羽神社の御神水として用いられた いかなる 炎天にも枯れることがなく 市民の絶好の納涼場として親

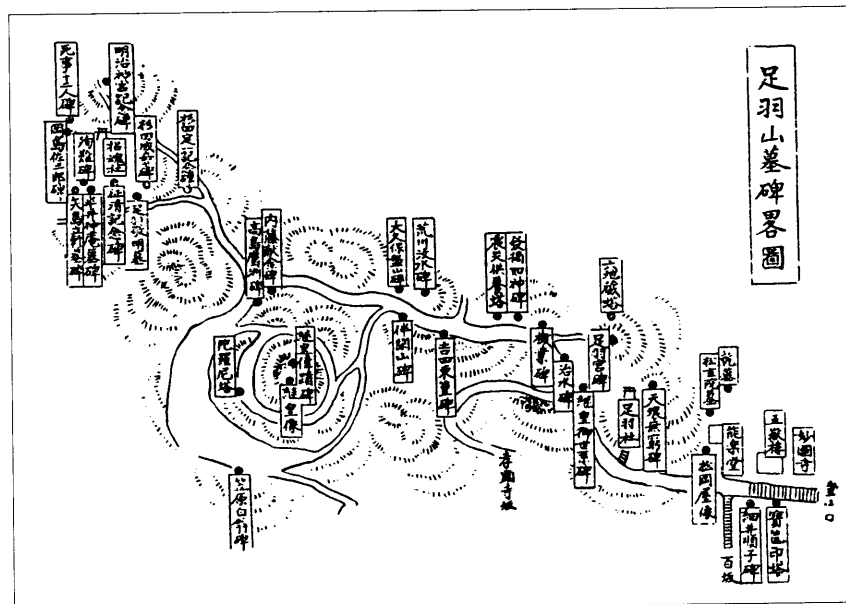


齋殿清水跡

しまれた

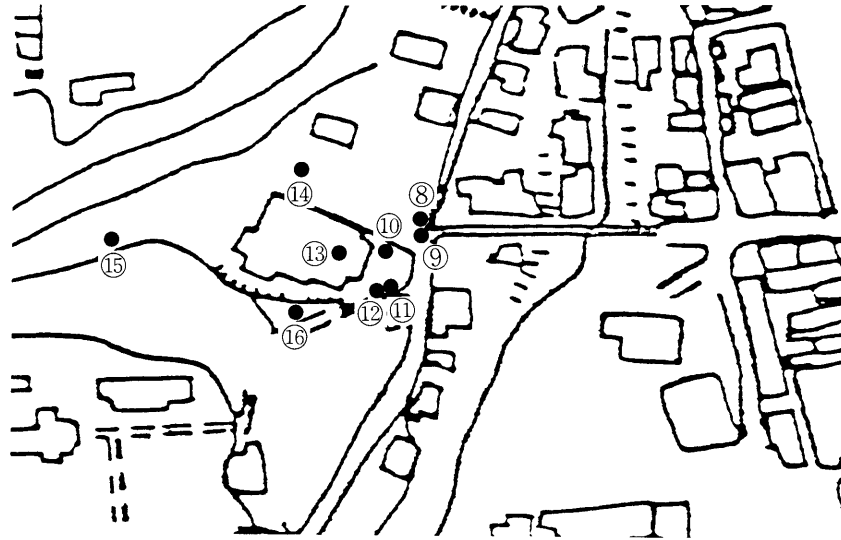
〔右側面〕

福井市



『若越墓碑めぐり』挿図（昭和5年 石橋重吉）

鄉土歷史博物館



⑧ 松玄院常夜燈 (笏谷石 東面)

歴史館前庭

愛宕山遊樂寺松玄院(天台宗。現、歴史館敷地)は、天正四年(一五七六)北ノ庄城主柴田勝家によって一乗谷から足羽山に遷された愛宕山遊樂寺の別当寺で、江戸時代、歴代藩主の保護を受け、六十六所観世音順礼第五十三番札所(『越前国名蹟考』)として崇敬を集めたが、明治以降退転した。

常夜燈は文化十四年(一八一七)十二月、比叡山蓮光院豪栄が実乗院統観法印の遺囑により建立したもので、はじめ愛宕大権現社境内にあったが、のち元治元年(一八六四)、山田仁右衛門等によって現在地に移築された。竿の部分に左の銘文がある。

〔正面〕

愛宕山大権現

比叡山蓮光院豪栄受実乗

〔裏面〕

院統観法印遺囑謹建

〔基礎石裏面〕

文化十四丁丑年季冬

石工

当山現住統信

内山

〔右側面〕

世話人

元治元甲子年

山田仁右衛門

九月吉日

津田市太夫

此地江引建之

山 仁兵衛

永代油寄進

向山村中



松玄院常夜燈

喜右衛門

同

永善

三郎右衛門

世話人

末沢利兵衛

当山現住亮光代

⑨ 橘曙覧歌碑 (西面)

昭和四十年八月、福井県短歌人連盟が明治維新百年・曙覧歿後百年を記念し、黄金舎跡^⑧に近い歴史館前庭に建立したものである。碑の表面に曙覧の代表的な和歌「春のはじめ古事記を開きて はるにあけて先づみる書も天地の はじめの時と読みいづるかな 曙覧」が彫りこまれ、裏面に「百年祭記念 昭和四十年八月二十八日立碑 福井県短歌人連盟」と刻まれている。

歴史館前庭



橘曙覧歌碑

⑩ 岡倉天心像 (雨田光平作 北面)

昭和三十七年十一月、天心の生誕百年を記念し、県文化協議会が主体となり建立したものである。天心は文久二年(一八六二)、岡倉覚右衛門の次男として横浜に生まれる。父は福井藩士で、横浜

歴史館前庭

開港まもなく藩主の命を受けて横浜に移り、越前羽二重・生糸を商う商人（石川屋）となった。天心は早くから英語・漢学を学び、東京大学在学中、フェノロサに感化されて芸術的視野を広め、日本美術の近代化に努めた。明治期の伝統的日本文化と西洋文化の混在する中、欧米の文化を理解するとともに東洋の優れた芸術性を広く世界に紹介し、日本美術史上に多大な足跡を残した。大正二年（一九一三）五十一歳で歿した。

① 松岡屋吉兵衛石像（笏谷石 北面）

福井城下立矢町の商人。文政十一年（一八二八）戸毎に寄付金を募り、足羽山へ登る愛宕坂・百坂を修復した寄附者として知られる。

石像は工事に携わった石工等が石段と同じ笏谷石をもって造り、両石坂を見下す松玄院境内（現、歴史館敷地）に建立したもので、台座正面に「坂建立世話人松岡屋吉兵衛」、右側面に「文政十一年



岡倉天心像



松岡屋吉兵衛石像

歴史館前庭

子三月吉日石大工加茂村吉五郎」と刻まれている。

なお、若越新聞四〇三号（「越前人物志」所引）に、「石人の首を接ぐ記」として「憐れなるかな此像の、首の全く落たるは、其時妬める人ありて、一夜に首を打落す拾ふて載れば又転げ、面部はいつも疵だらけ、噫善人の功勞を、妬むは独これのみか、そゞろに感涙堪ざれば、医者にあらざる石屋呼び、像の首つぐ大手術、全く効を奏しけり、（略）明治三十三年四月三日 菱洲釣人」と見える。

⑫ 真田地蔵 （笏谷石 北面）

元和元年（一六一五）の大坂夏の陣で敵方の武将真田幸村を討取った福井藩士西尾仁左衛門が、幸村供養のため西尾家の菩提所孝顕寺に建立したもので、俗に真田幸村首塚とも呼ばれるが、西尾家では幸村の鎧袖を埋めたものと伝えている。昭和五十年六月、西尾家の希望により歴史館前庭に移築された（台石は新規作成のもの）。

〔背面〕

元和元年

大機院真覚英性大禅定門



真田地蔵

歴史館前庭

三月初七日 西尾氏立之

⑬ グリフィス遺愛の日時計と台座

W・E・グリフィスは明治初年、福井藩校明新館の理化学教師として来日したお雇い外国人。

日時計はグリフィス歿後の昭和四年（一九二九）十二月、フランシス夫人より贈られたもので、福井市では大理石製の台座を作って足羽山公園に設置したが、日時計は散逸した。

〔台座周囲〕

THIS DIAL IS PRESENTED BY HIS WIFE FRANCES KING GRIFFIS
IN GRATEFUL APPRECIATION FOR THE WELCOME ACCORDED

ON THE OCCASION OF HIS RETURN TO JAPAN IN 1927

WILLIAM ELIOT GRIFFIS PIONEER EDUCATOR AUTHOR OF THE MIKADOS E-
MPIRE

〔台座上端の周囲〕

MANY WATERS CANN [] OUE []



歴史館展示室

日時計台座

⑭ 敦賀セメント株式会社記念碑 (東面)

歴史館前庭

当館は昭和二十八年、復興気運の高まりの中、郷土博物館(現、郷土自然科学博物館)に次いで建設された県内三番目の博物館で、設立当初の予算総額は一三、九五四、〇〇〇円(敦賀セメント株式会社よりの一、〇〇〇万円の寄付を含む)であった。

(表 面) 二三字×三八行

この郷土歴史館は主として敦賀セメント株式会社の厚志によつて成つた。同社は昭和十年熊谷三太郎三谷弥平等相諮り、郷土産業振興に資する目的を以て、県内敦賀市に之を設立したもので、具に創業の辛酸を重ねて社礎を確立した。当時の同社役員は左の通りであつた。

取締役社長	熊谷三太郎
専務取締役	三谷弥平
取締役	安本吉次郎
同	飛島文吉
監査役	前田又兵衛
同	中村松吉

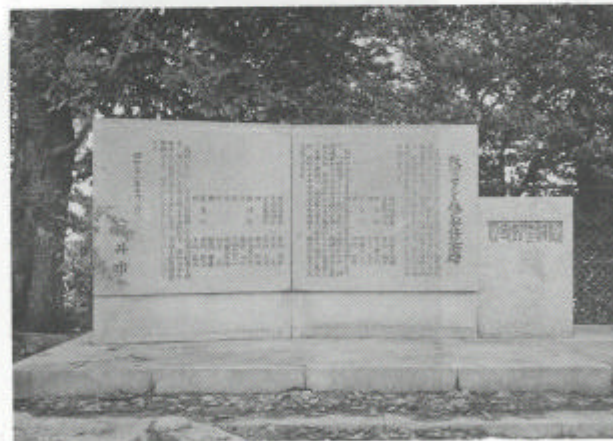
昭和十五年七月当時の政府の企業整備方針によつて、一時磐城セメント株式会社に合併されたが、終戦後昭和二十三年一月再び分離し、取締役会長に熊谷三太郎、取締役社長に三谷弥平がそれぞれ就任して業務を再開し、鋭意其の発展に努めて現在に及んだ。昭和二十六年熊谷三

太郎逝去 現在の役員は左の通りである

取締役社長	三谷 弥平
専務取締役	三谷 進
常務取締役	浮田 甚七
同	中川 六郎
同	熊谷 太三郎
同	岡本 八平
同	三田村 俊一
同	前田 又兵衛
同	稲沢 修
同	飯島 由直
同	田代 友治
同	三谷 進三

再開以来役員従業員一致協力して社業の振興を図り 幸い次第に業績の向上を見たので 昭和二十七年十二月再開五周年を迎うに当り 当郷土歴史館建設費として 福井市に金壹千万円を寄贈したものである

昭和二十八年十一月三日



敦賀セメント株式会社記念碑

⑮ 乾出雲墓 (笏谷石 東面)

福井藩の蒔絵師。名は博枝。福井城下米町(順化二丁目)にあって種々の蒔絵物を手がけ、その作品は「乾蒔絵」として賞玩された。安永三年(一七七四)八十三歳で歿し、拝領地にある生墓(生前に建てられた墓)に埋葬された。

歴史館裏

墓は裏面に「此山分石之内永代拝領享保十二年

丁未七月廿五日蒙仰 俗名 乾出雲博枝(花押)」

右側面に「先祖代々法界万靈」、左側面に「是人於
仏道凌定無有疑 いつよりか闇の時雨にぬれし身
もけふほしあくる法の明けほの」、正面に「八品所
題 本因妙 上行下種 久遠院宗暹日居士」と
刻まれている。



乾出雲墓

⑯ 小竹才六碑 (北面)

金沢の能役者。明治四十二年(一九〇九)福井宝生倶楽部の結成に携わり、以後、福井に出張して後進の指導にあたった。大正三年(一九一四)福井市に転居し、福井能楽堂(現、歴史館敷地)

歴史館南側斜面

の建設を支援するなど、福井の能楽界に多大な足跡を残した。同五年能楽堂完成の翌年、六十九歳で歿した。

〔正面〕

小竹才六翁之碑

〔裏面〕

福井宝生倶楽部

稲木喜作

丹羽丹次郎

大矢精四郎

河村房太郎

玉村喜右衛門

八木武一

松田清蔵

松原富

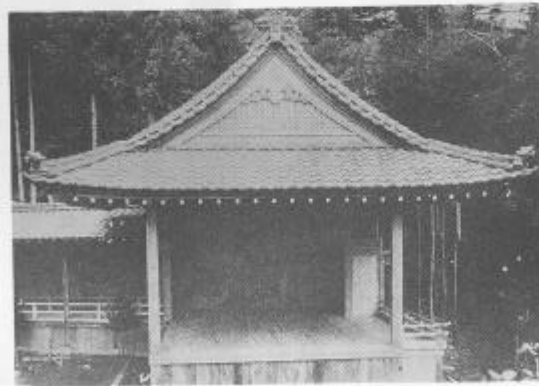
藤本幸三郎

青山藤吉

佐々川金治郎

大正八年十月

尾羽神社



羽腰能楽堂

宮崎為三

青山 山崎

小竹才六

小竹才六

小竹才六

小竹才六

小竹才六

小竹才六

小竹才六

小竹才六

小竹才六

小竹才六

小竹才六

小竹才六

小竹才六

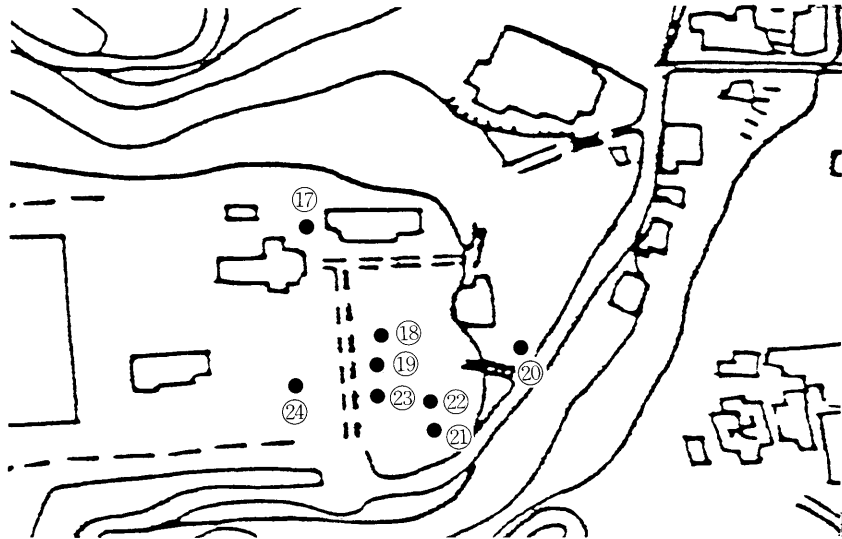
小竹才六

小竹才六



小竹才六碑

足羽神社

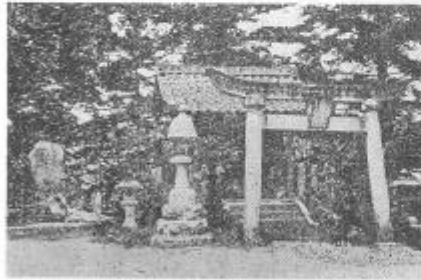


⑰ 天壤無窮碑 (南面)

足羽神社境内にあった神宝神社(昭和二十年の空襲で焼失)の由来碑で、明治二十三年(一八九〇)に建立されたもの。碑文は万葉仮名で彫り込まれ、篆額「天壤無窮」は有栖川宮熾仁親王の御染筆。

神宝神社は、明治天皇即位大典に用度掛として参列した福井藩士由利公正が、邸内に一祠を建立し、下賜された祭器を御霊代として皇祖天照大神を祀ったもので、明治四年(一八七一)上京の際、足羽神社境内に遷された。

公正は文政十二年(一八二九)十一月、福井藩士三岡義知の子として城下毛矢町に生まれる。藩政改革に尽力し、維新後は坂本龍馬の推挙により新政府の参与に登用され、財政を担当すると共に五箇条御誓文の起草にあたった。明治四年(一八七一)東京府知事となり、その後、元老院議員、



神 宝 神 社



天 壤 無 窮 碑

足羽神社境内

貴族院議員などを歴任し、同四十二年、八十一歳で歿した。

〔表 面〕 一八行

〔篆額〕
「天壤無窮」

神宝神社建設表 参謀総長兼議定官陸軍大将一品大勲位熾仁親王篆額

明治元年八月廿七日

天皇即位臣公正奉命御式廻事乎司流時仁徳川能兵潰城越開伎順爾帰須流登雖不逞乃徒総野能各地式簫集四東北乃諸藩連合志亭各其封土二扱賊勢頗猖獗宮中能多事夜呼以亭日你嗣具然里刀雖王政復古即位能盛典拳浪受婆臣等死酒斗母尚憾美阿里止力袁尽之低用度乎支辨斯食越忘留丹至流當時乃勢思不幣伎難梨天皇能盛徳浮雲能遮樓無空晴天白日大典行憐提天下廻人心始庭定満累公正御用掛乃故遠以庭御祭器能内御鏡御剣幣帛五色乃御旗御簾鋪物塙給者屢公正案布丹故有類哉神宝余授珂里之呼奉辞提天皇廻万歳廻祈權夢凶則御旗棹怨以題宮呼造離天照大神乎鎮祭志神宝神社藤称奉里福井城舟場町三岡家乃私社屠南数明治四年再奉命出京素故惋以提足羽神社廻内尼移奉里天皇能万歳皇統乃永久万民廻幸福遠祈蘆者灘理

明治廿三年秋九月

正四位子爵由利公正敬書

⑬ 綱長井

足羽神社境内

明和四・五年（一七六七・八）、足羽神社神主馬来田善卿が夢想により掘ったと伝える霊泉で、『越

前国名蹟考」(文化十二年一八五)に「深十六丈三寸但井筒共 明和四年丁亥秋の比より翌年に至て神職石見守善卿親手穿之夢想に かみよ、り其名はこゝにありながら今にほり得ぬつなかるの水 右の神詠を承て堀たる由世上に沙汰あり」と見える。

井戸端には、弘化二年(一八四五)九月に書かれた「綱長井子水記」(縦四三・五纏×横二一六・〇纏の板)があり、今もその由来を伝えている。

(表 面) 三三行

綱長井子水記

謹案延喜之紀座摩巫祭神五座曰生井曰福井曰綱長井曰波比
祇曰阿須波是謂大宮地靈矣繼体天皇自越之高向登極乃祭五
座之神于越今足羽山祠是也留皇女馬來田奉其祀皇女者今馬
來田氏所祖事詳于馬來田氏家譜矣至五十二代正五位下石見
守善卿夢神故之曰茲地当得靈泉乃從夢闕地数丈不見涓滴如
是者再焉又夢神誅之曰清夜置杯水於地三星照之必得泉善卿
乃決意闕之深十余丈果得泉焉明和四年丁亥秋始工至明年戊
子秋而畢焉下繩度之深十有六丈八十分之三百四十四不啻倩
一人家奴在上引壤耳方言綆謂之綱々長十有六丈有半而始至
泉是謂之綱長井不知古有綱長井者乎未見其跡矣今而得之夢



綱長井と綱長井子水記

所教得非網長井之神乎看星之事与玉歷所記合不亦奇哉善卿者延享元年甲子五月甲子夜半子時生
五月一陰生于地下井得泉亦在子年夫天一生水人夜氣生于子長在子為玄枵玄枵以水位在北方善卿
以是為身命之宮則天運之神降而生乎亦未可知而已矣於是乎得子水之實為之記

弘化二乙巳年九月蒔田真謹識

⑬ 足羽神社小燈籠 (笏谷石 南面)

足羽神社は、文政元年(一八一八)七月、城下

木田の大火に被災し、同三年、藩主松平治好の寄
付(十両)を得て再建された。本燈籠は社殿復興

後、松塚則安の発起によって奉納されたもので、

正面に「千早ふる神の栄も八百万いしに恵をてら
す燈火（ともしび）可学」の歌、右側面に「継体天皇紀」元

年三月戊辰条、裏面に足羽神社の略縁起、左側面

に「松塚則安発起 文政四年辛巳冬十月再建 馬來田神主善包朝臣代」と刻まれている。

(右側面) 一四字×六行

継体紀曰朕聞士有当年而不耕者則天下或受其飢矣女有当年而不耕者則天下或受其寒矣故帝王躬
耕而勸農業后妃親蠶而勉桑序況厥百寮暨于万族廢棄農績而至殷富者乎有司普告天下令識朕懷



足羽神社小燈籠

足羽神社境内

〔裏面〕 八行

足羽宮は繼体天皇当国に在時生井神福井神綱長井神阿須波神波比祇神を祭給ふ此五神を大宮地之靈と申す旧事紀延喜式等に見へたり 繼体天皇天子の位に即給んとして当国を去給ふ時自の靈を此社に留給ふ故に相殿に在神名によりて郡を足羽と云ひ氏所を福井といふ皆当社より起る也 天皇の陵撰津国にあり此陵の下の村をも福井村と云又即位の国にも足羽川大橋あり其歌万葉集にあり足羽福井ともに神の名所の名にして深きゆへあり又当社旅行を守給ふ事右歌にていちしるし足羽の文字までも知へし

㊦ 橋元近碑 (仲笏谷石 西面)

足羽神社境内

刀匠。福井の刀匠六代島田山城守国清の二男で、元知と名乗った。また、橋元近と号して狂歌を好み、俳句・囲碁にも秀れていた。天保五年(一八三四)五十歳で歿した。

碑は三基あり、向って右、表面に「橋明翁 越山謹書」、中央、左側面に「大正元年十一月建之門弟中」、裏面に「東雲庵橋明翁略伝 東雲庵」(全面的に剝離しているため、判読不能)、左、表面に「天恵繼其職」と刻まれている。



橋元近碑

②九頭龍川修治碑 (西面)

九頭龍川は越前・美濃国境の油坂峠付近を源とし、流路延長一一六キロメートル、日本海に注ぐ県下最大の河川。明治三十三年(一九〇〇)、国の直轄事業として支流を含む大規模な改修工事が行われ、同四十五年、築堤・橋梁のかけかえなど、すべての作業を完了した。工事費三八一万一二一〇円、築堤の総延長は八〇・八キロメートルにも及んだ。

修治碑は、改修工事の完成を記念し、明治四十五年六月、越前平野治水伝説の主人公、継体天皇を祀る足羽神社境内に建てられた。

(表 面) 三六字×一九行

〔九頭龍川修治碑〕

正三位勲一等法學博士子爵平田東助篆額

越前四境皆山綿互市區如列障屏窟缺西北一辺以通于海所在溪澗自高瀉下迅駛湍悍一匯于平野而後肆然西北流從缺処入于海平野之民与魚鼈為伍不聊其生往昔男大迹皇子疏鑿為九頭龍日野足羽三大川沮洳變為良田民始艾安稱功軼神禹矣其後一千一百年史乘不備治水之詳弗可得而攷慶長以



足羽神社境内

九頭龍川修治碑

降則列侯封土犬牙錯雜雖非用力於水利各藩異制利害不侔地之崇庳與川之広狭莫之或統一林政亦漸荒廢潦水至則氾濫溢潰決四出往往為鉅害以至明治初年其蓄益甚治水之議大興十九年設量水標以察水之高下二十五年置觀測所以考雨量多少且飭林政涵養水源治水之機漸熟二十七年工師二見鏡三郎探討諸川源委始立修治案不果行既而二十八年逢水荐臻田疇荒蕪有死傷者官民咸曰治水之事一日不可緩乃託土木監督署技師名井九介從第四区土木監督署長工学博士沖野忠雄之說定修治經画三十年十二月經福井県会決議稟內務大臣請為直轄工事大臣允之乃計上総工費於三十三年度予算經帝國議會協贊同年四月一日起工四十五年三月十五日竣役築堤防四万四千四百參拾九間濬河底五拾參万九千六百拾六坪設水閘架橋梁開溝渠者若干投資參百五拾貳万九千八百四拾八円第四区土木監督署長原田貞介技師名井九介董役前後在任福井県知事亦皆与而有力蓋紹男大迹皇子偉績而其功則倍徒焉去歲夏秋之交諸川大漲而不及為害歲穀大登於是乎官民抃賀曰修治之成汗邪滿車修治不成吾其魚乎因相地於男大迹皇子廟域欲立石勒其功謁文於予乃叙其梗概以資後之修史者云

明治四十五年六月上澁

福井県會議員土生 彰 撰

從五位勲四等近藤直一 書

② 繼体天皇御世系碑

(北面)

足羽神社境内

飛驒高山の国学者田中大秀(本居宣長門・安永五年^{一七}七六^{一八}弘化四年^{四七})は、早くより繼体天皇の

御世系を研究し、これを世人に正しく教え広めようと、継体天皇を祀る足羽神社の境内に御世系碑建設を計画した。この碑は門人の橘曙覧^⑤を中心に、足羽神社神主馬来田善包^{せいか}、同門の池田武万侶、山口春村等が協力し、大秀歿後の弘化四年十一月に建立したものである。なお、富田礼彦（大秀の高弟、高山の人）の『越路の日記』に石材についての記述があり、「そのいしぶみえれる石は、津の国なる御影石もて、難波人に課せてえりて船もて西の海を漕廻して、この宮居に建てられたるなりけり」と見える。



継体天皇御世系碑

〔正面〕 四九字×七行・三七字×七行・四九字×七行 上部に「玉穗宮天皇大御世系」とあり、その下中央に「品陀和気命御世系神天皇 若沼毛二俣王——大郎子亦名 意富本杵王——宇斐王——

汗斯王書紀云彦主人王 袁本杵命書紀云更名彦太尊 御世系継体天皇の系図が彫り込まれている。

伊波礼能玉穗宮爾天下知看斯天皇乃御祖能御世御世古事記爾母日本書紀尔母唯品陀天皇能五継乃御孫登能微所見氏三栗乃中世能書等尔波此大御世系袁斯荒木能弓乃非筋尔斯母引差多琉波呉藍乃末採華乃甚母慷慨多伎和邪那琉袁尊伎迦母感多伎迦母鯉白珠多麻佐加爾上宮記訓字閉乃美登夜乃布美云物尔知知乃实能父命乃御祖能御次第波曾葉乃母命能御脈乃条条海原能澳行舟乃楫音能都婆良都婆良尔録斯波斐太人能打墨繩能最正志伎伝爾斯阿礼婆日本能夜麻登御紀能积佐登志夫美尔益荒

建雄賀取弓能引乃宜玖引出多理祁理故是以吾鈴屋乃師翁伊多玖宇牟何斯美歡煩比氏石上古事記能伝志琉倍夫美爾足曳能山菅乃根乃懇尔論良弊琉袁春乃野上能初若菜今此尔採出氏虛蟬乃世人爾普玖将示登為氏秋夜乃亮祁伎月夜見尔見余玖肝向心爾覺爾覺易玖母賀母登八絃乃小琴如此波書成都琉尔那母有祁琉坐輕鳴之明宮治天下品陀天皇娶昨侯長日子王之女息長真若中比壳命生御子若沼毛二侯王此皇子娶其母弟百師木伊呂弁亦名弟日壳真若比壳命生子大郎子亦名意富富杼王此王娶中斯和命生子宇斐王此王娶牟義都国造伊自牟良君女久留比壳命生子汗斯王此王娶伊久米天皇七世之孫振比壳命生御子坐伊波礼之玉穗宮治天下袁本杼天皇也又其御母振比壳命者坐師木玉垣宮治天下伊玖米伊理毘古伊佐知天皇娶山代大國之淵之女弟苺羽田刀弁生御子伊波都久知氣其子伊波智知氣其子伊波己里和氣其子麻和加介其子阿加波智君其子乎波智君娶余奴臣祖阿那尔比壳生子都奴牟斯君其妹布利比壳命也大御父汗斯王坐近淡海之三尾之高鳴宮時聞此振比壳命甚美女遣人召上自越前之三國之坂中井鼎而娶所生袁本杼王也御父命崩去而後御母命言曰我獨特抱王子無親族部之國難養育比多斯拳之云下去於在祖三國令坐多加牟久村也然後長谷之列木宮治天下小長谷若雀天皇崩無可知日統之王故大伴之金村大連議曰坐越國品陀天皇五世之孫袁本杼命可承天日嗣云而自三國令上坐而合於意富祁天皇御女手白髮命而授奉天下也云抑此天皇乃御子三柱天下知看斯中爾太后手白髮命乃御腹爾生坐斯天國押波流岐広庭天皇乃御末叙正木蔓弥遠長尔伝波理坐氏靈剋今乃現爾明御神登坐氏天日嗣高御座乃大御業袁受繼知看来琉天皇尔大坐麻須波甚母尊玖甚母感多伎大御例尔波坐麻斯祁琉大恐大惶久方能天保登白御代乃八年登云年能六月乃月隱真

木折飛驒国乃物多爾大野郡能荏埜老人田中大秀識

〔裏面〕 一二行

恭奉稱

玉穗宮馭宇天皇作歌二首

田中大秀

美知能久知故志用伊伝麻斯氏都賀志祁琉阿麻都比都芸叙余爾多延勢奴

意富美迦微許登爾余佐斯氏与呂豆余爾美須惠能美古能久邇斯良須良志

繼体天皇御世系所載于紀紀上宮記之說審真也而既漏正史及中世以後諸書亦悉差豈不大遺恨哉余

師本居先生於古事記伝中論弁既明白然似見而知之者世未多為可歎矣余為恭製御系図附考証載于

野冊子願普播于世以広示衆人且欲勒于石建之于越前国足羽神社以永為後葉之標久矣蓋此社

天皇潜龍之日所祭

大神也余每遇越前人輒語以此事門人橋尚事聽而喜之歸国告神主馬來田氏馬來田氏請之有司奉国

君之命与同志議之終建此碑爾時弘化三年歲次丙午春正月

七十齡荏野翁重識併書

田中
大秀

荏野
老人

荏名
神社

② 足羽宮碑 (笏谷石 西面)

足羽神社境内

文政十三年(一八三〇)三月、継体天皇崩御一三〇〇年を記念し、城下石場町(つくも一丁目・足羽一丁目)の富商等が建立したもので、正面に「足羽宮之碑」と題し、左側面から裏面・右側面にかけて、この時の大祭の由来が刻まれている(明里大倉主司 橋本周保撰)。



足羽宮碑

足羽神社は、継体天皇・座摩神(生井神・福井神・綱長井神・阿須波神・波比伎神)を主祭神に、大穴持像石神・事代主命など九柱の神々を配祀する。

社伝によると、継体天皇が男大迹皇子として越前在住の時、現社地に大宮地霊(座摩五神)を奉斎して越前平野の治水工事を起こし、のち即位して大和に上る際、自らの活霊をも祀り、神事を馬来田皇女に託したのにはじまる。(延喜式)に足羽郡十三座中の一座として見え、延暦十年(七九二)従五位下、仁寿元年(八五一)従四位下の神階が昇叙され、中・近世を通じ領主・藩主の保護を受けた。

(左側面・裏面・右側面) 二四字×二八行

恭惟磐余玉穗天皇之在我古志也実称男大迹王当其時洪水汎濫尋常樹杪没水猶藻上深憂之逐排三

国港道三大川支派疏注水入北海然後民始免為魚矣嗚呼績德豈讓彼夏禹哉仰而益可以尊俯可以知洪恩也偉哉聖德遐聞會稚鷓鴣天皇崩無嗣諸大臣定策奉璽迎上遂入纂天緒春秋已五十又八在位二十又五年其政績載在国史歲次辛亥二月崩寿八十又二初上之在此也祀五德之神矣蓋五德之神者恒祭于大内故謂之大宮地之靈也非天孫不得祀焉臨變輿(之)詔皇女馬來田姬与五德之神合祀我焉故本宮為(上)之(靈)左曰

生井主水德曰福井主金德曰綱長井主火德右(口)波(比)岐主木德曰阿須波主土德總稱之曰足羽宮即以土德之婦王于四時也世々神主馬來田氏欽祀焉今茲文政十又三年龍集庚寅距上崩既一千又三百年客歲勅宣大祭且賜大宮地之靈額字蓋重皇統之所繁也先是文政元年戊寅橋南大有災祠殿亦為燼神主從五位上行撰津守足羽朝臣馬來田善包括据積年竟獲新殿貌以行大祭焉境内旧有碑今只螭首存於是乎石場街部富商相与議將就其遺趾用故螭首以建碑乃請碑文因謹序之併以頌曰

玉穗天皇心神帝孫嘗孤在越聖德温々既仁且孝又慈克淳坎運時旺洪流奔屯懷山襄陵民胥奪魂天皇憂之遂辟海門道三大川支流禁巡水治地成茲叙夷倫民至于今得安晨昏盛德大業与天地均武烈帝崩入承至尊在位五々政績永存宝算幾許八十二春諡号繼体以証謹諱今歲庚寅千三百辰殿貌新構禮祀致恂肅々大祭來助蹲々棗盛既潔兼奉清罇於千斯年欽拜絰綸

庚寅之春三月

②④ 六地藏宝塔 (笏谷石)

足羽神社境内

元禄十四年（一七〇二）六月、松支院^⑧第八世講応等が開眼導師となり、常陸国（茨城県）真壁郡小栗庄下館の真譽謹入によって建立されたもので、菩提車六地藏とも呼ばれる。六角石の上部に六地藏の彫刻、中央内部に六角形の木製車輪があり、これを回転させると災難を免れるという。

〔イ 面〕

奉造立六地藏尊宝塔一基

常陸真壁郡小栗庄下館

施願両主現当悉地成就所

維時元禄戎四年六月廿四日 願主 真譽謹入

〔ハ 面〕

三界万靈一切含識

開眼導師

石屋 三郎右衛門

泉藏院六世之住 遊樂寺八世之住

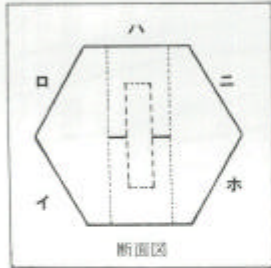
欽言

〔ホ 面〕

毎日晨朝入於諸定

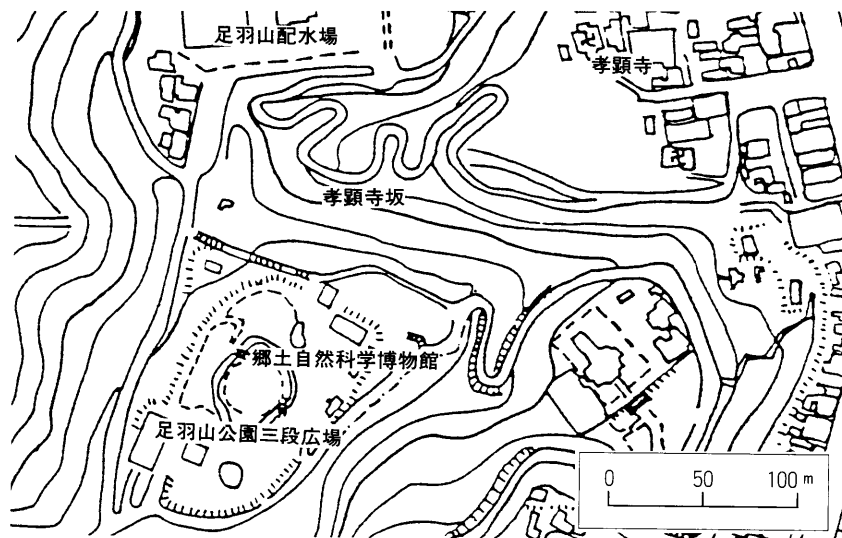
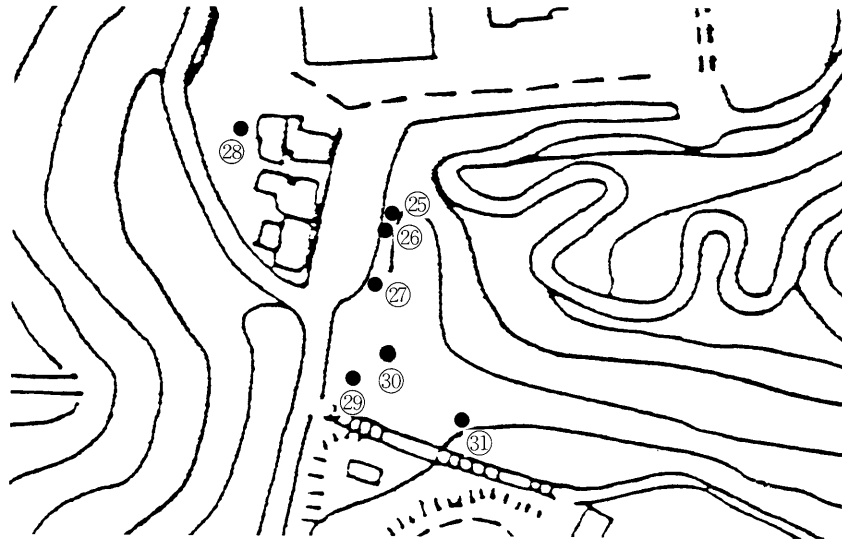
大阿闍梨竖者法印良謹 大阿闍梨竖者法印講応

遊化六道拔苦与樂



六地藏尊宝塔

茶
白
山



⑤ 発摘如神碑 (笏谷石 西面)

福井警察署の探偵、山田勢三の顕彰碑。勢三は文政十一年(一八二八)丸岡城下に生まれ、明治五年(一八七二)四十四歳の時、捕亡吏として福井警察署に勤務した。二十二年間の在職期間の内、第一線にあった十七年間に一三三七人の犯罪人を逮捕し、管下の治安維持に努めた。勢三が検挙した事件で著名なものに、強盗犯仁太・松岡K寺事件などがある。同三十九年、七十九歳で病歿した。

顕彰碑は、生前の明治二十二年(一八八九)十月に建立されたもので、正面に福井県知事安立利綱の筆で「発摘如神」(悪事を摘発すること神技のようだ)と題し、左側面に警察部長西長利の「かずくの莠やぶをかりて小山田の いねのほまれの顕れにけり 長利」の歌、裏面に勢三の経歴が刻まれている。もと中野茶屋南隣にあったが、昭和二十三年の大地震で倒壊し、同二十九年現在地に再建された。

[裏面] 三〇字×一三行

山田勢三君明治五年為敦賀県捕亡吏爾米奉職于石川福井両県警察署専保人民安寧君為人温和而
剛正執務無表裏雖無事之日風雪之夜^⑧間行闔里防凶徒於未幾十数年如一日最得発奸摘伏之妙盜



あたらしや前

発摘如神碑

賊所在凶姦所為皆知之有使人嘆稱不息者然事涉機密不得公于世也其捕凶徒□□罪者自明治五年八月至本年五月千三百三十七人救人命者二官嘉其功賞之三十七回市民亦皆愛敬之今茲同志相謀以建此碑君天保六乙未年正月元旦生於越前丸岡其先為武田氏宿將小山田備中後裔寄于丸岡城主本多家改姓山田世居丸岡十一世孫曰真左衛門実君嚴父也兄曰政□丞胃小島氏仕幕府君仕福井藩戊辰前後于□數回又鎮撫大野郡暴徒共有功云嗟乎君而永在此職固不足榮雖然官賞其功人嘉其績共此碑垂功于不朽比之於位官尊榮而民不稱其德者其優劣果如何乎哉

明治二十二年歲次己丑六月

福井県士族 本多鼎介撰

広島県士族勲七等 山田正隆書

⑤ 石田一恵碑 (笏谷石 西面)

江戸時代中・後期の産科医。名は憲章。産科を専攻する者が極めて稀であった時代、一恵は早くより産術を学び、文政十一年(一八二八)六十四歳で歿するまで、数多くの難産を救った。福井を代表する産科医として知られる。

碑は明治三年(一八七〇)、吉田郡牧野島村(福井市)長安寺境内に建立されたが、同十七年、一



石田一恵碑

あたらしや前

惠の顕彰と妊婦の参詣の便宜を考え、現在地に移築された。碑文は藩校明道館教授矢島立軒の撰で、立軒の著『立軒存稿』に収められている。

(正 面) 四 二 字 × 一 六 行

石田一惠翁家伝

吾藩有善産術者曰梅翁居士風貌瞿々然六十翁也一日介友人富美郷具幣与状請余為其祖一惠翁立家伝余以不文屢辭弗獲乃按状経緯之曰翁氏石田諱憲章号一惠其先為下総国結城人六世祖祐慶従海福重長來於本藩數世不仕翁少学産技年既長名称噪干時上由士大夫以至庶氏靡弗請其治者晚益造其技之妙前後救難産者指不勝僂故府下謂産術者必称一惠子云余嘗読賀川子玄伝然後知本邦救産一技発源吉益中条二氏至子玄極其精微焉今又読翁行状知翁亦精其技然翁也不幸处僻郷又無撰著可伝是以其技雖精不及聞于四方子玄居都下且其著有産論為世所推奉用是莫不識其為名医者故論者云設使翁与子玄絜其伎倆則未知其孰軒孰輕也余因窃倣史遷倉公例輯其治驗欲載之伝中以表翁之神是技者問之居士不可得而詳焉嗟乎翁之死距今僅四十余年然其事若此倘又歷十年二十年孰有知翁事者此居士之所以借余筆而欲不朽於翁者歟顧余也非其人唯恐其先翁而朽耳矣翁為人温厚和易与物不忤旁好誹歌寓心風塵表以文政戊子七月某日卒年六十有四三伝為居士其業益盛官特賜秩若干石居士有子曰一策又善繼其業贊云或曰古人不設救産科本非疾病也故名医不屑為己余曰不然世攻内外科者多唯用力産技者少矣故其術不備往々有遂非命者若補其欠陷可不謂英傑之士哉翁蓋近之矣 明治三年春二月立軒矢島剛撰

うむ□^(五)まで強てうますな産をまてしひてうま□^(六)子はうむをまて 梅仙
□^(三)□^(二)なようまれさすへしうますなようまれさす□^(七)□^(八)うまれさすへし 梅翁

(左側面) 五行

此碑原在牧島村長安寺境内近者長安寺廢矣其地屬藤島神社因今茲一惠翁之孫理学士二男雄氏卜地于此永伝翁之事跡于後世且便懷妊婦人之參詣嗚呼松風蘿月足安翁之魂蓋可謂追孝祖先者矣
明治十七年七月六日

山本路二誌

⑦ 軍馬碑 (西面)

日露戦争に従軍し、砲弾に当って倒れた軍馬の慰霊碑で、表面に「明治三十七八年戦役 軍馬碑」、裏面に「明治三十九年七月応嘯 永平悟由」と刻まれている。

なお、この場所にはもと／＼日清戦争の戦利品で作られた日清戦役記念碑(明治三十五年建立)があったから、軍馬碑のちに移築されたものと思われる。



軍馬碑

中野茶屋前

⑧ 松島清八記功碑 (南面)

福井の機業家。明治十五・十九年(一八八二・八六)職工会社・同工場を設立し、奉書袖の販路を京阪方面に広める一方、羽二重の生産・輸出に力を入れ、微々たる資産より巨万の富を築いた。

記功碑は、明治三十九年(一九〇六)、福井・横浜の機業家・織物販売業者等が銅像脇に建立したもので、衆議院議長杉田定一の篆額「松島氏記功碑」を冠した碑(向って左)と、発起人名を刻んだものとの二基からなる。銅像は戦時中、軍に供出され、現在笠原行雄(福井市)製作の胸像(昭和三十三年建立)が建っている。



胸 像



松 島 清 八 記 功 碑

二葉茶屋裏

〔左 正面〕三三字×一五行

〔篆額〕
「松鳴氏記功碑」

古昔聖王經制天下有九經而勸百工居其一曰日月月試既稟稱事其用意工業如此今也我國會方興之運拳勸工之政而民間奮起以工業顯者甚多如松島清八君即其一也君福井県福井市人明治六年從事織絹所謂奉書紬者兼販糸縷往來京阪間広其販路十五年興職工会社至十九年更出巨資造築工場養成弟子苦思經營遂刑製精縑輕羽二重者往橫浜示之外人外人賞歎其精緻從是每歲輸出海外頗夥後出之於閣龍世界大博覧會獲賞牌於是福井羽二重之名傳播天下矣君為人温厚敦實既竭力工業富致鉅万而謙遜不矜自奉儉素参与市政多所贊補平生愛撫弟子弟子慕之如慈母云頃日業製縑者某某等欲樹君銅像及碑於福井市足羽山以伝其功於後代來請余銘曰

皇化覃敷 百工振起 維斯工業 富從此始 福井之県 蚕糸錘美 君也織絹 夙顯其技
大興工場 陶鑄弟子 銳意革新 万目瞻視 慈輸海外 声価倍蓰 厥業隆昌 利国利己
翼翼退讓 質行素履 乃若是人 邦家所恃

明治三十九年十一月 正五位勲五等土屋弘譚 西脇静書

福井実業協会長衆院議長從四位勲四等杉田定一篆額

〔右 正面〕

〔篆額〕
「発起人」

東宮和歌丸	市二宮源次郎	浜岩佐駒吉	横伊藤六之助	井深 浩	豊嶋京一	本多留吉	西岡治良七	馬場啓太	橋本新四郎	長谷川末吉	稲沢仁作	福伊藤久太郎	石田彦介	伊東門左之門
吉川栄三郎	吉川延吉	若林鱗三郎	岡部菊太郎	岡田源吉	田村春吉	竹谷彦平	吉田清三	吉村条太郎	吉田兼松	吉川 将	吉江多吉	開田幸吉	大久保銚弥	岡田寅三郎
保田元之助	工藤金司	坪田源太郎	谷田金之助	横山 一作	黒田与八	黒田円次郎	乗竹伊次郎	井上元次郎	上田嘉三郎	村田春吉	仲尾作吉	中嶋与作	津田藤次郎	竹内政太
宮杉愛三	斎藤市太郎	佐羽総太郎	遠藤安次郎	松村清次郎	水野米吉	水野勇次郎	荒川喜六	江端仙二郎	児玉弥五郎	古市惣次郎	福嶋周太郎	真杉幸四郎	松井文太郎	山口喜平
			中辻源太郎	管川 清	松嶋亥三太	半沢伊助	北 甚之助	西村琳平	上田久右之門	後藤与五郎	篠原藤平	品ヶ瀬善太郎	宮浦仁太郎	宮崎義正

㊦茶白山（龍ヶ岡）古墳改葬地（笏谷石 南面）

文化二年（一八〇五）、茶白山の一角から家形石棺が発見され、その地に地藏堂が建立された。建物は校倉造を模した宝形造で、大工松浦吉兵衛の作。維新後大破し、明治二十六年（一八九三）修復されたが、昭和二十年空襲で焼失した。同二十六年夏、発掘作業が行われ、家形石棺（当館で展示中）と男女二遺体、並びに多くの副葬品が出土し注目された（五世紀初頭）。

現在、跡地に改葬地を示す碑（表面「茶白山古墳改葬地」、裏面「昭和三十年三月 福井市」）があり、地中に左の墓誌が埋められている。

墓 誌

この古墳は古よりこの地方のさる貴族を葬った墳墓であると伝えられ宝形校造の小堂が建て、あったが、戦災と震災で全く廃墟となっていた。

然るに昭和廿六年公園の修復整地の際し、福井市に於てこの古墳の学術的発掘調査を行ったのである。その結果石棺は併出した副葬品と共に郷土の貴重な文化財として市立郷土歴史館に保存し遺骨はこの処に改葬することにした。

自然科学博物館登り口



茶白山古墳改葬地

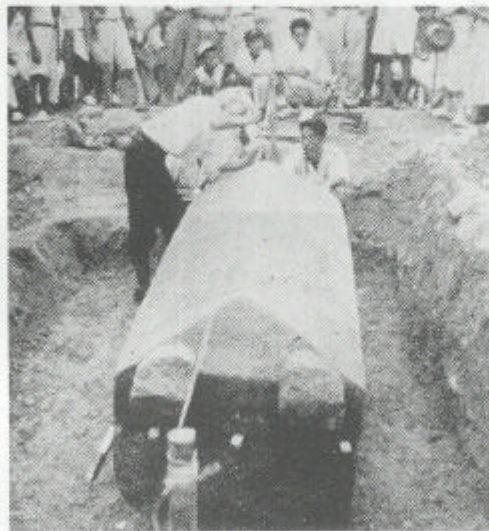
あ、小柴さす足羽の山の峯近き この処をうましきよき処と定め給える二柱の御霊よこ
の若宮に鎮まりまして起ち上る福井の逞しき姿をみそなわしつ、永久に安らかに眠り給え
かし。

昭和二十九年五月

福井市



石棺地蔵堂(明治42年撮影)



石棺の実測作業(昭和27年撮影)

③ 山本条太郎像 (雨田光平作 南面)

実業家・政治家。慶応三年(一八六七)十月十一日、福井市松ヶ枝下町に生まれた。明治六年(一

自然科学博物館登り口

八七三) 一家をあげて上京。同十五年(一八八二)二月、三井物産横浜支店に入社。以来実業畑を歴任。同四十二年(一九〇九)同物産の常務取締役となった。大正三年(一九一四)三井物産を辞任して、日本火薬製造(株)を創立。引続き多くの事業会社を創立し、同九年(一九二〇)衆議院議員に当選。政界に乗り出し、昭和二年(一九二七)七月から同四年七月迄二ヶ年南満州鉄道の總裁をつとめた。衆議院当選四回の後、同十年(一九三五)貴族院議員に選任されたが、翌十一年三月二十五日、七十歳にして歿した。

(右 面)

(左 面)

- | | |
|---------|------------------|
| 翁少ウシテ穎悟 | 慶応三年十月十一日福井城下ニ生ル |
| 俊敏三井社ニ入 | 明治十五年三井物産会社ニ入社 |
| リ企画周密克ク | 同三十四年同会社上海支店長 |
| 重責ニ任ス氣宇 | 同四十二年同会社常務取締役 |
| 高邁豪宕果斷 | 大正三年同会社辞任 |
| 世経商ノ傑タリ | 同五年日本火薬製造株式会社 |
| 晩年政界ニ出テ | 外十数社ヲ創設経営 |
| テハ其枢機ニ參 | 同九年衆議院議員ニ当選 |
| シ屢経綸ノ策ヲ | 爾後当選四回 |
| 樹テ又満蒙ニ鴻 | 昭和二年南満州鉄道株式会社々長 |



山本 条 太 郎 像

業ヲ創ム

同四年同会社辞任

於戲偉ナル哉

同十年貴族院議員ニ勅任

同十一年三月二十五日逝去

享年七十

③ 久津見晴嵐像

(雨田光平作 西面)

文房流華道・茶道の創始者。昭和四十一年七月に建立されたもので、台石表面に「久津見晴嵐翁像 福井市長島田博道書」と題し、裏面に略歴が刻まれている。

また、文房流創成由来の碑が、別に建っている。

(台石裏面) 一〇行

久津見晴嵐略歴

久津見登志衛晴嵐と号す安政元年福井市城ノ橋に福井藩郡奉行久津見九門の長男として生れた明治十三年山本竹雲翁来福の時之に師事し文人抛入花文人煎茶の奥義を習得し当地に於ける斯道の普及を依囑された以後文房流華道茶道と呼称し門弟の育成にあつた昭和六年十月二十九日歿時齡七十八歳

(創成由来碑表面) 一六行

自然科学博物館登り口



久津見晴嵐像

文房流創成由来

文房流華道並びに茶道は初め京都より文人抛入花文人煎茶をして当地の好事者に伝へられたものであるすなはち明治六年篆刻及び南画の名手であり煎茶器鑑定にもその名の高かつた深竹軒夢硯堂山本竹雲翁が当地に遊んだ時を機とし吉川帰峰片山桃州五十嵐香圃岡崎鷺州等が相集ひ翁の門に聚り風月樓に於いて斯道を学んだことを以て嚆矢とする

明治十三年竹雲翁再び当地に来遊し久津見晴嵐は之に師事し斯道の奥義を極めた翁帰洛の後はその衣鉢をついで多くの後進を育成し幾多の研鑽と工夫とを加へ一流をひらき之を文房流と名付けた蓋し花を挿し茶を煎じ以て清談し文房珍器を愛でたことに由来する

以来数十年文人趣味をその基盤としつつ造化自然の妙を探究することによつておのづから美と真とを自得することを目的とし今日に及んだ茲にその由来を刻し後世に遺す所以である

昭和四十一年丙午七月吉日

素山 姉崎弥三吉撰

祖舟 山田 誠一書

〔裏面〕

昭和八年門第一同相計り文房流華道茶道家元竹雲会を組織した

会 長 姉崎素山 理事 安久蘭溪

副会長 徳山圭峰 茶道総務 土田北洲

副会長 嵯峨松峰

顧問 五十嵐均平

奥村藤五郎

品川一雄

青木勢太郎

大村他吉

勝倉博嗣

中谷龍眉

小林松琴

小川春峰

布目清心

宮辺修光

増永素望

羽野文教

江上素翠

長谷川素香

上田素園

野村素玉

市橋素保

増永素永

上坂素外

徳山圭寿

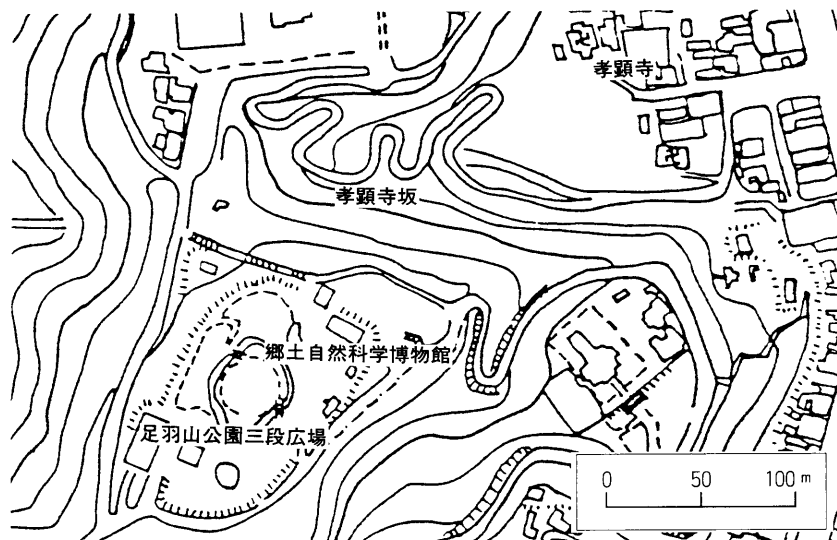
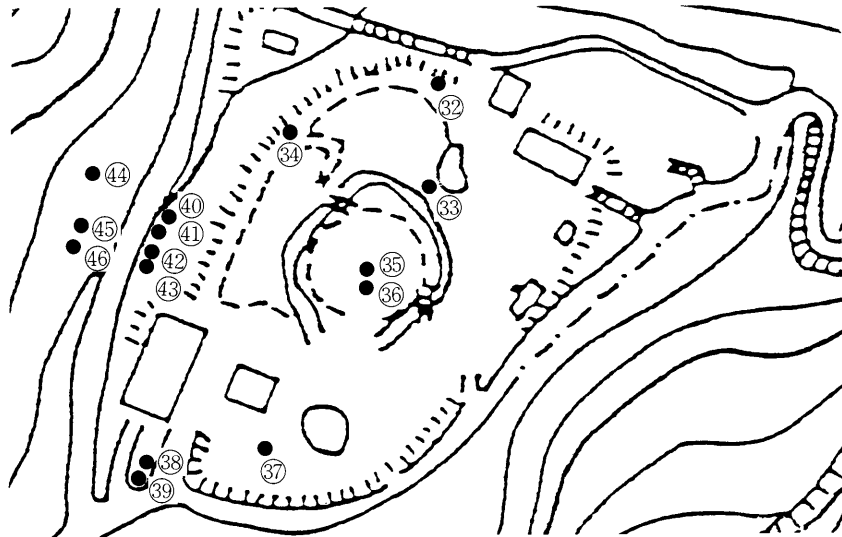
姉崎花香

久津見晴嵐翁胸像設立委員会代表

姉崎正治

昭和四十一年七月吉日建之
施工者 (株)大村造園

三段広場



㊦ 笠原白翁碑 (南面)

種痘医学の先覚者。名は真言、通称良策。文化六年(一八〇九)足羽郡深見村(福井市)に生まれる。藩の医学所濟世館で漢方を、江戸の磯野公道に古医方を学び、福井城下で開業した。しかし、三十歳を過ぎてから西洋医術を志し、京都の日野鼎哉に蘭学を学んで、福井に於ける初期蘭学界の代表者と目されるに至った。弘化三年(一八四六)以降、師鼎哉と協力して牛痘苗の輸入を計画し、藩主松平春嶽(慶永)の理解と援助を得て、嘉永二年(一八四九)冬、福井で最初の種痘に成功、わが国種痘史上に不朽の功績をのこした。一方で白翁は、飛騨高山の国学者田中大秀の門人となり、国学に関しても深い造詣を有し、無批判な西歐崇拜を戒める独特の学問観を有した。生涯を医術の発展に捧げ尽し、明治十三年(一八八〇)七十二歳で歿した。

碑は門人大武又玄が東京の水野行敏・京都の安藤精軒と謀り、共に学恩を受けた同門等の賛助を得て、明治二十七年(一八九四)に建立したもので(前年十二月、又玄歿)、同四十二年、足羽山公園造成のため貯水池付近に移され、大正十五年(一九二六)、天魔池西畔に橋本景岳(左内)の銅像が建立されるのを機に、再び現在地に戻された。石材は小和清水石(足羽郡美山町小和清水より



笠原白翁碑

自然科学博物館西隣

産出する砂岩）を用いている。

〔正面〕 四六字×二三行

〔篆額〕
笠原白翁之碑

大勲位山階宮殿下篆額

医者仁術也而仁之又仁者為牛痘方何則治盲治聾治癰疽治癩癩種々病苦非不仁然此數者有病焉者有不病焉者若夫痘瘡不問貴賤男女人人皆病一旦痘疫流行死亡相踵即不死亦往々喪明毀形其害甚於洪水猛獸顧牛痘能治諸未發億兆生民免夭札韓子所謂功不在禹之下者殆是矣而其行之我邦者自笠原君始君諱良字子馬通稱良策後改白翁笠原即其氏南越足羽郡深見邨人少好讀書修本草学文政己丑担簦遊江戸從磯埜公道学古医方為塾頭還移家於福井藩治天保中養痾於加賀山中温泉聞土人大武了玄修蘭学就問之翻然有所開悟因廢旧業講習蟹文時藩医皆主漢方疾視洋医不異冠讎独半井南陽知其非隣郡又有大岩主一者專治蘭方三人協心謀革旧習於是君西至京師入日野鼎哉之門業成而還乞治者年多一年南越医風為一變先是痘瘡流行死亡甚多一日君誦清人所訊引痘全書慨然歎曰良方如彼而我不採用可乎乃欲購求牛痘種於清国懼為海禁所沮上書藩主春岳公曰饑饉兵革疾疫是為國家三大患方今年豊国治独痘瘡為害此病之於我地方每曆四五歲一行而大都則連年不断死者十居二三概而算之海内歲亡三十余万人苟欲救之宜施牛痘方蓋其方移種子五六粒於左右臂脹膿結痂數日輒愈終身無復病焉伏請閣下憫衆民天札告之霸府命清船購致痘種則良方可用大患可除而國家仁政亦可得而行矣公称善因説閣老阿部侯命長崎市尹実嘉永己酉六月也是

歲蘭人齋痘種至長崎君奉公命西行途過京師訪鼎哉會其友長崎舌人穎川某送致痘種乃軫伝移植福井及三都大医爭設除痘館其方遍行海内可謂盛矣君娶山田氏生三男三女明治庚辰八月三日病歿享年七十二是月葬於阪井郡田谷村先塋之次春岳公巽岳公賜誄副以祭粢料若干金後十余年門人故旧欲建石表其功來請文於余々取狀熟誦感嘆不已蓋君識見超凡夙知古医方之不足用主張洋說初施引痘方世驚為詭術謗毀紛興阻礙百出独当其衝東西奔走悉亡家產不以為意遂能成其功然君功不止此近歲医道隆興南越多出国手列名於濟世會者六十許人如橋本軍医總監岩佐侍医亦在其中沿流討源君首唱之力居多焉而世或莫之知惜夫銘曰

卓彼妙術 伝自洋医 楚林普用 寔是吾師 何物頑陋 猶抱危疑 身病易去 心病難治
君在杏林 拳手一揮 万衆風靡 表立影隨 乃驅疫鬼 乃育嬰兒 如仏濟世 大慈大悲
吁大慈悲 功在万斯 特書屢書 勒銘豐碑

明治二十六年十二月 正四位文学博士 川田剛撰

〔裏 面〕

明治二十七年八月故旧門人建之

大 武 又 玄
主唱者 水 野 行 敏
安 藤 精 軒

③ 天魔池 (笏谷石 東面)

天正十一年(一五八三)、豊臣秀吉が柴田勝家を攻略した際、本陣を置いた所と伝えられる。池畔の天魔池碑は、明治四十二年(一九〇九)、足羽山が公園化されるのに伴い建立されたもので、表面に「天魔池」、裏面に「明治四十二年九月建」と刻まれている。

自然科学博物館前庭



天魔池碑



芭蕉句碑

④ 芭蕉句碑 (東面)

昭和五十七年、国立市在住の石橋弘毅(郷土史家石橋重吉の男)が建立したもので、表面に「名月や北国日和定なき 芭蕉」、裏面に「施主 一九八二年仲秋在東京八十二翁 石橋緑泥建之 月見には所を得たり翁の句碑 緑泥」と刻まれている。なお、この句は元禄二年(一六八九)八月十五日、芭蕉が敦賀で詠んだものである。

天魔池西側

㊦ 継体天皇石像 (笏谷石 西面)

三段広場中央

明治十六年(一八八三)、福井の石工等が天皇の高恩を感謝し建立した石像。同四十二年、足羽山公園開設の折、羽二重商富岡仲次郎[㊦]の寄付をもって修繕され、傍に展望所が設置された。昭和二十三年、福井大地震で倒壊したが、同二十七年再建された。

現在、石像の右手に継体天皇偉蹟記念碑(笏谷石 西面)、左手に継体天皇石像解説碑(笏谷石 南面)が建っている。

なお、この場所は円墳跡(山頂古墳・四世紀後葉―五世紀初頭)で、昭和二十六年夏発掘調査が行われ、石像下から直弧文を線刻した舟形石棺、琴柱形石製品など若干の副葬品(当館で展示中)、付近からは三角縁神獣鏡二面分の破片が出土した。



継体天皇石像



継体天皇偉蹟記念碑

(継体天皇偉蹟記念碑 正面) 四五字×二二行

〔家額〕
「偉蹟紀念碑」

厚積嘗窃謂国朝之古史多編年以紀事而書志獨闕故至往昔平水土開物產足国利民之偉蹟每多湮沒而不称後世無由得考焉間或伝之旧聞野乘之中誠為可惜也謹按皇朝第二十六世繼体天皇初称男大迹皇子以応神天皇五世孫龍潜越前五十有八載及武烈天皇崩入纘大統帝性慈仁孝順豁達有大度興於閭閻知民事之艱難励精图治弗敢逸子即位之始普詔天下勸課農桑在位二十五年天下安静海内殷富至于末年尚詔拳廉節之士事見于国史当皇子之在越前也洚水橫流汎濫於國中朝廷詔皇子治之皇子乃疏鑿三国港口滄日野足羽黑龍三大川導諸水注之北海以除下民昏墊之害併以興後世漕運之利國中永被其沢焉臨發命皇女馬來田姬配祀于足羽杜曰長護此土蓋以皇子初祀水土神于此爾來一千三百七十七祀矣距梟序西南二百步許有山曰足羽山即配祀之地蜿蜒迤西二里余至加茂山有谷曰石谷又名酌谷相伝皇子治水至此時方大暑有役夫渴将死求冷水不得皇子以所佩弓鑿巖隙忽靈泉涌出役夫酌之得不死又此地連山多石壙皇子一日發見之教土人以采石之業是二名所由起也石色青白質雖不甚堅凡橋柱并塾碑碣塔像若水火器之材施工易而為用大故居吾越物產之一焉歷千有餘年之久其所發掘製造以供国用及輸出于他邦者不知大小幾千萬億然未嘗窮竭今日國中賴此以衣食者亦無慮一千余戸頃者石工等相謀欲俾国人奕祀無忘皇子之沢亦追遠報本之意也請于官刻皇子持弓像建諸足羽山頭像長一十四尺巖石受之縱一十二尺橫称之繚以石欄高六尺周回百十三尺其他諸材皆用此石鑿工凡一千七百工運夫凡三千五百夫各出其私財与勞力為之而聞者相争釀金以助之亦可以見皇子之沢入人之深矣既成側樹一石題曰偉蹟紀念碑請文以記之乃謹叙其事併為之銘

其詞曰

於戲皇子 北鄙潜居 泮水汎濫 大沢似湖 皇子憂之 排壑決澗 以海為經 三川一途
若微皇子 下民其魚 大迹之稱 洵然不虛 惜哉国史 闕焉河渠 巖々石谷 其石如磔
采之采之 国用以輸 為柱為梁 惟汝所需 皇子之沢 永垂千秋 巍巍聖像 瞻望山頭

紀元二千五百四十三歲
明治十六年十一月穀旦

正二位勲二等松平慶永篆額

福井県史誌御用掛

富田厚積謹撰
灰野秋雄謹書

〔左側面〕

叙筆簡潔起段尤勝 厚文 瀨東 王治本 拝読

〔繼体天皇石像解説碑正面〕 一六字×二一行

繼体天皇の石像

繼体天皇は御名を男大迹皇子おおとらぎうじと称し御即位に到るまで数十年間 当国越前に潜龍しましたが 其間越前平野の治水を講じ 笏谷山の石材採掘を勧めるなど 民治に深く意を用いられたので 国人長く其御事蹟を景仰している この石像は 天皇の遺徳を追慕し 明治十六年福井地方の石匠 烏田・宮崎・谷屋・藤間・内山等相謀り之を建立したもので 石材は天皇に所縁のある笏谷石を用い石像の向は之亦



繼体天皇石像解説碑

天皇が治水に際して水門を開かれしと伝えられる北北西の三国港を遙かに望んでいる。爾來この山頂に存立して常に市民に親しみ敬われて来たが、昭和二十三年の大震災によつて倒壊したので、修復再建したのである。

昭和二十六年十一月 福井市

㊦ 足羽山公園展望所屋上石

明治四十二年（一九〇九）九月、皇太子殿下（のちの大正天皇）行啓の折、羽二重商富岡仲次郎[㊦]の寄付によつて建てられた展望所（御座所）の屋上石。

『足羽山公園施設記』（明治四十二年）

一、木造平家六角形舞台造 御座所 一棟

此仕様屋根は檜皮葺、地上用材は檜地下

用材は栗、床板は草檜、敷石及根巻石は赤石又は墨洗し石、屋上石（擬宝珠）は黒御隠影石、地下用石は笏谷石

右工費金壱千円也

右寄付者 佐久良上町 富岡仲次郎



継体天皇石像横

足羽山公園展望所屋上石

⑳ 富岡仲次郎像 (笠原行雄作 北面)

三段広場南

福井市佐久良上町(順化一・二丁目)の羽二重織物商。明治三年(一八七〇)足利市に生まれる。絹盛会・福井県織物商協会の設立者として、本県斯業の伸暢に寄与するとともに、福井駅前通りの電灯取付費用、継体天皇石像台石の修繕費、足羽山公園造成費、同展望所工費など、多額の金品を福井市に寄付した。特に、足羽山公園の開設に当っては私費三五〇〇円を投じ、自ら鎌鍬を手に造成工事に加わった。

胸像は昭和四十年四月、富岡仲次郎翁胸像建設委員会によって建立され、台石裏面に左の如く刻まれている。

(裏面) 一三行

花咲きくれば 花の吹雪に
月満ちし夜は 月の影ふみ
市民のつどひ 尽くる時なし
憩の地なる 足羽園山
かゝる山をば 吾と歎もち
明治のみ代に 初に拓きし
富岡翁の 永遠のいさをし
皆人ともに 高く讃えむ



富岡仲次郎像

昭和二十九年十一月吉日

世話人代表 藤原長司 鈴木亮 泉茂二

「福井市長感謝状」 明治四十三年一月二十二日付 富岡仲次郎宛 福井市 富岡久次氏蔵

富岡仲次郎氏

曩ニ足羽山頭建設セル所ノ男太迹皇子尊像ノ辺リ荆棘之ヲ封シ榛莽之ヲ鎖シ雉兔芻蕘ノ之ヲ侵瀆スルヲ見テ深ク之ヲ慨シ市ニ向ツテ独力之レガ改善修理センコトヲ請願セリ市ハ其高義ヲ多トシ之レヲ納レタリ於茲乎氏ハ踴躍私資ヲ投シテ大ニ其面目ヲ革メントスルニ方リ恰カモ好シ皇太子殿下北陸行啓ノ事アラントス然リ而シテ足羽山ハ清寥快濶全市ヲ一眸ニ俯瞰シ其風景囑目スルニ足ルヲ以テ御展望所ヲ尊像附近ニ設クルノ議アリ氏窃ニ之ヲ聞知シ感激奮勵大ニ企劃スル所アリ更ニ御展望所ヲ建設シ其出来形ヲ以テ市ニ寄附センコトヲ追願シ工事ニ着手セリ時正ニ盛夏炎威赫々流汗漿ヲナスノ節晨ニ起キ夜ニ帰リ励精不撓良材ヲ選ミ善工ヲ督シ日ヲ閱スルコト百有余日遂ニ竣成ヲ告ケタリ其構造壯麗完美殆ント一点ノ微瑕ナシ私資ヲ投スルコト実ニ三千五百有余円ナリ幸ニ客年仲秋殿下親シク登臨セラレ玉趾茲ニ駐マル氏ノ光榮曷ゾ之ニ如カン其誠忠誠実天ニ達スルモノト謂フ可シ実ニ衆庶ノ好龜鑑トシテ永世護ル可ラザルノ紀念タリ茲ニ本市会ノ決議ニ依リ感謝ノ意ヲ表シ贈ルニ銀瓶一個ヲ以テス

明治四十三年一月二十二日

福井市参事会

⑧ 高島鷹洲寿碑 (南面)

幕末の福井藩士。藩の儒学者吉田東寧・富田鷗波に学ぶ。維新後、学制が公布されるや河南小学校教授となり、以後、多年に亘って小学校教育に従事した。

寿碑は大正二年(一九一三)十月、古稀を迎えるに当り、教え子等が建立したもので、碑文を福井市長山品捨録が、篆額を福井県知事香川輝が寄せている。

(正面) 二四字×一三行

「高島先生寿碑」
(篆額)

福井県知事従四位勲三等香川輝篆額

先生姓高島名篤号鷹洲世仕越前侯弱冠入明新館攻経史又学吉田東寧富田鷗波業大進明治元年奉為館司書三年為郷学所授読郷所今小学校之濫觴而其從育英之事実始乎此五年官頒学制先生為河南小学校教授九年任大和小学校校長拮据十年名声藉甚後遷春山燈明寺二小学校亦有令聞三十八年



三段広場南

高島鷹洲寿碑

告老辭職其所啓迪前後數百千人俊才偉器彬彬輩出先生性温厚恭謙言必省行在職格勤懇篤克竭其誠宜矣子弟景慕如於巖慈也先生齡近古稀弟子胥謀欲建壽碑俛思沢於後昆士女拳節衣食之料以助其實嗚呼可見先生春風時雨之化孚於人心之深且厚也

大正二年十一月

福井市長
福井県立福井中学校教諭
山品捨録撰
多田義孝書

㊦ 内藤喜右衛門献金碑 (笏谷石 南面)

福井城下米町(順化二丁目)の米問屋。文化八年(一八一)三月、祖父以来の貯蓄金千両を、学校建設費として藩に献上した奇特者。福井藩では文政二年(一八一九)七月、その内の三百両を以て桜馬場(手寄二丁目)に学問所正義堂を建設し、残り七百両を藩の準備金とした。

献金碑は明治二十八年(一八九五)四月、福井高等小学校々内に建立されたもので、昭和六年、現在地に移築された。碑の右側に「内藤氏献金碑」と題する自然石が建っている。

(正面) 三四字×一七行

天明文化年間吾福井米街有富商内藤喜右衛門者家世為藩倉米行頭喜右為人俊異從藩儒高野春華翁讀書史略通古今頗長于理財父曰次右衛門遇隣人失火家財為之蕩尽纔存一庫焉耳其義父



内藤喜右衛門献金碑

三段広場南

理兵衛出所嘗所私蓄判金一千円与之以當資產次右受而不敢用伝之喜右時昇平日久上下凋弊而為一日苟安之計喜右窃嘆曰是由人無遠識不知觀時勢之變遷而所以善処之也救之之道在興學校以養成人材謀諸春華翁翁告以時尚難行喜右思不能禁遂獻所藏金千円於藩請以供建學之資藩嘉納之實文化八年三月也後閱九年以其三百金始建校舍正義堂於城東余為準備金令吏幹理焉既而正義堂廢安政中藩主春嶽公善繼先志建明道館於月城内以教導藩士子弟其後一再遷轉明治初又移之中城改称明新中学大振文教至敦賀県而廢十二年春公立明新中学復興兼教以小学高等科称中学予備門令福井市立高等小学校是也曩官頒學制也足羽県參事村田氏寿已下官吏及阪井港商中島某等各捐貲以充中學準備金与内藤氏所獻共積至數十円有故稍耗費而今尚屬吾市基本財產為高等小学校準備金抑近世称學事獻金者其多出於上諭若徵収其在當時能自奮獻金如内藤氏罕矣則其功豈可沒焉乎頃市議員謀建石於校門内刻氏事蹟以伝于後以予嘗為明道館教師及前後明新中学校長請記之因記其(梗概)□□

明治二十八年十月

富田厚積撰

寺田遙書

石工丁斧吉刻

〔裏面〕

發起

鈴木準道

渡辺弘

松村志計里

田川音次郎

三輪与一郎

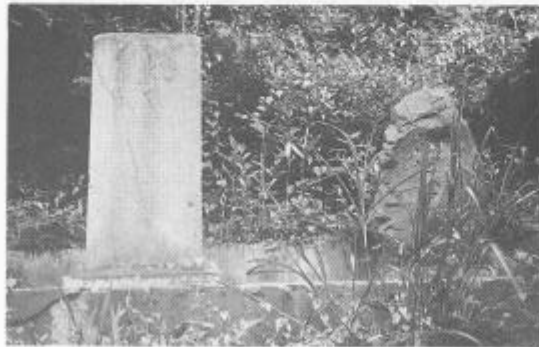
④ 浅田外吉碑 (笏谷石 西面)

市内春山の商人(花卉・果物販売)で、学校教育発展に寄与した功労者として知られる。明治二十年(一八八七)頃、春山小学校々務掛となり、さらに校舎新築(同二十四年竣工)の際、建築掛として、教育のことに従事した。また、福井県の学校委員、春山区会議員をも務め、同二十八年、六十歳で歿した。

碑は明治三十一年、春山区及び有志者によって建立されたもので、右側に「浅田君碑」と題する自然石がある。碑文は河津直入の撰、誰にでも読めるよう借字をもって記されている。

(正面) 三四字×一八行

□仁善事袁行布者阿里其波真心与里為須登名聞仁属寸登乃
二都安里当市春山区内ニ故浅田外吉登云□志波旧花卉乃植
物及果物奈籽販具袁業登志家号袁□屋刀云比志仁与理人□



浅田外吉碑

三段広場西側斜面

三

外登乎名志弓然加毛市中二聞延多里軀幹壯大仁志弓性来義氣安理權貴仁詔良波受富豪二屈勢受
明治二十年乃頃奈李志加郡役所与里春山小学校々務掛袁申付久又本県与里毛学校委員袁命有又
区會議員ニ推選勢良礼多里校舍新築乃際仁市衙与理建築掛袁委囑勢志ニ工事一年余乃久志支ニ
瀨里弓一日毛懈怠奈久監督ニ從事志多里志加婆落成乃後県庁与里玉篇一部袁賞与阿里多里総弓
教育上乃事仁関志弓波家業袁擲知身袁委祢弓毫母勞登勢受世人乃癡刀嘲介里狂登笑布毛意刀勢
受是袁真心与里作勢留善事登許曾波云倍介礼太留二十八年九月劇疾ニ罹里弓死奴噫惜哉天保七
年ニ生礼弓享年六十奈里三子安里長男一十四二男三郎一女袁小好登云乎茲区内乃有志者等発起
志弓斯人乃遺功袁石ニ刻美弓永久仁朽受阿良志免武登議留ニ就弓有志者集来多里弓予ニ語良久
誰也志人毛読易久解志安加良武為ニ假字文ニ弓此由衣記志給比弓与刀云波留々ニ予旧久与里斯
人乃名波聞志加村毛其面波識良謝里支然礼村令有志者等乃此議阿留仁弓知里奴斯人尋常一個乃
男子ニ波安良謝理都良武然礼婆其請波留々随袁書支弓与布末ニ三十一言袁加布留ニ奈武
宜志社道乃為仁波生命袁母捨弓尽左武男子奈理志加

明治三十一年春二月

河津直入誌

正八位勲八等寺田遙書

④① 吉田東麓碑 (笏谷石 西面)

三段広場西側斜面

福井藩儒学者。名は篤、通称悌藏、東篁・蒙齋などと号した。文化五年（一八〇八）福井藩の足
輕の家に生まれ、藩儒前田雲洞や在京の藩儒清田丹藏に入門して刻苦勉励し、特に京都の鈴木撫泉

に私淑して浅見銅齋^{けいさい}の遺化を受け、崎門学者として大成した。はじめ私塾を開いて多くの門人を育成し、一時は藩校明道館の助教を勤めたが、一貫して社会実用の学を唱え、その門下に伴閑山^⑧・矢島立軒^⑨・由利公正・橋本景岳などの逸材を輩出した。

明治八年（一八七五）六十八歳で歿した。

碑は林鶴梁の撰文で、足羽山招魂社に続く車道の山側に伴閑山・大久保盤山の碑と並んで建っている。

〔正面〕（大部分が剝離の為「越前人物志」に拠った。）

〔筆蹟〕
「東寧先生之碑」

我所嘆乎近世儒流者以其讀書不能施事業施又不能得宜也唯

若東寧山守君蓋不然矣君少時專心研經終有發明于実践之学

焉藩公聞而嘉之擢学館小吏及襲父後累進昇書院番士命学校教授兼侍読賜十人口米君常云学非实

践無益也身雖不參藩政豈可不尽心于此哉乃誘導後進講明斯道育英養才將使之致力于实用逮嘉永

癸丑之際天下稍稍多事君素尊崇王室自謂天下事非与天下豪傑商議贊襄不能也至是慨然自奮不敢

寧居十余年間三上京師二入浪華一至伊勢又教藤江戶東馳西騁与四方人豪結交上下議論縱談時事

其隱然保護王室不啻為一藩也晚坐事致仕以明治八年五月二日終享年六十八葬福井城東蘆中山先

塋側置墓石焉頃者門人故旧追慕之余相謀別立石于城南愛宕山君遺愛之所具狀徵銘于余余与君相



吉田東寧碑

識久矣義不可辭乃挾狀曰君諱篤字士行東篁其号称悌藏吉田氏家世越前福井人考諱隣紀山形諱某次子出冒吉田氏称樂遊妣高村氏娶高橋氏生二男八女二男与第二女第五女皆夭乃乞養岡田信次子謹夫為嗣配第三女矣第一女第四女適士族岡田某末松某第六女以下未嫁初樂遊君憂其原姓山形氏先出自甲斐名臣三郎兵衛諱昌景而子孫失籍焉將復興之不能遂其志而没君深体先志讓家嗣子更称山守東篁以存其祀焉山守旧係山形別姓故君称之云嗚呼若君者為家國天下尽其心力而又得其宜可不謂近世之所希乎其銘曰

嗟乎宕山 其境絕塵 花木維美 眺矚維真 君之曾遊 会客飲醇 一朝就世 人祭其神

感德追蹤 酒肴蕭陳 花間羅拜 宕山之春

④② 伴閑山碑 (笏谷石 西面)

三段広場西側斜面

福井藩士。名は習輔、通称圭左衛門。早くより学問を好み、藩の儒学者高野真齋^②・吉田東篁^④に師事する。天保十三年(一八四二)、二十四歳で家督相続し、作事方改役・司計吏・中監察などを勤めた。嘉永年中、熊本藩士横井小楠の来福に際して就学し、維新後は、家塾で門弟に教授することを楽しみとしたが、その教育方針は、教則を設けず各個人の能力に応じた教育方法を採ったことで知られる。明治十二年(一八七九)、六十一歳で病歿した。

碑は明治十三年六月、門弟によって建立された。

〔表 面〕 四六字×二一行

伴閑山翁碑銘

畏友伴溫卿之病而歿也嗣子忠一葬事已襄來告余曰頃考之門人某某等相謀卜地於足羽山松林之間欲勒行實於碑以不朽之既許其請矣而父執能尽考之平生者舍子其誰也子其幸銘焉余固辭者再三忠一請益勤退而思之與溫卿交深且久者莫如余然則義有不可以不交而辭者遂叙^(之)曰溫卿諱習輔号閑山溫卿者其字也父曰古市某旧福井藩之士也母加藤氏溫卿幼穎敏有記性塾師每称之十余歲之時同藩之士伴政明養為嗣及長益耽學從藩儒高野真齋山守東篁研究經史天保壬寅年二十四襲祿仕藩斑新番在家教授戶外履常滿室至不能容藩屢賜書及銀賞之嘉永辛亥旧熊本藩之士橫井小楠応旧藩公之聘來客于福井溫卿就問字知見大開達云安政甲寅藩擢為司計之吏廉能副職尋遷中監察服職多年以功進班大番增祿若干明治四年 朝廷廢藩置県至此始解職自是閑散自如專以讀書授徒為樂今歲夏秋之交虎列刺病大行我南越殊甚偶溫卿之次子深造自東京帰省留侍數日將還前一夕親戚置酒餞飲溫卿飲食衍衍意貌頗暢詰且深造已癸是久卒然泄瀉病二日没亦罹流疫也嗚吁悲哉溫卿生於文政二年己卯十月十日歿於明治十二年己卯八^(月)□□七日得年六十有一配德山氏侍病感染翌日歿子三人長忠一次深造次宜忠一承家為判事補奉職于信州上田深造為大谷直兄所養補東京陸軍士官學校幼年生徒宜猶幼女五人長適于來棲寬之介二于古市八音三于山川直次郎四五幼在家孫六人皆孩溫卿病時電信報上田忠一昼夜兼行至則無及九月十七日葬于福井清円寺先塋之次溫卿精力過絕人少時家貧乏書座右之書籍多所手抄其尤多卷者如歷史綱鑑補亦一筆謄写其苦學可見傍好詩文時有佳作真卒類其人接人坦易質直不設城府言語雖或輕忽如不顧慮者而見機甚捷处事甚斷議論往往出人

表至有拍手驚嘆者教誘生徒亦不拘準則依器達才諄諄不倦時交諧謔至屢厭了解而止故人皆樂就受業温卿長於余三歲嘗時同師讀書習字出入戲游必与之共五十年來講學相輔文章相益交情如淡而始終不渝實為莫逆之良朋余蒲柳不計且夕然或猶得保余年則欲与温卿白首相歡笑杖藜相追隨何凶一朝溘沒余也齡垂六十旧友頻年下世唯一温卿而今如此痛可勝書乎揮淚作銘曰

不倦教人 学行可述 立碑酬恩 君蒿誠実 閑翁有知 其神來逸 高壑松風 左右琴瑟

友人 山本居敬謹撰

〔裏面〕

赤尾元一

榎田房次郎

松原浜之助

岸水久太郎

富山又三郎

明治十三年六月十四日門人建之



山 閑 伴 碑

⑬ 大久保盤山碑 (笏谷石 西面)

福井藩数学者。初め養父齋藤良相に、のち江戸の細井寧雄、吉田伊織、長谷川善左衛門等に師事し、関流の奥儀を極めた。帰郷後、家塾を開き、安政二年(一八五五)藩校明道館が開校されるや、

三段広場西側斜面

算科局の教授として活躍した。明治二十四年（一八九一）五月、七十五歳で歿した。

碑は盤山生前の明治七年に建立されたもので、碑の手に算塚、左右に子息田中寛雄と、岐阜県技手兼属西村元長奉納（明治二十四年六月）の小燈籠がある。

〔表 面〕 三二字×一八行

〔(兼) 大窪先生之碑〕

翁通称九郎衛名賢号盤山自少志数学遠遊于四方至東京適会奥州人玉邨先生幸伝得関流伝来秘法既得其精術極其玄妙云夫其数学之為道可謂深遠矣天之高也星辰之遠也古今之悠久也測候以致之推歩以計之先而弗違後而奉之興地之広也錢穀之瑣也有度有量有權有衡以節其遠近以均其出納民□於是乎可授經費於是乎可制非数孰能与之數之為事也吁大哉古人尚実不崇虚飾凡関倫紀資生養者皆無不講且習焉故札樂射御之文併之于数列為六芸焉世之弊也去実就華文士之常情從事者誦數焉爾耳葩藻焉爾耳筆札焉爾耳乃若乘除紐折之法視以為胥徒之猥務而至有手一把算子不知其縱橫者亦独何哉若夫日運牙籌利折秋毫者用数之失也非数之罪也今於翁也夙精熟数術勤辛多年遺其微妙百度一新之前帰郷之後設家塾無少長使習之 邦君嘉其技学養之起也設算科局使為之師入其門学者以千数云 邦君嘗賞其德举為下吏賜俸三人口又累加格式年々増賜廩米若干云受翁之教升



大久保盤山碑

堂入室者不可勝概矣今茲門人等謝恩報德今翁於在世之時相与謀以將立其碑于宕山然余知己者某氏來請余其碑文余素不文且老耄矣又以未知翁且知其算法故切辭其託而不置曾聞翁之為人出于邨邑立志興家轟名一世伝業万人余嘉其精詳明備不唯有裨於数学而專心致志亦学道者之所當視而倣也因代知己某氏聊以記其事実而已矣時明治七年甲戌十一月 荒川勝吉撰

④ 宝加墓 (笏谷石 西面)

三段広場西側清水道沿

名はほか、宝来屋加右衛門の女。福井城下魚町(順化二丁目)の魚店肴屋九郎左衛門に嫁いたが、早くに夫と死別した。文政(一八一八―三〇)の頃、城下の困窮した人々を救い、女侠として知られた。

墓は島屋与兵衛が宝加の老いて子が無いのを憐れみ、文政十一年(一八二八)に建立したもので、正面に「宝加墓」と題し、両側面に墓誌が刻まれている。また、白石正面に「石元 武兵衛 石工半四郎」、左側面に「世話人 島屋与兵衛」とある。
〔右側面〕 七行

宝加ハ藩の魚店肴屋九郎左衛門□妻なり歳久しく寡居す其氣質豪侠にして或は城下子弟の苦難を救ひ更に他方僑人の衣食を給す故に其



宝 加 墓

名三都戯場の中に高く其徳街里子弟の外に□ふ今や其名を慕ふ人々宝加の老て子なきを憐ミ塚を築て徳を表す因て宝加と呼たるハ宝来屋加右衛門か女なりしとそ

〔左側面〕

ありし世もなきよと同し恵ミにて

塚に宝加の名を残しけり

于時文政十一^{戊子}

終秋建之

④5 筆塚（西面）

三段広場西側清水道沿

筆塚は、使い古した筆を地に埋め、その供養のために築いた塚で、退筆塚ともいう。

〔表 面〕

〔同上裏面〕

筆 塚

明治十年

石塚門人建

丁丑六月中

〔表 面〕

発起人

山口安太郎

黒田与八

友永先生埋筆

世話人

小和清水

岩井正之助

石工 宮下清松

京盛佐助

吉川吟介

桐山新助

伊藤栄治郎



筆塚



筆塚

④ 荒川汶水碑 (西面)

福井藩士。名は勝吉、幼名小三郎、のち助右衛門。嘉永元年(一八四八)近習番となり、書物方・手元文筆御用書物方兼帯・世譜方などを歴任した。また、儒学者としても知られ、藩主松平春嶽(慶永)に詩文を講じた。晩年、真宗大谷派の学校で教鞭を執り、明治十八年(一八八五)歿した。

碑は生前の明治十二年に建立されたもので、門人水野堅造の撰文。現在、倒壊しており、判読できる部分のみ収録した。

(裏面)

先生名勝吉字子敬号汶水性温順清雅而能讓人常尚簡易而不求富貴深嗜酒而輕不改其于無且年少好文善書每愛子弟教誨之殆千余人于今茲歲七十有一尚教不倦也嗚呼□□仰祝□老一則以善□

□□門人等相与謀建一石於羽山々頂以勸□□德行□□于時明治□□

門人 水野堅造謹撰

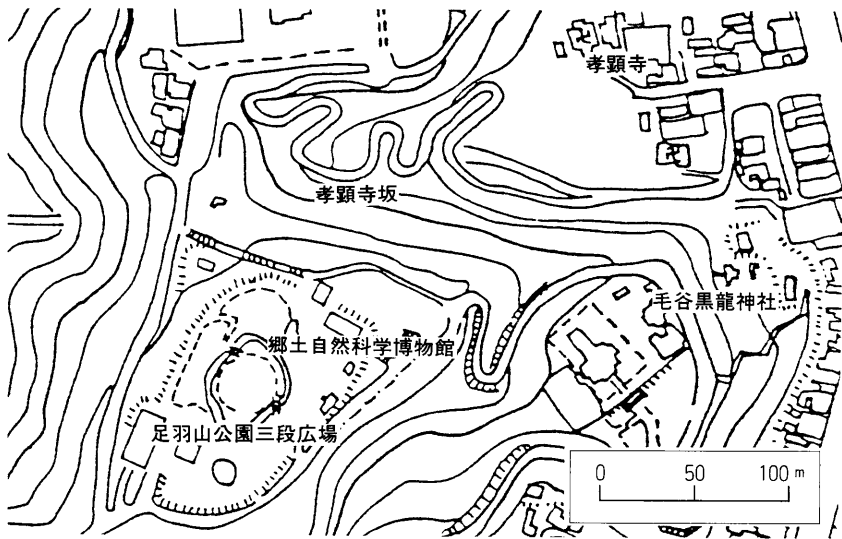
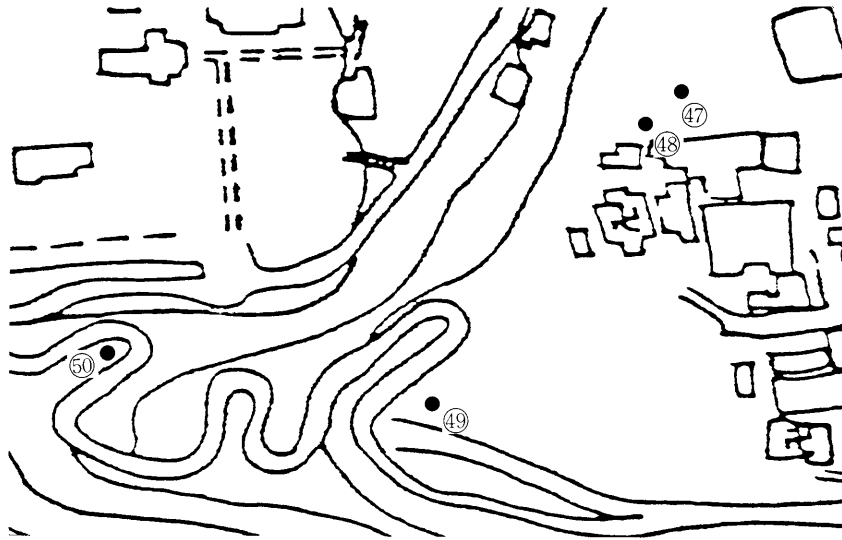
□塚力升拜書



三段広場西側清水道沿

荒川汶水碑

孝顯寺・孝顯寺坂



④村田氏寿墓 (笏谷石 東面)

文政四年(一八二一)福井藩士村田氏英の長男として福井城下に生まれた。幼名を巳三郎という。

安政三年(一八五六)橋本景岳と共に藩校明道館に出仕し、のち幹事となる。翌四年藩主松平春嶽の命により横井小楠招へいの下交渉のため熊本へ赴く。元治元年(一八六四)七月、蛤御門の変が

起った時、氏寿は藩兵を率いて堺町御門を警備したが、長州軍の砲弾によって重傷を負った。更に慶応四年(一八六八)六月、会津征伐に際しては藩兵を率いて越後に出陣し、若松城落城後は、同地方の民政安定に努力し、以後藩の参政職、版籍奉還後は藩知事松平茂昭を補佐し、福井藩権大参事心得・福井藩大参事となり、廃藩置県断行後、福井県参事、更に岐阜県権令に栄転、明治十年(一八七七)退官。同三十二年(一八九九)五月、七十九歳で歿した。

墓は夫人・二女松子と合葬のもの。氏寿の遺齒が埋葬されている。

〔正面〕

従四位勲四等村田氏寿之墓

子之墓

〔右側面〕

明治三十一年八月十六日改葬孝顕寺墓地

村田氏寿明治三十二年五月八日没享



孝顕寺墓地

村田氏寿墓

之墓

年七十九同年八月六日葬遺齒塔下

〔左側面〕

村田氏

④ 鈴木主税墓

(笏谷石 東面)

孝顕寺墓地

福井藩士。名は重栄、通称主税、純淵・鑿城などと号した。文化十一年（一八一四）福井藩士海福正敬の子として生まれ、鈴木長恒の養子となった。天保十三年（一八四二）藩主松平春嶽（慶永）の時、寺社町奉行となり善政をしいた。この間、城下木田の町民がその仁政を深く感謝し、生前より世直神社を創建して神と仰いだことは有名である。弘化二年（一八四五）以降、側頭取・側締役などに任じて春嶽を補佐し、嘉永六年（一八五三）黒船の来航を知るや奮然として江戸に赴き、藩政の機密に参与した。諸藩有為の士と広く交わり、学事・財政・兵備等すぐれた建策をして藩政の一新をはかった。安政三年（一八五六）病床に橋本景岳（左内）を召いて後事を託し、江戸常磐橋藩邸内で四十三歳の生涯を閉じた。

墓碑正面「鈴木重栄之墓」、右側面「純淵齋安政三内辰年三月十日、純厚院 鈴木氏」、左側面「贈正四位 明治



鈴木主税墓

三十一年七月四日」。

『鈴木重栄伝』（松平家編）

重栄歿せし時年四十三春嶽公深く惋惜し特に祭資^{白銀二十枚}を賜ふ品川天龍寺に葬る後改めて福井孝
顕寺に改葬す（略）明治十年天皇京都に幸し暫く鳳輦を停め玉ふ春嶽公天機伺の為京都に出て
旅館にあり嗣子重弘中根雪江と共に京都に至り公に謁す会公重弘に間に重栄か墓碑の事を以て
し遂に公自ら鈴木重栄之墓の六大字を書して之を賜ふ時に明治十年四月十日なり

④⑨ 三界万霊塔 （笏谷石 東面）

万霊塔は、あらゆる衆生の霊を供養するための
もので、三界とは欲界・色界・無色界、あるいは
過去・現在・未来を指す。

この万霊塔は、表面に「三界万霊等」と題し、
裏面に「^{一六八八}貞享五戊辰春三月 幻住寒岑松琢立」と
刻まれている。



三界万霊塔

足羽山トンネル東口

⑤⑩ 道路改修記念碑 （東面）

昭和八年、陸軍特別大演習を機に道路改修が行われたのを記念し建立されたもので、篆額（陸軍

孝顕寺坂

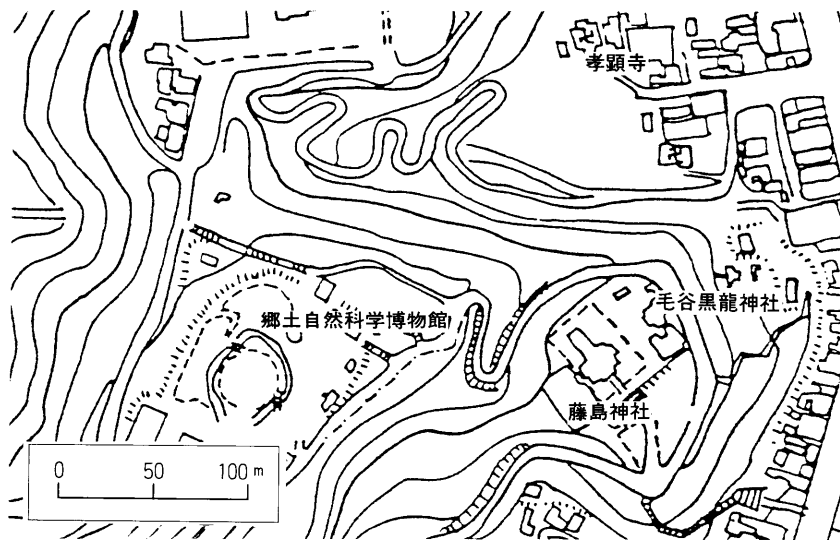
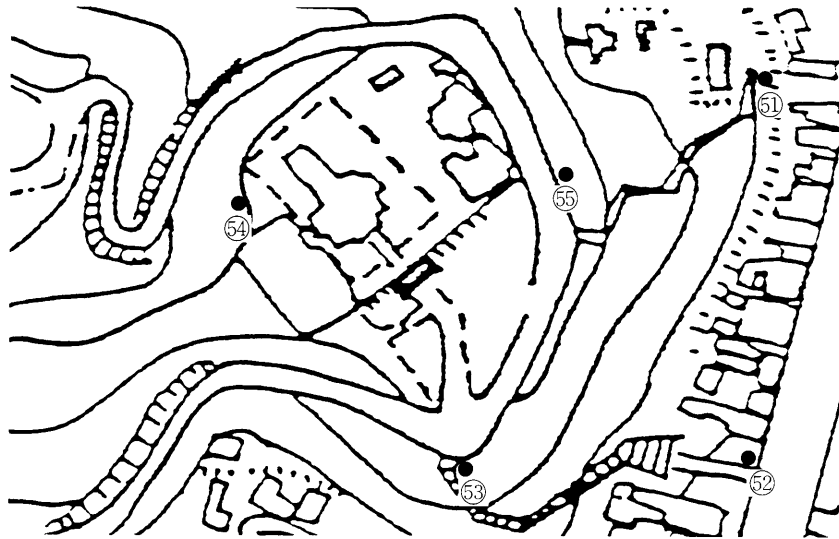
特別大演習」の下に、「昭和八年十月 道路改修記念碑」と刻まれている。

孝願寺坂は大正二年（一九一三）車道に改修され、昭和八年、車が併行できるよう拡張された。



道路改修記念碑

黒龍神社・藤島神社・白山社



⑤ 石渡八幡祠碑 (北面)

黒龍神社境内に鎮座する石渡八幡社の由来碑。石渡八幡は、府中(武生)の医家・本草学者で本多家に仕えた石渡家の先祖一郎右衛門秀正(貞享三年八六、半知により出府)が、尊信する八幡大菩薩を居住地の福井城下毛矢町に勧請したもので、明治四十一年(一九〇八)黒龍神社に合祀された。

碑は大正七年(一九一八)、祠堂脇に建立され、医学博士土肥慶藏の撰文。慶藏は石渡家五代陶酔(明治十年歿)の二男に当る。

(表 面) 三十七字×一三行

(裏 面) 三十七字×一三行

越前福井城南毛矢旧有八幡祠祠記曰往昔石渡秀正尊信八幡大菩薩自葺祠堂手写法華經奉安為後人稱石渡八幡奉賽篤篤秀正実我生家嫡祖也仕越前侯食祿百五十石貞享丙寅侯家有故秀正因致仕卒於江戸其子秀直学医帰住府中子孫世仕本多侯為侍医事詳家乘与祠記契合明治之初修祠獲石仏一軀于堂下風磨雨蝕刻字勒而不克読齋中又得細楷法華經蠶食鼠損祠官繕絨還納堂中明治四十一年官命合祀黒龍神社移置祠堂及華表於其傍頃者余請祠官得殘経贈之家兄石渡秀実永為伝家宝願自祖宗書写此経歴歳二百有余子孫重獲什襲之非神物護持之力安能然哉其辞曰

山巒鍾秀色 鬱鬱至今青 松月緬遺照 蓮華欽妙経 祠堂存旧記 神物有冥靈



石渡八幡祠碑

黒龍神社境内

述祖吾心愴 処題四韻銘

大正七年十二月

正五位 男爵本多副恭篆額

東京帝国大学医科大学教授正四位勳三等医学博士 土肥慶藏撰

滑川達書

井亀泉刻

⑤松旭齋天一奉納石燈籠 (笏谷石 東面)

藤島神社参道入口

奇術師。嘉永六年(一八五三)一月、福井城下大名町(順化二丁目)に家老狛帯刀の家来牧野海平の長男(第八子)として生まれる。明治十一年(一八七八)二十六歳の時、米人奇術師ジョネスに雇われ本格的に西洋奇術を学び、やがて独立して「松旭齋天一」一座を結成した。各地を巡業してしだいに名をあげ、同二十一年、念願の東京浅草文楽座で興行、翌二十二年には西郷従道邸(現在、明治村に移築されている)で御前公演をするなど、日本を代表する奇術師に成長した。同二十四年、初の福井公演の際、市長を訪問して貧民救済のため米五石を寄付した。その後、欧米各地を巡業し、日本奇術の紹介と外国奇術の導入に努め、同四十五年六月、六十歳で歿した。

灯籠は明治四十二年(一九〇九)、四度目の来県の際、興行記念に寄進されたもので、竿の表面に「寄進」、裏面に「明治四拾貳年八月吉祥建之」、台石裏面に「松旭齋天一」と刻まれている。



松旭齋天一奉納石灯籠(表)



同上(裏)

⑤③ 国島君紀徳碑 (北面)

福井の醤油醸造業者、国島清平の記徳碑。明治三十四年(一九〇一)、藤島神社が西藤島牧野島(福井市)から現社地に遷座される際、肝煎として宮司を援け事業推進に貢献した。明治三十一年七月、六十一歳で歿した。

(正 面) 三九字×二一行

〔家額〕
「国島君紀徳碑」

福井県知事正五位勲四等阪本鈺之助篆額 国島清平君越前福井人世業醸醤油系出自菅原氏其先居摂津西成郡柴島村因氏柴島十二世祖子兵衛仕足利氏徒越前足羽郡東郷村数伝至春千代会朝倉義景喪国春千代娶其女移家福井子兵衛十一世孫玩水好学多聞能詩画改氏国島玩水無男養高田

藤島神社参道

某子忠左衛門為子配以女乃生君甫三歲父歿
產斬衰母国島氏賢而養有方君少奉母調志在興
家安政中家罹災資財蕩盡君益奮勵治產綜理秩
然家道大興藤島神社奉君為肝煎社祀左中將新
田公距福井北半里在牧島明治二十九年五月清
彦承乏官司時水害頻臻隨修隨圮蓋因社域卑下
清彦以為不苦遷社高處乃相地于足羽山往諮諸



国島君記念碑

君君慨然贊之許以竭家資充其費且誠曰衆必詛害君執志勿替也治具狀請官議議紛騰果如君言清彦
詣東京陳情遂得官允於是婦告之神靈君欣躍被母氏遺衣來拜限謂曰吾志已遂矣憾不与母偕養此衣
所以代母也泣然久之未幾清彦以祠事復至東京乍聞君病篤奔歸問之君驚喜扶病坐曰吾命在旦夕雖
然遷社事已就緒且得面君死亦可以瞑矣尋歿明治三十一年七月三十日也享年六十四葬于城西本妙
寺君俟以奉身仁以濟物教育產業土木以至賑饑拯災捐資贈給者不可勝算官賜杯賞之前後十五次本
妙寺祖塋所在亦曾燬於火君輒再建其他營造仏宇者至數處云配山田氏無子以三輪五三郎二子猪三
郎為副承襲稱清平清彦不敏奉職茲土其得嘗遷得地祠宇鼎新妥靈而揭虔者未始不賴君之扶掖之力
也因詮次其事行勒石垂後且繫以銘曰 綿綿三百四十年 家世相承十三伝 奮族久推闢里先
氣運推移有屯邅 丰修頼過子孫賢 繩武貽謀祖業全 惟敬奉神誠接人 惠沢四被士民欣
足羽之山鬱鬱天 祠宇巍然典刑存 撰辞誌石諭來昆 庶与神德永摩諶

氣比神宮宮司兼金崎宮司藤島神社宮司正六位今井清彦撰
明治三十七年五月十日 前神宮祓宜伊勢国造 久志本常幸書

⑤ 藤島神社遷祀碑 (東面)

藤島神社(祭神 新田義貞、脇屋義助、新田義

宗・義顯・義興、殉難将士)は明治三年(一八七

〇)、藩知事松平茂昭(まつしやう)が新田義貞の戦歿地と伝える

吉田郡西藤島村燈明寺(とうめいじ)(福井市新田塚町)に一

祠を建立したのに始まる。同九年十一月、松平家

建立の小祠は別格官幣社藤島神社となり、同十四

年十一月、同郡西藤島牧野島(福井市)に遷宮さ

れたが、水害のため同三十四年五月、更に現社地に遷宮された。

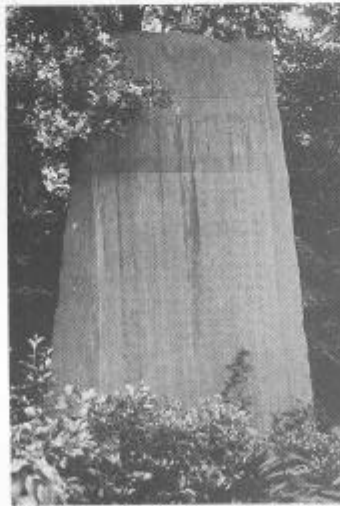
〔表 面〕 二二字×一四行

〔(家題) 藤島神社遷祀碑〕

正二位勲一等伯爵東久世通諱篆額

故左中將新田公義貞勤王死節事炳史冊明治九年朝廷勅建祠於越前吉田郡中藤島村灯明寺(とうめいじ)曰藤

島神社列別格官幣社十五年遷西藤島村牧野島地近足羽川水歳氾浸社域者幾八尺前宮司今井君清彦



藤島神社社務所裏

藤島神社遷祀碑

患之具申其状請扒地遷祀官允其議足羽山東麓負高面陽地勢極勝某等二十五人相謀募資購之納以充社域応者翕然三十四年營築功竟工精材良水潦欽跡焉洵士民協心奉神之力也乃記願末示後係之以辞曰 維神攸宅 地鍾靈秀 有翼祠宮 民永享祐

明治四十一年八月建 藤島神社宮司 加納利亮撰
從五位勲四等 近藤直一書

㊦ 白山社狛犬 (笏谷石)

白山社境内

万延元年(一八六〇)八月、石工の木戸市右衛門、地蔵屋仁兵衛が奉納したもので、卍像(向つて右)の台座正面に「(万延)元(庚)申歳(仲)秋」、左側面に「奉納」、裏面に「石工 久野又助幸長」、右側面に「木戸市右衛門倚□」とあり、阿像の台座正面に「万延元庚申歳仲秋」、右側面に「奉納」、左側面に「地蔵屋仁兵衛」と刻まれている。

白山社(祭神 白山・神明・山神・八幡・天神)はもと持宝院の鎮守と伝えられ、江戸時代、石工等の崇敬を集めた。

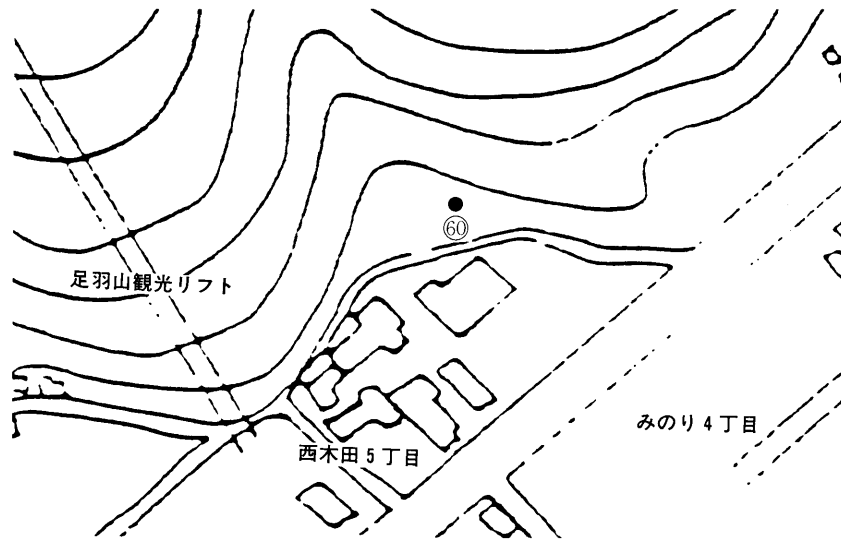
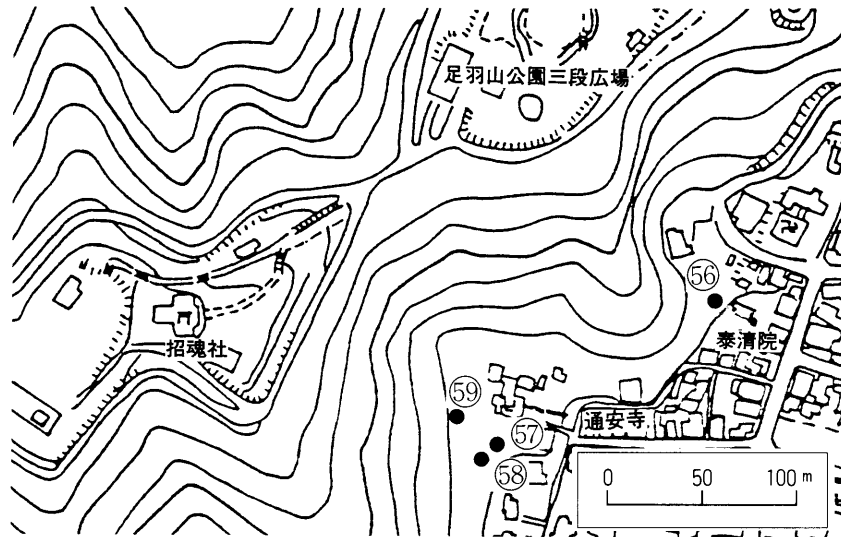


白山社狛犬(右)



同上(左)

泰清院・通安寺・山奥



⑤⑥ 田代養仙墓 (笏谷石 東面)

福井藩医。三代藩主松平忠昌に仕える。寛永二十年(一六四三)、キリシタンであるとの理由から江戸送りとなり、改宗後も、キリシタン類族として、きびしい監視下に置かれた。

墓は五輪塔で、空輪・風輪が散逸している。

(地輪表面)

慶安二(一六四九)己丑年

田代氏法眼養仙足也居士

九月十二日

泰清院墓地



田代養仙墓

⑤⑦ 川地柯亭墓 (笏谷石 西面)

福井藩士。名は義裕、通称又兵衛。安永九年(一七八〇)福井藩士川地忠左衛門の子として生まれ、札所奉行、御纏頭、御先物頭等を歴任した。弓術・馬術・槍術・砲術・詩歌に通じ、かつ画法を京都の紀竹堂、江戸の谷文晁に学んで、晩年は明清の画法を慕った。明治六年(一八七三)十一月、九十四歳で歿した。

通安寺墓地

(正面)

明治六年十一月十七日

意誠院□□□居士

恵心院□□□大姉

明治五年十月七日

〔右側面〕

明治三十八年十一月四日

心照院無辺妙晴大姉

〔左側面〕

明治四十四年八月十八日

玉室妙□□大姉

⑤ 四時庵暮江墓 (東面)

幕末の福井藩士。本名を川地権内といい、川地柯亭^⑤の弟。俳句が得意で、福井俳諧獅子門一派の初代となり、約五百人の門人があった。代表的な句に、「吹く方を今日の面の柳かな」「消えるとの山の谷間や残る雪」「此海や月雪花の帆は絶えず」などがある。慶応二年(一八六六)三月、七十一歳で歿した。

墓は弓型の自然石。表面に「四時庵文遊暮江居士」と刻まれている。

通安寺墓地



川地柯亭墓

「春嶽公と四時庵暮江」(『福井藩史話』)

春嶽公は国事に尽萃するの余暇懐を詩歌俳

諧何くれとなく風雅の道に寄せられた。

川地権内(扶持百石元江戸町)は風雅の士、

四時庵暮江と俳号して門人約五百人、晩年養

子権内其の石碑を菩提所山の奥通安寺に建設

するに際し、暮江を伴ひて予じめ其の場所を

選み次で建碑記念の会合を催し、席上暮江の春光遲速と題する回文「消ゆる此の山に谷間や残る雪」と立句として五十韻を仕立てた。回文と称するは、上下何れより口吟するも同文句となるので、技巧を弄する結果は真情を害ふの弊あれども此の吟の如きは其の弊に陥らず、極めて老大家たるの風韻掬すべきものがある。

養子権内更に之を木版に起して雪の礎として製本出来したる折柄、春嶽公より至急の御召出あり。幸ひ右の一本を献上したるに、子として孝養浅からざる旨賞賜を下され、且つ養父暮江へ取らせよと仰せありて「孝行は生きた祭の筆の塚」と筆を走らせ、俳号を無庵何有と認められた。(後略)



四時庵暮江墓

㊦ 拍家累代墓 (笏谷石)

通安寺墓地

福井藩士狛家は、福井藩の高知席一七家の一つで、孝澄の時、三代藩主松平忠昌に召し出され、代々家老職を勤めた。家禄は初め八〇〇〇石、次いで一〇〇〇石を増加されたが、貞享三年（一六八六）福井藩が半知となった結果、四五〇〇石に半減された。

墓は五輪塔で、それぞれの台石に仏像を刻し、もとは石柵が巡らされていた。写真は向って右から孝澄（東面）、澄孝（東面）、孝清（東面）、孝昭（北面）の四基で、地輪表面に歿年と法名が刻まれている。（本堂裏の高所に、孝章ほか三基の五輪塔がある）

なお、通安寺は寛永年中（一六二四―四四）、狛家の建立した寺と伝え、狛家累代の墓はこの寺と泰清院にある。

〔イ〕

万治二己亥年二月初九日

円了院殿前勢州列刺史幻庵休夢大居士

狛伊勢守藤原孝澄

〔ロ〕



狛家累代墓

享保十九^甲 八月初四日

静篤院殿前勢州禪巖了寂大居士

狛伊勢藤原澄孝

〔一〕

明暦三年丁酉六月廿三日

本郷院殿前国子司業歌心全休大居士

狛大学助藤原孝清

〔二〕

元文五年庚申四月廿一日

直心院殿前将作見巖全性大居士

狛木工藤原孝昭

⑧天保飢饉塚 (笏谷石 南面)

天保七・八年(一八三六・七)をピークとする天保大飢饉の餓死者(福井藩領内の餓死者は六万人以上と推定される)を埋葬した無縁墓で、銘文は東明里の地藏堂にある飢饉塚のそれとはほぼ同文。

〔正面〕

無縁墓

西木田四丁目



〔二〕狛 孝昭墓

〔右側面〕

天保七丙申年飢饉翌丁酉とし疫病

流行人おほく死す無縁のものを此所

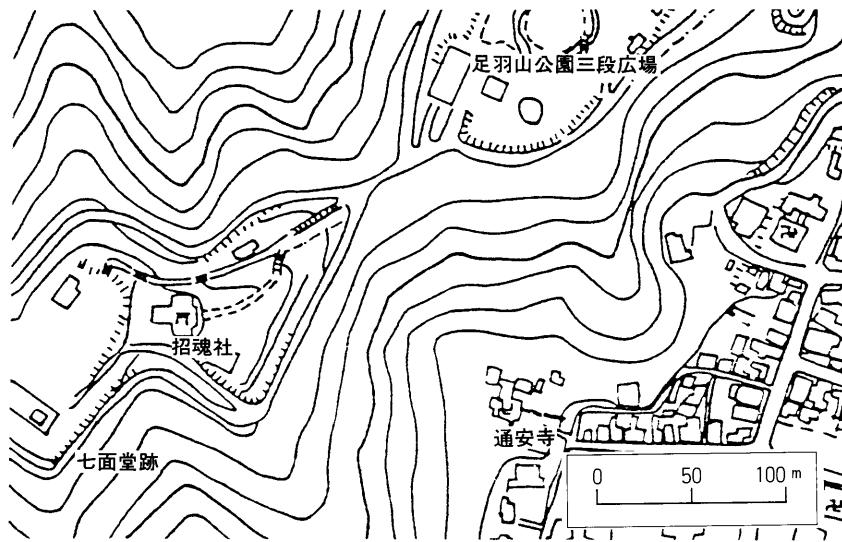
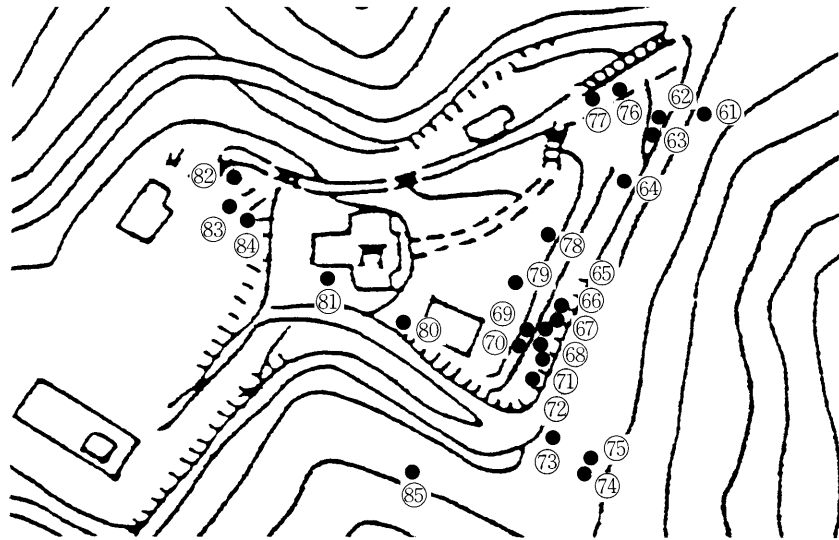
埋む因て追福かために建之

于時天保十四癸卯夏四月



天保飢饉塚

招魂社・七面山



⑨ 杉田定一記念碑 (西面)

政治家。衆議院議長。嘉永四年(一八五二)六月、坂井郡波寄村(福井市波寄町)の豪農杉田家に仙十郎の子として生まれた。幼名を鶴吉郎といったが、南越第一の勤皇僧滝谷寺の道雅和尚に定一の名鶴山の号を与えられた。学問を道雅、吉田東寧等に学び、後大阪、東京に出て修学したが、感ずる所あって専ら政治学を研究した。明治初期自由民権論を唱導し、二十五歳の折下獄したのを皮切りに、波乱に富んだ政治活動に挺身し、明治三十九年(一九〇六)衆議院議長をつとめ、ついで貴族院議員となった。大正に入り元老政治が政党内閣の発達を阻害しているのをいかり、尾崎行雄と共に桂内閣を倒したのを始めとして憲政擁護運動を展開し、政党内閣の正しく発展することに努力を払うなど、弁舌なき誠実な政治家であった。昭和四年(一九二九)三月七十九歳で歿した。

記念碑は明治十六年(一八八三)、減租に尽力した功績をたたえ建立されたもので、もと赤阪町(月見二丁目)にあった。向って右手前に、記念碑の標柱、左側に移築由来の碑(大正十一年十月)、左手前に福井大震災後の再建由来碑(昭和二十六年八月)がある。



杉田定一記念碑

招魂社登り口

〔記念碑標柱 表面〕 〔同上 裏面〕

杉田君記念碑

發起人 坂井郡舟津村

明治十六年

周旋人 矢尾八兵工

周旋人 吉田郡殿下村

今道 佐主

〔記念碑 表面〕 一二行

今上親政之六年降勅定地租法欲除旧瀆幣制以歸之均一也凡諸府県主者奉行焉時我越前国足羽吉田等七郡為敦賀県後属石川県県吏四出度土田至九年始告成而其法失宜有調租或不均者人民嗷々鳴其不便会杉田君定一周遊而帰衆欲頼君告訴君曰是不可輕拳也乃与其父仙十郎君等謀捐貲周旋者不一焉官察其言十二年派吏再檢為減租年当三万八千九百六十四円六十一銭余郡民始安云衆深感君之厚意頃欲建石紀其事請予撰文事思是非君之意也君寄傑之士也壯歲別家遊是極広其志蓋將大有為於世則是区々者無以文為也衆曰雖然不可以止也余乃叙其概者如斯

明治十六年六月 山口透撰

〔移築由来碑 正面〕 二一字×一三行

杉田君紀功碑元在福井市南端赤坂蓋地租改正之際德杉田君父子之功績當時不服村其他有志所建

実明治十六年也爾來物換星移地委荒僻行人不復顧今者有志相謀卜地足羽山上移築且修補之此地高敞四望開豁士民所集皆仰瞻之庶幾足永伝名士之德乎所謂不服村者二十一区曰立待村上石田下石田小泉吉川村平井小泉下川去豊村下司朝日村田中天津村清水山三方村片粕以上属丹生郡春江村安沢中之庄千步寺田端大石村上小表以上属坂井郡河合村二日市属吉田郡北日野村向新保属今立郡王子保村下平吹南日野村上平吹島北杣山村鑄物師以上属南条郡

〔再建由来碑 正面〕

〔同上 裏面〕

昭和二十三年六月二十八日大震災によりて倒壊

福井県坂井郡鶉村

昭和二十六年八月六日再建竣工式挙行再建

整地寄贈者 福井市 北村浅次郎氏 庭造

⑥② 上田喜作碑 (笏谷石 東面)

招魂社東側斜面

足羽郡木田村(福井市)の人。明治二十七年(一八九四)八月、歩兵第十九聯隊上等兵として日清戦争に従軍、翌年一月、中国で戦死した。享年二十五歳。

碑は明治三十年十一月に建立された。

〔表 面〕 三〇字×一三行

〔家額〕
「上田喜作君之碑」

歩兵第十九聯隊上等兵上田喜作君戰死於清國
之歿十日寺田中隊長遠自軍中寄狀遺族曰君平
素勤臨事果決數斥候跋涉山野調敵情形其報皆
確有提明治二十八年一月十日君与我兵數名偵
視敵於海城北是日風雪尤寒有□指者君意氣自
若進行三里至双台于与敵步騎兵五六十遇突擊
甚急君知衆寡不抗顧呼曰子等速去報狀我留死



上田喜作碑

焉奮鬪殲敵十余人彈丸洞額而斃惜夫然我軍自此詳敵虛實後隊得大勝遂中相伝莫不称君膽勇也君
足羽郡木田邨人明治廿四年十二月徵兵廿七年八月從軍經韓地入清國死時年二十五官追賞金三百
七十五円且給年金若干於遺族□扶助焉屬日郷人骨謀樹石於共遊山以表其事來請曰聞老生亦當時
從軍者頼撰之文予已似君死且喜郷人有此舉也不辭叙其概銘曰
殊域勇戰 義重死輕 聖恩恤□ 故山勒名

明治三十年十一月 福井 山口透撰

陸軍歩兵中尉從七位勲六等功七級白井惠洲篆額并書

㊦ 高田藤助碑 (笏谷石 東面)

招魂社東側斜面

福井市乾中町の人。明治三十三年（一九〇〇）歩兵第三十六聯隊第八中隊に入隊し（上等兵）、

翌年日露戦争に従軍、同年八月、遼東半島で戦死した。享年二十五歳。

碑は明治四十年八月に建立された。

〔表 面〕 一八字×一七行

〔高田藤助碑〕

君名藤助高田氏父豊吉以明治十三年一月生於

福井市乾中町幼温厚事父母孝順及長好読書明

治三十三年応徵入歩兵第三十六連隊第八中隊尋為上等兵滿期帰郷三十七年征露役起哉七月従旅

順攻圍軍航赴清国遼東半島激戦幾回奏武功我軍攻撃角面堡也君乃曰報君国在此一挙死而後止丈

夫之所期也踰壘壕破鉄網奮前猛進冒砲烟彈雨戰時敵彈貫通顔面遂戦死於龍眼北方角面山堡翌享

年二十有五実明治三十七年八月十九日也官録其功即日任陸軍歩兵伍長叙功七級勲八等賜金鵄勲

章及白色桐葉章噫君排百難冒千險終以身殉国其績可謂偉矣銘曰 為国起為国斃 以孝始以忠終

瘞骨異域不帰 忠魂義魄何朽 一心永護皇基 英風凜千萬年

明治四十年八月 馬場喜作撰并書

⑤④ 足羽敬明墓 (笏谷石 東面)

足羽神社神主。寛文十二年(一六七二)福井藩士渥美友信の子として生まれる。はじめ右京と称

招魂社東側斜面



高田藤助碑

墓は明治三十八年（一九〇五）十月に建立されたもので、表

面に「陸軍歩兵少尉 潮田由元墓」と題し、裏面に墓誌がある。

〔裏面〕 三〇字×七行

姓潮田名由元明治十四年三月十一日生於越前福井夙学中学
経五年而卒其業後就役于陸軍歩兵第十九連隊無幾進上等兵
尋累進軍曹三十五年十二月為士官候補生学士官学校翌三十
六年十一月卒其業而復隊直為見習士官三十七年三月任少尉
会此歳日露有事從其事遠航清国転戦于安子嶺于太山等奏殊
功特賜勲章終為敵彈三十八年三月九日於盛京省揚子屯殉国
事時年二十有五

明治三十八年十月建之



潮田由元墓

②⑥ 小出左織墓（笏谷石 東面）

文政五年（一八二二）六月、福井城下館町の農家に生まれる。農業に従事する傍ら、館町地主総代、聯合町村会議員等を勤め、地域の指導者として活躍した。敬神の念厚く、晩年、出雲大社教教導職試補となり、さらに大講義に補せられた。大正三年（一九一四）四月、九十三歳で病歿した。

墓は大正三年（一九一四）四月に建立されたもので、表面に「大講義小出左織之墓」と題し、裏

招魂社東側斜面

面に墓誌がある。

〔裏 面〕 三三字×一九行

小出左織翁墓誌

翁初名与藏後改左織号_{(文)政(五)年(月)}幽□□□□□□□□□□□□□□□□六□廿八日生於福井城下館町家系遠發於繼体天皇之朝実賀輿丁十七家之□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□強記見聞一度終生不忘接人温厚慈愛当事明弁達識□□□□□□□□□□□□服其德四鄰畏其威家世業農翁承父業也躬督僕雇事耕□培養□□□□□□雨雪敢不意專念凶農桑之改良指導周到一郷之産業靡然一新其面目矣時福井藩士三岡八郎在任天田村鉦山監督知翁之誠実黽勉可大用举而参劃其事業八郎者是後年之子爵由利公正也以足察翁之風格乎翁又喜任俠志濟民自欲修医而絶疫癘風瘴之害就藩医栗崎道伯講刀圭之術業大進乞治於其門者日夜不絶偶有北野村水論之事重傷者数十名翁与栗崎氏走赴之治療最力敢不微葉料官大称之賜黄金五枚並米五俵以旌之明治九年举為館町地主総代鞅掌地租改正之事後又為聯合町村会議員為郷党幹旋忘眠食翁初深信仏教又篤敬神及晚年翻然自覚捨仏而帰古神道任出雲大杜教導職試補累進補大講義大正三年三月病而知不復起托後事於嗣從容待死四月二日終長逝年九十三有二子長砂雄氏從育英之業篤孝純朴侍病父奉養無不室次子常平去在大坂亦執鞭贖堂名声大揚可謂翁有後矣余縮盟与砂雄氏多年今聞翁死痛恨何禁偶氏囑余以撰翁之墓誌乃列蕪辞以表哀悼之至情爾云

大正三年四月中旬 正七位勲六等 岩佐重一撰



小出左織墓



斎藤長君殉職記念碑

木戸千秋書

⑥⑦ 斎藤長君殉職記念碑 (東面)

表面に「故鉄道院車掌斎藤長君殉職記念碑」、裏面に「明治四十四年十一月十七日殞於鯖江駅享年二十六
大正元年十一月 金沢運輸車務□□所管内有志建之」と刻まれている。

招魂社東側斜面

⑥⑧ 忠勇安川君墓 (東面)

福井市佐佳枝中町(中央)の人。通称平四郎。陸軍歩兵上等兵として日露戦争に従軍、明治三十七年(一九〇四)八月、清国盛京省龍眼北方角面堡で戦死した。享年二十四歳。
墓は表面に「忠勇安川君墓」と題し、裏面に墓誌がある。

招魂社東側斜面

〔裏面〕 二三字×八行

君通称平四郎越前国福井市佐佳枝中町安川平

太夫君之二子以陸軍歩兵上等兵従軍于満州

戦有功明治三十七年八月十九日奮戦中丸死于

清国盛京省龍眼北方角面堡享年二十有四可謂

尽義勇奉公之道者也是日叙勲八等功七級賜金

鷄勲章年金一百円及白色桐葉章葬遺骨于足羽

山招魂社之側請福井県知事阪本君書題碑面以伝于不朽焉

明治三十八年三月建之 福井県師範学校教諭 木村増二書



忠勇安川君墓

⑤ 半井南陽墓 (東面)

招魂社東側斜面

福井藩医。名は保、通称を元仲・仲庵といい、南陽・晩春と号した。藩医の重鎮として十六代藩

主松平春嶽の信任厚く、才能ある若い医師を数多く見出し、これを援助育成して、幕末福井の医学

水準を、全国有数のものに高めた功労者である。仲庵自身は漢方医として出発したが、友人の蘭方

医笠原白翁の影響で、四十歳を過ぎてから西洋医学に志し、研鑽努力の結果、周囲の青年蘭方医達

を驚嘆させる程の原書読解力を身に付け、福井の蘭方医学興隆の基礎を築いた。明治四年(一八七

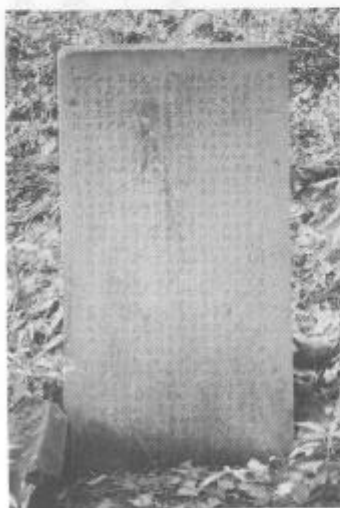
一)十二月、大阪に病氣治療のため旅行中、六十歳で歿した。

墓は「南叟晚香居士」とあり、右横に福井藩主松平春嶽（慶永）撰文の墓表（笏谷石 東面）が建っている。

〔墓表々面〕 三五字×一八行

春嶽永撰

凡有生者必有死而生則喜死則哀是人情之常胡越不相識者且然況於親厚之人乎嗚呼旧臣南陽客歲下世其子澄乞余文以表其墓顧余不文非其人然曾有君臣之契且其在世時親厚之而知有志知其功者莫余若焉則義不可辭南陽姓和氣清磨之後裔也以半井為氏諱保字伯和通称元仲又称仲庵南陽其別号也其先有為竹者半井驢菴之門人也元和八年壬戌仕余家爾後子孫相承考諱^保字君熙号南江本姓柏谷氏入嗣半井氏妣半井氏天保十一年庚子緝致仕南陽承後襲業先是遊京師入侍医某之門遊浪華師修亭中川氏学成而帰乞治者甚多南陽強不倦遠者馳輿近者一日幾回診視病者家貧則施藥而不受答謝南陽為人忠篤而□□□有卓識嘗謂余曰漢医不知藥性病理及病之原因而投以草根不□無益無害之劑其無治驗亦宜矣於是南陽年四十始読和蘭文典後遵奉□□□訓余購扶氏之書三部南陽懇請乃授之舞蹈喜甚日夜苦読手不釈卷当□□天下□知□洋之医学□□□□□□□医臣亦皆尚漢方議醫豈然南陽不□□□而皇



半井南陽墓

張□学□知其志之堅確□親信之岩佐田代請医員相繼遊長崎就朋百氏而学□攻今日□□□□医之
 隆興蓋南陽先鞭鼓舞之力云南陽有宿病聞蘭医越尔蔑□斯□□就治□□華數日而瘡將瘳遽病溘然
 亡矣実明治四年辛未十二月二十□日也享年六十歲□葬於越前福井愛宕山娶高江氏生子長男熏没
 二女柔没三女管次男澄五女須磨高江氏先歿繼娶本多氏生子六女順七女小雪余夙嘉南陽之志及其
 功勞敬以伝之永世於是乎拭淚以記

⑦ 矢島立軒墓 (笏谷石 西面)

福井藩儒学者。文政九年(一八二六)福井藩士
 矢島家に生まれる。名は剛また皞、通称恕介。藩
 儒吉田東篁や江戸の安積良齋に師事して才識を深
 め、安政三年(一八五六)四月、藩校明道館講究
 師に任ぜられ、ついで同幹事、助教へと昇進した。

維新後の明治二年(一八六九)明道館文学教授、
 翌三年明新館一等教授となり、中央の教育行政の
 変動を考慮しながら、福井の教育を改革した。同四年四十六歳で歿した。吉田東篁門生時代から橋
 本景岳(左内)と親交があり、景岳の『啓発録』に序文を寄せている。

墓は正面に「立軒矢島先生墓」と題し、左側面に「剛為名字毅侯号立軒姓矢島氏世為福井県人少



矢島立軒墓

招魂社東側斜面

好為文又知講洛閣說壯歲游関左既帰悦論語周易手不釈卷以多病弗能困勉而無所得也惟於此学終身信而不疑馬耳他無足言自譚」と刻まれている。「若越墓碑めぐり」（石橋重吉 昭和五年）によれば、墓の背後に川田剛撰文の墓表（『越前人物志』所収）が建っているが、現存しない。

⑦ 根本志賀墓（笏谷石 東面）

招魂社東側斜面

秋田の人。明治十八年（一八八五）福井県師範学校に奉職し、音楽教育に従事した。同二十六年九月、二十六歳で病歿した。

墓は表面に「根本志賀先生之墓」と題し、裏面に墓誌がある。

〔裏 面〕 一六字×八行

先生秋田人幼而穎悟好学夙絶群□明

治十八年擢入高等師範学校業既成奉

職吾福井県師範学校為人懇篤教子弟

淳々不倦人皆樂其受業二拾六年秋罹

病遂以九月八日歿享年二拾六遠近識

与不識皆為痛惜焉今茲学生有志相謀

立石識之以伝其德於不朽

明治二十八年四月



根本志賀墓

⑫ 前田助藏墓 (笏谷石 東面)

明治十五年(一八八二)五月、大野郡竹林村(勝山市野向)南部助右衛門の四男に生まれ、福井葵町(みのり)前田文助の養子となった。同三十八年、日露戦争に従軍し、同年三月、清国奉天省で戦死した。享年二十四歳。

墓碑は正面に「故陸軍歩兵□□」と題し、左側面から裏面にかけて墓誌がある。

(左側面) 二五字×八行

茲前田助藏氏君県下大野郡竹林村南部助右衛門四男以明治十五年五月三日生性沈黙謹厚事父母克孝三十五年十二月五日福井葵町為前田文助養子三十七年十一月廿二日以徵兵適齡編入歩兵第三十六聯隊三十八年二月十三日從軍征露役出帆宇品港全月十七日上陸清国盛京省大連港全年三月九日為歩兵一等卒全日清国奉天省郭三屯攻撃際志願支死□□□貫通銃創遂戦死年二十有四朝廷追賞其功勞賜功七級金鷄□章年金百円及勲八等白色桐葉章亦從本山

(裏面) 三行

為授与积義章法□嗚呼君可以瞑哉

明治四十□□月上旬 遺族建之



招魂社東側斜面

前田助藏墓

□□寺住職 釈靈応謹書

⑦ 牧田謙齋墓 (東面)

名は茂敬、通称順藏。文化六年(一八〇九)三月に生まれる。八歳の時、漢学者山本樂艾に師事し、経史・韻学を学んだ。その後、家塾を開き、小学校の訓導となった。明治五年(一八七二)五月、六十四歳で病歿した。

墓は、自然石に「蘭生谷自芳跋誓不問塚」とあり、左横に墓表(笏谷石 東面)が建っている。

(墓表々面) 二五字×一六行

牧田謙齋翁碑

翁諱茂敬字士謙通称順藏謙齋其号也考敬重妣竹村氏文化六年己巳三月生性孝而好読書八歳入山本樂艾翁之門学経史兼攻韻学早歳開家塾授徒家世仕福井藩為卒伍職卑而志高有古抱関隠士之風後藩權列小学校之訓導進資加俸明治五年壬申五月病歿享年六十四平生無他嗜好諄々授徒為衆嘗謂門人曰予死書墓以蘭生谷自芳跋誓不問塚十字其素養亦可見矣翁娶某氏無子唯有一女親族相議以女配山崎肇嗣家囊門人相謀立碑於足羽山僅十余年殘缺不可読筆患之再与門人



招魂社東側斜面

牧田謙齋墓

謀代以貞石來請余銘辭余嘗識翁於校舍其五十年授徒不倦者衆之所知也是豈藉碑之辭為重哉雖然翁之旧知既乏其人則其請不可拒遂係之以辭曰

蘭生谷□

清香自遠

君子所居

風俗向善

殘碑□□

□□□□

明治二十一年十月□日□□□□之

荻野秋雄書

②久野又兵衛・池田作太郎碑 (東面)

又兵衛は明治十一年(一八七八)七月、福井市岩堀町(毛矢)に生まれる。同三十一年、歩兵第三十六聯隊に入隊し、同三十七年、日露戦争に従軍、同年七月、清国安子嶺付近で戦死した。享年二十七歳。

作太郎は明治十二年一月、足羽郡木田村(福井市)に生まれる。同三十一年、歩兵第三十六聯隊に入隊し、同三十七年、日露戦争に従軍、同年八月、清国龍眼北方で戦死した。享年二十六歳。碑は倒壊しており、正面の判読は不能。裏面に「于時明治三十九年七月下浣建之」、両側面にそれぞれの墓誌がある。

(右側面) 九行



久野又兵衛・池田作太郎碑

招魂社東側斜面

故陸軍歩兵上等兵久野又兵衛君碑誌銘

君名又兵衛久野氏明治十一年七月十四日以生福井市岩堀町父曰又八君其長子也明治三十一年被徵入歩兵第三十六聯隊三十二年補歩兵一等卒現役中品行方正以為軍人摸範三十三年六月為台灣守備兵屢土匪來襲應戰三十四年七月守備交代皈營十月皈休除隊編入予備役三十七年二月偶日露和破五月応召入全聯隊七月十八日宇品港出港上陸于清国柳樹屯爾來勇進全月二十六日安子嶺附近戰鬪中遂為敵彈噫時年二十有七即日官録其功補歩兵上等兵叙勲八等及賜白色桐葉章君天性温順而氣尚剛毅聞又常能和歌称雅名春梅日露之役起哉曰一死以報国之秋到也矣憤慨征軍遲滯而詠辭世以知其□嗚呼勇哉九月遺骨到郷里拳町葬礼会者官民無慮数千人君致名譽之死今哉平和事復將士皆凱旋独君不在焉悼矣哉頃日□□謹茲彫録君歷於石而記其梗□係銘曰

瘞骨異域 為焉国家 天長地久 誉薰曠野 又男子榮 天兵義魂 永衛皇基

己か身ハ敷島国の遅さくら八重九重に咲て散るらん 春梅 旧交 内田松翠撰

〔左側面〕 八行

故陸軍歩兵上等兵池田作太郎君碑誌銘

君名作太郎池田氏明治十二年一月廿日以生足羽郡木田村山奥父曰半左衛門君其二子也明治三十一年而徵兵入歩兵第三十六聯隊三十三年歩兵一等卒被申付全年北清之役從軍十一月皈營三十四年皈休除隊編入予備役三十七年為日露戰役応召入全聯隊七月十八日從軍宇品港出帆上陸于清国柳樹屯爾來奮進大小各戰鬪參加其功不渺八月十九日龍眼北方角面堡攻撃之際不幸為斃敵彈噫悼

哉焉時年二十又六即日官賞其功補歩兵上等兵叙勲八等及賜白色桐葉章君性豪膽而尚沈勇聞日露之役起哉君曰杯拳一死固不期生還嗚呼壯哉君排百難終以身殉國其績可謂偉矣豈可深皇國不痛惜哉以其年十二月到遺骨以村葬先望之地長慶寺而父母尚存而有是盛儀之光榮亦可以瞑也茲同士謀夫立石以表銘曰

裏屍馬華 為國致身 死有余光 永紀勲烈 此顯名績 父母与榮 既忠且孝 貞珉永銘 松翠撰

⑦⑤ 檜皮吉三郎碑 (東面)

福井市花月町の人。明治三十七年(一九〇四)七月、陸軍歩兵第三十六聯隊第二中隊の歩兵曹長として日露戦争に従軍し、同年八月、清国龍眼北方で負傷、後送された。退院後の同年十二月再征し、翌三十八年三月、彰駅店に於いて戦死した。享年三十一歳。

碑は表面に「故陸軍歩兵特務曹長檜皮吉三郎之碑」と題し、



檜皮吉三郎碑

招魂社東側斜面

裏面に墓誌がある。

〔裏面〕 一一行

明治三十七年二月日露戦役起也于時為歩兵曹長在歩兵軍三十六聯隊第二中隊同年七月十六日依命出征発宇品港上陸於清国柳樹屯爾來連戦克督部下八月十九日逼于旅順背面龍眼北方苦戦順久不幸一発敵彈貫通下顎為後送身同年十一月二十六日治癒退院被補第三十六聯隊補充大隊第二中隊附同年十二月十六日被任歩兵特務曹長同月三十日受再征之命発宇品港明治二十八年一月二日上陸於青泥窪転為第一中隊附進向遼陽加于我第三軍同年三月一日攻撃四方台参加於彰駅店激戦全身被創飛彈貫服部二回流血流淋漓怒髪奮迅与敵接格叱咤斃数人刀折力竭氣息將絶從士擁之而護於茨埜坨兵站病院傷遂不癒溘焉而逝実明治三十八年三月十日也享年僅三十一即日官賞其功賜勲六等旭日章殊被授金鷄勲章功六級君生於福井市花月町性極温順事親至孝常能敬兇人情不已

銘曰 敵前損命 克酬聖恩 武光赫赫 永照家門

明治三十九年三月十日 多田義孝謹撰并書

⑦⑥ 高村親像 (羽馬正治作 北面)

招魂社参道

蚕業指導者。明治二十三年(一八九〇)現福井市稲津の足羽川畔に梅田甚右衛門の六男として生まれる。幼年より蚕業に務め、農商務省京都蚕業講習所(現在の京都工芸繊維大学)に学び、卒業後本県の蚕糸業を指導奨励し、人絹王国福井の黄金時代を確立した。

胸像はその業績を顕彰するため、昭和三十五年初夏笠羽清右衛門ら蚕業の有志らが造立したもので、胸像の下に「高村親君之像 京都工芸繊維大学長 中澤良夫書」とある。

〔顕彰碑表面・裏面〕 三〇字×一一行

高村親氏は父梅田甚右エ門氏母同タカ氏の六男として明治廿三年足羽清流の畔稲津に生る。幼少より蚕を好み当時蚕糸の最高学者たる農商務省京都蚕業講習所（現京都工芸繊維大学）に学び 一時は国の蚕糸教育にも従ったが、約廿五年間一意本県蚕業指導奨励の任に当り業績顕著本県斯業の黄金時代出現は与つて氏に負う所が多かつたと云えよう 一面義と情の人 我々の敬慕する所である 茲に同志相図り氏の功績と人格を忍びつ、胸像を建立した次第である

昭和三十五年初夏建之

高村親氏顕彰碑建設委員会

福井県養蚕農業協同組合連合会長

委員長 福井県議会議長

笠羽清右衛門

僚友 吉川恒次郎



高村親像

⑦ 中根雪江和歌の燈籠 (北面)

招魂場（現在の招魂社）開設時の明治三年（一八七〇）九月、福井藩士浅井政由・政教が奉納し

招魂社参道

たもので、竿の部分に浅井家の親戚で同藩士中根雪江（師質）自筆の和歌が彫り込まれている。

招魂社は禁門の変・戊辰戦争の殉難藩士を祀るため、松平家が墓碑を建設して招魂場と称し、この地で招魂祭を挙行したのに始まる。明治六年社殿を造営して以降、今日の様に招魂社と称した。

〔右 表面〕

いさをしを立し印の石碑に

死てかすある跡をこそしれ 師質

〔同 裏面〕

明治三年庚午

秋九月吉辰 浅井政由

〔左 表面〕

いちしろき名を燈火にかけ添て

千歳をてらす大和たましひ 師質

〔同 裏面〕

明治三年庚午

秋九月吉辰 浅井政教

㊦ 西南の役殉難碑（笏谷石 西面）

招魂社境内



中根雪江和歌の燈籠

西南の役（明治十年）に従軍、戦死した越前・若狭の兵士一五〇人の供養碑。明治十六年（一八八三）に建立された。

〔正面〕 三五字×二〇行

〔裏面〕
「西南之役殉難碑」

子方修福井県史追録往事為県内人民父兄若子弟于丁丑西南之役者作殉難伝越前国足羽郡士

族五十式人平民九人吉田郡士族三人平民卯人阪井郡士族一人平民十卯人大野郡平民十人丹生郡士族二人平民七人南条郡士族六人平民七人今立郡士族三人平民十人敦賀郡平民卯人若狭国三方郡平民一人遠敷郡士族十四人平民六人大飯郡平民一人二国十一郡合百五十卯人皆勇往奮進多中銃九客触刀鋒而斃于時軍中惡疫盛行然罹病斃者僅十二人矣有尉官有曹長有軍曹有伍長有兵卒有警部有巡查其□奉職役者或猝応招募者忠父母棄妻孥不顧身遂殉王事較諸死于戊辰東北之役福井大野鯖江三藩士卒合二十三人頗夥矣亦可以知當時官軍之苦戰也蓋此役也賊勢逞猖獗故起於二月終於九月凡八閱月我兵經寒暑冒風雨跋涉山海戰于所二其忠且勞誠可感也哉朝廷深憫之事平後論功行賞給爵賜金各有差受撫恤孤寡以慰死者之魂可謂至仁矣伝曰未有好仁而下不好義者也比曰同工□中某等來謁曰吾党嘗設一社名義盟相謀欲為二国土民曩歲死于西南之難者建碑於足羽山上刻其姓名於背以修冥福請為記之予聽而大嗟賞且告曰迎□蔡京書元格党人碑石工安民当鑄



西南の役殉難碑

字民乞免鑿己姓名於石末後世伝為義民今日汝輩亦石工而能景慕忠義之人為之資力以謀伝于不朽可謂好義者矣碑書其□由鑿之以銘二曰 羽山之嶺 招魂者壇 比祭殉国 生氣凜然 西南之役 百五十人 誰伝不朽 閩子等魂 石工慕義 勒茲貞珉

維時明治十六年十一月初吉

福井県令従五位石黒務篆額 福井県史誌御用係主任富田厚積撰

福井裁判所在勤判事補寺田遙書

②③ 太平の礎 (西面)

招魂社境内

昭和五十五年五月、福井県海友会によって建立されたもの。

表面に終戦時の内閣総理大臣海軍大将鈴木貫太郎の筆で「為万世開太平 貫太郎書」と題し、裏面に銘文がある。

〔裏 面〕 一三字×二五行

太平の礎

大東亜戦争終結以来三十有五年 一億同胞のたゆみなき努力の結果 日本は世界の経済大国に発展した その契機となったのは 聖断による詔書であり その中心は「万世の為に太平を開く」である



太平の礎

福井県海友会は創立第十五周年を迎えるにあたり、その由って来たるところを深く考え、有志相はかり、共に征つて散華せられた戦友の霊を慰むるとともに、わが国恒久の繁栄と平和とを祈念して、この地にこの碑を建て、即ちいまはなき海軍の哀歓と、ひたすらなる追慕の情をこめた不滅の鎮魂賦でもある。

表の文字は、終戦時の内閣総理大臣海軍大将鈴木貫太郎の筆になる。

昭和五十五年五月二十七日

福井県海友会

会長 川口敏

〔台石裏面〕 一行一名

建設委員	川口 敏	畑下忠士	古市定二	川瀬喜六	平野忠男
越島 進	寺町良太郎	白川政一	奥村昇次郎	斎藤 一	宮崎 伝
橋本勝行	鈴木国勝	塩田健二	野口 勇	山根力雄	森下一馬
中田貞四郎	安野 久	八十島 等	帰山貞二	佐々木静馬	村上若松
渡辺伊佐吉	高村重直	川口正行	小林 豊	下出 実	市村幸次郎
宮谷清次	木下秀秋	井田孝士	竹内利男	寺尾正二	大島 信
小林 伝	吉岡其二	新田秀雄	五島吉一	山岸秀一	砂谷定士
水崎 亮	上田 太	窪田 憲	川上八郎助	平 稔	久島六郎

杉本孫助 清水利武 山本信次郎 松井松一郎 田口勇高 田村數雄
西 寺一 木下 奥 川中 等

◎岡島佐三郎碑 (笏谷石 北面)

福井の人。明治十年(一八七七)二月、西南戦争に従軍し、高瀬(鹿児島県)に於いて負傷、同四月一日、入院先で戦死した。享年二十四歳。

(表面) 二八字×一六行

(裏面) 岡島君佐三郎碑

岡島君佐三郎碑銘并序

丈夫当死於辺野以為華表屍何能□児女子乎耶是馬伏波之言也夫死於辺野与死□衽席孰安孰否更不俟言矣而伏波之為此言此重国家而不顧我躬而已余求其人世不多見矣岡島君佐三郎性勇武遇事不屈常以国事為急明治四年三月応壯兵募入大阪鎮台為二等兵五年三月為近衛一等兵十年二月西郷隆盛及師出征賊揆險拒守攻撃甚苦君以第二旅团勇戰於高瀬木葉之間三月十一日又進攻二侯進撃之際銃丸忽貫左前膊而仆扶入高瀬病院遂以四月一日死葬于高瀬駅乃今高瀬招魂社之地也年二十四嗟若者可謂死而不愧伏波之言也君福井県人父曰左大夫母岡島氏今茲十九年其兄檢事從七位岡島君及次兄小野君相謀建石於其泉愛宕山招魂社欲不□其事使人來乞余銘余深感其委身國



招魂社境内

岡島佐三郎碑

事□二兄之厚友誼乃不辭而叙之

事係以銘曰 鉄石心腸 維義是守 勒之貞珉 其名伝久

明治十九年九月

石川県 藤田維正撰文

石川県 野崎近彝隷額并書

㊦ 死事十二人碑 (東面)

奥羽戦争(明治元年^{一八}_{六八})で戦歿した福井藩兵十二名の弔魂碑。藩儒矢島剛(立軒[㊦])の撰。

福井藩は明治元年六月、軍事総官に酒井孫四郎、参謀に提五市郎、軍監に市村勘右衛門を任じ、同月二十四日から二十六日にかけて出兵、さらに七月四日、本多興之輔を茂昭の名代として、総勢千人を越える勢力を越後長岡藩の征討に投入した。

(表 面) 四一字×二二行

(裏 面)
「死事十式人碑」

皇道陵夷而朝政之移幕府也六百有余年於茲矣迄元治慶応之間幕政日衰又不行於天下迨聖上即位



死事十二人碑

招魂社境内

朝政復古海寰一新億兆得拭目以望皇道之中興然奧羽諸藩往々不弁名義披險拒守弗肯奉皇命聖上赫怒興師征之兵分東北其進自北者兵部卿宮為之總督吾藩兵隊屬焉王師之會北越者五万人東北合擊六閱月奧羽乃平於是時吾藩殉國者實十有二人嗟乎自古當四海鼎沸之日邪說惑世人心紛擾天下貿貿焉不知所歸□猶天日沒光則魔鬼百出互爭是非焉及其復明也魔鬼消散是非一定而□之為邪說惑者陷為亂賊不容於天壤其間能審名義毅然不惑者殺軀殞命忠烈之名獨傳於百世矣嚮者勤王諸士推倒邪論避險難仗義蹈節以身殉國者蓋其人也惟奧羽為邪論所搖以死而抗王師者多矣然由今觀之其志雖可哀而失名義所在則忝為朝敵死猶有余卑也然則日域之為民者平居重義知恥一有不幸惟皇統所在不論是非以身報國百折不回死而後已則因其時与才量雖事有成敗其名播后世不為忠臣之徒哉顧亦唯自古忠臣多逢衰運是以死而不著者何限夫忠臣知有國家而不知有其身況以名著乎后世而望於人雖然在上者不褒錄而顯揚之則綱常何以植焉嗚乎斯事之不行也久矣此其所以世衰俗薄名義紊亂而人心不正者歟今也逢皇室隆運聖明所照細大無遺其殉國家者不翅有褒恤又設招魂杜垂示萬禩以獎勵忠烈之士可謂曠世之盛典矣夫我知事公承其盛典復嘉憫十二人者死王事於治城南愛宕山建石以勒其姓名親書其題曰死事十二人碑又各封其墓歲時祀焉則不第其名傳不朽充死□有余榮也後之觀此碑者其又知其所勉乎哉乃者命剛記其事剛惶恐固辭弗獲退而叙其概略因復為之詞俾祀者歌之詞曰奧羽不庭大伐斯張於錄王師砲精兵強惟進斯擊賊兵弗障僅六閱月乃奏捷功維時子等十有二士挺身敵愾中丸而死勇拳行伍義流遠邇死雖可哀得其死所唯彼北越谿邃山峙狐猿夜叫豺狼昼馳子等旅魂風逐駕霏飄飄其間無所依倚嗟我宕山前襟羽水水綠山野風物自美官又歲時爰賜祭祀士女

如雲来拝来視魂兮魂号母有議擬爰来爰栖永享茲記

明治三年歲次庚午冬閏十月 福井藩矢島剛謹撰

⑧ 菓子塚 (南面)

招魂社西側

昭和三十三年四月、福井市内の和菓子製造業者によって建立されたもので、「菓子塚」と篆額のあ
る碑を中心に、商品名・業者名を刻んだ小碑が配されている。

〔中〕 表面〕

〔同〕 裏面〕

〔篆額〕
菓子塚

山口 茂

松青き 橘会

田村芳雄

山の上なる

伊藤真一

この窪の

内山常吉

天にま白し

竹田谷直彦

白山のいただ

藤永仁吉

き

和田健治郎

福井市長 熊谷太三郎

田中 隧

山崎金七

賛助人市議多田 整

昭和三十三年四月吉日

〔右〕 表面

越の花 山沢 厚
羽二重餅 横田治雄

〔左〕 表面

御菓子司
譽あられ ほまれ屋
栗饅頭 ときわ木
福もなか 飛鳥家
砂糖商 菓子常
梅もなか 梅 鉢
里ごろも 福栄堂
羽二重餅 富士見堂
雪 路 栄 月
黍 餅 山海堂

〔同〕 裏面

石匠 石幸石材店



菓 子 塚

いろは順

⑬ 皇太子殿下(大正天皇)御手植松 (北面)

招魂社西側

明治四十二年(一九〇九)九月二十二日、足羽山御登臨の折植樹されたもので、昭和六十二年春頃までその緑を保っていたが、虫害により伐採され、記念碑だけが遺っている。

碑は表面に「皇太子殿下御手植松」と題し、裏面に「明治四十二年九月二十二日北陸行啓之砌同日御登臨被遊栽植 大正七年三月改建設 福井市長山品捨録」と刻まれている。



皇太子殿下(大正天皇)御手植松



同上

④ 坪川信三像 (笠原行雄作 南面)

招魂社西側

政治家。人物・経歴については銘文に詳しい。

像は昭和五十五年四月の建立で、台座表面に「坪川信三先生像」と題し、同裏面に「題字 福田 赳夫書」、胸像背面に「昭和五十五年四月吉日 笠原行雄作」とある。また、背後の壁面左側に「真実一路」、右側に左の銘文がある。

(壁面右側) 二〇字×三三行

坪川先生は明治四十二年足羽郡社村字種池(現福井市)に生まれる。福井師範を経て北京大学に学び北支臨時政府顧問湯沢三千男氏(元内務大臣)の秘書となり政治の道を志す。昭和二十一年兄信一のすすめもあつて戦後初の衆議選に出馬。初当選三十七才で中央政界に入り。それ以来代議士当選十回。昭和三十四年福井市長を一期勤む。この間吉田茂元首相に師事し。池田勇人 佐藤栄作 福田赳夫元首相 保利茂元衆院議長らと親交厚く建設大臣 総理府総務長官 議院運営 予算各委員長 党幹事長代行などの要職につき。終始血の通つた愛情政治を貫いた。昭和五十一年一月保利茂氏と訪中し。日中平和友好条約の早期実現の道



坪川信三像

を開き さらに同年は保革伯仲下の衆議院予算委員長として活躍し 与野党から名声を博したが その激務のため病魔に冒され 遂に昭和五十二年十一月二十日六十八才で不帰の客となる 庶民政治家として「坪さん」の愛称で広く親しまれ 戦後三十年の政治生活を通じて郷土のため 祖国日本のため 数多くの功績を残した ここに先生を追慕する同志相図り 先生がこよなく愛したここ足羽の山に 永久に遺徳を顕彰する

昭和五十五年四月吉日

発起人 衆議院議員 熊谷太三郎

福井県知事 中川平太夫

福井市長 大武幸夫

福井銀行頭取 市橋 督

元後援会連合会長 酒井 薫

瑞穂 窪田智謹書

⑧5 題目塔 (笏谷石)

七面山

七面明神(七面堂)跡に遺る題目塔で、天明元年(一七八一)七月の建立。

七面明神は、『越前国名蹟考』(文化十二年一八)に「七面明神は結城より来る、(結城秀康)中納言様被為入之節加茂山に宮地被下」と見え、もと加茂山にあったが、承応三年(一六五四)現在地に遷された。

前面に広がる谷を土器谷といい、遊楽の人々の土器投げ場、福井藩士の遠的場であった。また、境内には小滝も流れていた。



題目塔



七面明神(明治42年撮影)

〔西面〕

南無妙法蓮華經

〔南面〕

南無日蓮大菩薩

〔北面〕

後五百歳中広宣流

〔東面〕

天明元龍集辛丑年秋七月当社宇鷲峰院晴山月詣建

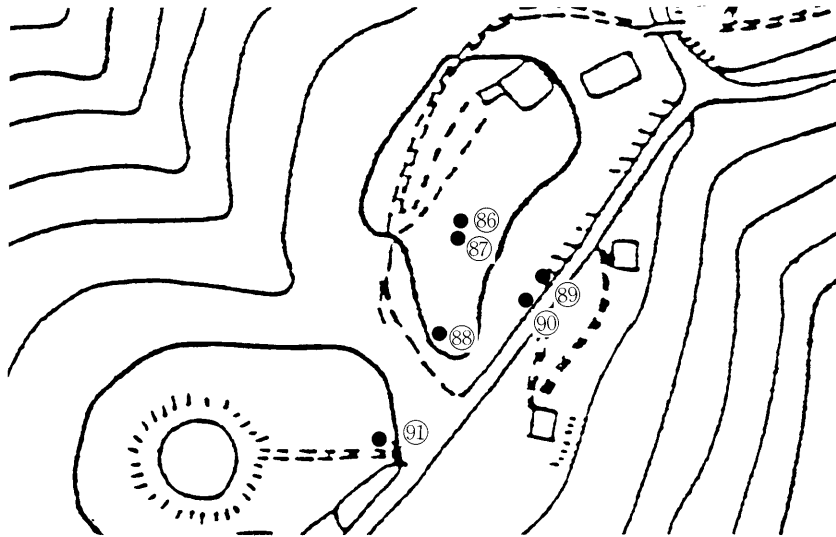
祖師大士五百年大恩報謝

□蓮
妙閑

本齋山二十二世月叡代



福井平和塔
(仏舎利塔)



⑧ 軍馬碑 (笏谷石 北面)

日支事変に従軍し、砲弾に倒れた軍馬の碑。正面に「日支戦死軍馬碑 海軍大将岡田啓介書」と題し、左側面に「昭和十四年七月建之 福井城跡之石」と刻まれている。

木の芽茶屋前



軍馬碑



明治神宮記念碑

⑨ 明治神宮記念碑 (笏谷石 北面)

大正十年(一九二一)六月、福井愛友会により明治神宮遙拝所に建立された記念碑。昭和二十三年の福井大地震で倒壊したが、同三十年四月、再建された。

木の芽茶屋前

〔正面〕

明治神宮記念碑

大正十年六月 福井市愛友会

〔右側面〕

床次竹二郎書

〔左側面〕

会 長 吉 田 良 男
副 会 長 清 水 義 貞
特 別 会 員 □ 崎 惣 左 衛 門

〔裏 面〕

昭和廿三年六月廿八日 □ 我 江 民 治 加 戸 捨 吉
福 井 大 震 災 に よ り 倒 壊 建 八 力 卯 之 吉 □ 岡 京 太 郎
昭 和 卅 年 四 月 再 建 設 大 瀬 藤 吉 南 部 辰 五 郎
世 話 人 郡 谷 孝 吉 委 大 久 保 捨 吉 牧 野 由 太 郎
八 力 豊 員 岡 本 剛 青 □ 弥 七 郎
梶 原 定 吉 川 中 栄 次 郎

⑧ 藤野巖九郎碑 (東面)

仏舎利塔北側

医師。明治七年(一八七四)坂井郡本荘村下番(現芦原町)に生まれる。藤野家は代々医師の家柄で、巖九郎も、愛知医学校で学び、医師となった。卒業後は、仙台医学専門学校教授となり、そこで、留学生周樹人(のちの小説家魯迅)を教えた。巖九郎は、周を親切に指導し、生涯の師となったから、魯迅の作品には『藤野先生』なるものが見える。また、魯迅の死後、巖九郎がその追憶を文章に著わしており、その子弟関係は、美談として語られる。昭和二十年八月七十二歳で歿した。

碑は昭和三十九年四月、藤野先生記念会が建立したもので、表面に巖九郎のレリーフがあり、「惜別藤野巖九郎碑」と題し、裏面に銘文が刻まれている。

〔裏面〕 二十二行

明治三十七年周樹人仙台に学ぶ教授藤野巖九郎懇切に指導すること二年周氏志をかえて仙台を去る先生深く周氏を惜しみ又「惜別」の二字を著して小照を贈る周氏は後の中国文豪魯迅先生なり魯迅その小照を終生壁間に掲げて己れを督励し小品「藤野先生」を草して旧師を偲んで曰く「先生は世に無名の人 己れには極めて偉大の人」と大正五年藤野先生故郷福井に隠れ医を営んで農夫の友となり昭和二十年八月十一日七十二年の生涯を了る有志相謀り上海市魯迅記念館所蔵の藤野先生小照背面の文字を採り仙台医学専門学校教授時代の先生小照と共に刻して茲に惜別の碑を建て両先生不滅の結縁を記念す 因に台面藤野巖九郎碑の六文字は魯迅夫人評広平女士に囑してこれを誌す

一九六四年四月 藤野先生記念会



藤野巖九郎碑

⑧ 足羽山古墳群表示石柱 (笏谷石 東面)

木の芽茶屋南

足羽山古墳群は、足羽山々上に点在する四世紀後葉から五世紀後葉の墳墓群。前方後円墳一基・円墳三二基からなる。石棺や豊富な副葬品の出土によって、北陸地方でも代表的な古墳群として知られ、県の史跡（昭和二十八年三月十九日指定）に指定されている。

表示柱は、表面に「史跡足羽山古墳群」と題し、裏面に「昭和二十八年三月十九日指定 福井市」と刻まれている。周辺には大小数基の古墳が点在している。



足羽山古墳群表示石柱

㊦ 北栄造顕彰碑（東面）

福井県知事。人物・経歴については銘文に詳しい。

碑は昭和四十六年十月に建立されたもので、表面に「北栄造顕彰碑 衆議院議員 日本体育協会々長 石井光次郎書」と題し、裏面に銘文が刻まれている。

〔裏面〕 一四字×二九行

北栄造氏は明治三十四年石川県小松市に生れ、早く行政官に志し昭和三年高文に合格、各県の

木の芽茶屋南

部長などを歴任した。終戦直後福井県に着任、さらに副知事に就任したが、当時県民は戦災震災など引続き未曾有の災害に喘ぎ悲歎のどん底にあつた。氏は県民の陣頭に立ち不撓不屈の精神と卓越せる手腕により、見事大復興をなし遂げた。氏はさらに県政の執念に燃え、遂に三十四年県民の要望と信頼に応え知事に当選、爾来八年間県政の面目を一新させた。国道八号線の改修、主要道路の舗装、福井バイパス、北陸自動車道路、三方五湖レインボーラインの建設、奥越九頭竜ダムおよび敦賀半島原子力発電などに当つた。また四十三年明治百年にさいし福井国体の開催を誘致するなど、その功績は誠に偉大であり、県民挙げてこれを徳とした。今ここに有志相集り、故人の遺徳を偲び県政不滅の偉業を顕彰しようとする次第である。

昭和四十六年十月

北栄造顕彰会

〔基礎右側面〕 二〇行

北栄造顕彰碑



北栄造顕彰碑

福井新聞社長 福井市足羽町

建立発起人

吉田 弥

委員長 参議院議員 武生市国兼町

県商工連会頭 福井市毛矢町

高橋 衛

藤原長司

副委員長 福井市長 福井市左内町

県織維協会会長 武生市錦町

島田博道

前田栄雄

武生市長 武生市広瀬町

幹事長 元県会議員 吉田郡上志比村

中西敏憲

今沢 東

福井銀行頭取 福井市毛矢町

事務長 丹生郡朝日町

市橋 督

荒木 誠

⑨1 福井平和塔(仏舍利塔)由来碑 (笏谷石 南面)

福井平和塔

昭和二十六年四月着工、八年の歳月をかけて建立された福井平和塔(仏舍利塔)の由来碑。塔内には仏舍利六粒が奉安されている。

なお、この場所は稲荷山古墳跡として知られ、周溝をめぐらした径三六メートルの円墳(四世紀末)から、木棺の破片、剣、斧、筒形銅器などが出土している。

(表 面) 二一行

この福井平和塔は 仏教の興起によつて祖国日本の再建と世界平和の達成を期すべく日本山妙

法寺山主藤井日達聖人の発願に基き別記多数有志の協力によつて出来上つたもので内部には聖人のもたらした御仏舎利六粒即ち印度のネール首相より贈られた十粒中の一粒釈迦牟尼仏涅槃の聖地俱尸那伽羅より発掘された三粒タキシラ阿育大王が建立した御仏舎利塔より発掘された三粒が奉安されている昭和二十六年四月着工し八年の歳月を経てここに漸く完成した

昭和三十四年四月

福井市

福井平和塔奉賛会

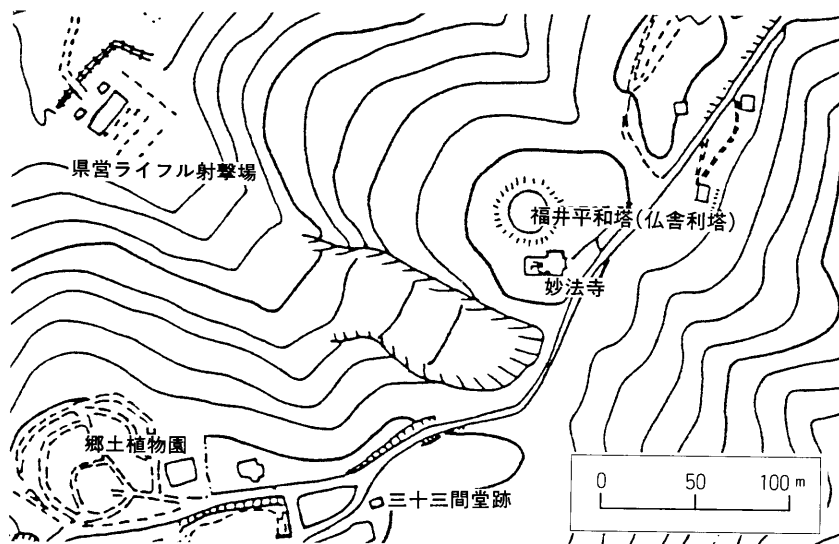
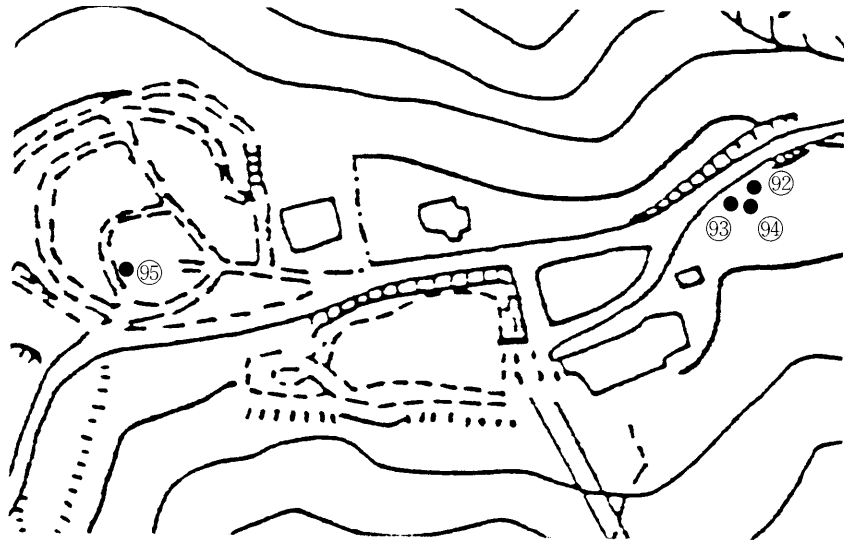


福井平和塔(仏舎利塔)



同 上 由来碑

三十三間堂・郷土植物園



⑫ 労魂賦 (北面)

昭和五十六年十月、福井県労働組合評議会(県労評)の結成三十周年を記念して建立されたもので、表面上段に「労魂賦 一九八一年十月 田畑政一郎」と題し、下段に銘文が刻まれている。

〔表面下段〕 一〇字×二一行

先達の労魂を称えて 私達は、自由、平等、平和の理念を掲げ、信義、友愛、連帯を盟約し、額に汗して働く人びとが報われる社会の実現をめざして一九五一年県労評を結成した。以来幾星霜、闘いと弾圧の風吹き荒れる苦難を切り抜き結成三十周年を迎えた。これを記念し今は亡き諸先輩の偉業を永遠に顕彰し、その屍を乗り越えてさらに前進することの証しとしてこの碑を建立せり。

一九八一年十月

福井県労働組合評議会

議長 小林 優



労魂賦

三十三間堂

③ 齋木重一碑 (北面)

労働・農民運動の指導者。

碑は昭和四十一年、全日農県連結二十周年を記念して建立されたもので、表面に「農齋木重一

先生之碑 参議院議員野溝勝書」と題し、裏面に銘文が刻まれている。

〔裏面〕 二〇字×一〇行

先生は、金津町の農家に生まれ、一身を労働

運動に捧げて五十余年、県下六万農家の父として敬慕され今日に至る、戦前は弾圧の嵐に抗して東奔西走寧日なく、戦後は全国に魁けて全日農県連を再興し、常にその先頭に立つ、ここに

その偉大なる業績を永遠に記念するため、結成廿周年に際し鑽仰の碑を建立する

一九六六年十二月

全日本農民組合福井県連合会



三十三間堂

齋木重一碑

④ 三十三間堂跡

江戸時代、福井藩士の遠矢の稽古場。文政(一八一八―三〇)の頃から、この辺りを三十三間堂

瑞陽 石川信一書

三十三間堂

㊦ 北緯・東経・標高表示石柱
(笏谷石)



三十三間堂跡



福井城下眺望図(部分)

郷土植物園

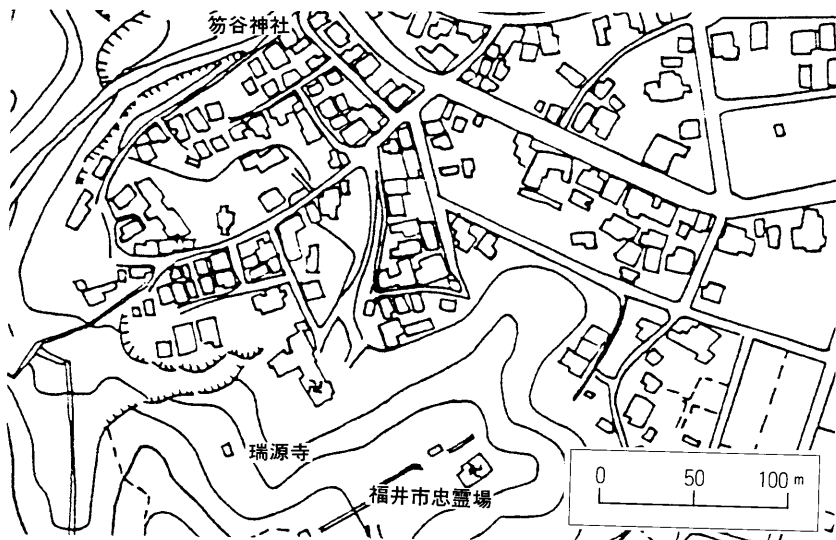
と称したといい、通し矢などが盛んに行われた。恐らく京都の三十三間堂(通し矢の行事で有名)に倣ったものと思われるが、建物があつたわけではない。
なお、寛政年間(一七八九―一八〇〇)の「福井城下眺望図」(田辺利忠筆)に、遠矢の稽古の様子が描かれている。

昭和三十三年六月、福井市によって建立された表示柱。東西南北の各面に「北 北緯三六度二分五三・四抄」「東 東経一三六度□分□□・□抄」「南 標高一〇九・八五米」「西 昭和三十三年六月 福井市」と刻まれている。



北緯・東経・標高表示石柱

瑞
源
寺



④⑥ 三宅丞四郎機業功績碑 (東面)

機業家。天保三年(一八三二)福井城下照手下町に織物業三宅丞太夫の三男として生まれる。家業を営む傍ら、藩より機業総代、物産総会所長(文久二年一八六一)に任命され、産業の振興に努力した。また、織物生産機械の開発、織物の増産・販売を はかり、福井県機業家の草分けとなった。明治二十八年(一八九五)六十四歳で歿した。

碑は明治三十二年三月の建立。

(表 面) 三 五 字 × 二 四 行

〔(家訓) 機業碑〕

我県産羽二重絹輸海外者歳率一百余万匹実臣本邦物産之第二云相伝享保明和年間坂井郡三宅郷有大島弥次兵衛者住福井始織糸頭紬以為業寛政中子丞大夫改大島称三宅氏其所織曰北莊紬更織柳条絹至享和中製絹質頗精緻者俗称奉書絹国産奉書紙夙名天下以奉書北莊音相近且絹純白如紙故有此称輸三府及諸国丞大夫第三子曰嘉藏早歳游大坂従事商賈嘉永七年四月承父後称丞四郎専修織業安政六年請藩給官金若干大振其業藩□命織業總代勸励之乃雇染織工數十人織奉書条絹甲斐条絹及絹平類文久二年藩置物産總会所命丞四郎為肆長明治十七年本県命視察京都織場見法



三宅丞四郎機業功績碑

瑞源寺墓地

国織器有所損益焉十九年以法国織器價貴且絹之光彩參酌和洋別作織具今日称倭機具者是也明年之桐生歷視織場購箴杼婦改奉書絹為羽二重製織絹福尺有半者十二匹輸橫濱粥之法商我羽二重絹輸海外昉于此焉二十年為福井織業組合評議員以紵綜用絹糸徒耗高価材料与許多工直代以蠟洋布線大省其費二十二年以京都織業会社之請製条綾三十四匹輸之法国二十四年選為織業組合理事我邦理經糸一用手指劣用器械故絹素往往生間道乃日夜苦思改法国器械為巨籬橫卷製盛行又練絹帛以釜煮之故其製不一恒以為憾於是巡視大坂神戸悟用氣鐘練成之方蓋改從前法瓶造器械二十八年七月第四回内国勸業博覽會賜有功一等賞是歲九月十五日病歿年六十四吁嗟丞四郎繼祖先志竭畢生精力於織業遂至外国争買為本邦第二輸出品我邦織業者所未曾有焉人惜其生前不獲受綠綬褒章賜而区区靈采固非其志也三十一年十一月本県設重要物産共進會追賞其功賜以金卮今茲己亥一月邑從事於織業者謀勒功于石以伝不朽請予銘之固辭不可因紀其事且銘以本県所賜賞狀大旨曰 能纂先業 織絹是勉 器具改造 所持不斲 紵綜用布 特足称善 更開販路 功勞赫顯

明治三十二年春三月 大勲位彰仁親王篆額
福井処士富田厚積選 正八位寺田遙書

〔裏 面〕 一行一名

建碑者

牧野 太平 島田 録平 竹谷 彦平 竹内 常七 居倉 金右衛門 上田 伊八
坪田 吉左衛門 河合 直次郎 富山 又平 坪田 孫助 豊田 由松

大阪

石匠松原

①⑦ 富田鷗波墓 (笏谷石 北面)

教育者。名は久祿・厚積。天保七年(一八三六)福井城下に生まれる。安政五年(一八五八)二十三歳の時、藩校明道館の典籍方及び句読師となり、翌年、藩命により江戸へ遊学、安積良齋・安井息軒らに教えを受けた。帰藩後、明道館で教師を務め、明治に入ってから、足羽県権大属学校掛中学教授として、小学校や女子小学校開設など学制実施や外人教師招聘につとめた。また、県内初の新聞「撮要新聞」を編集するなど多才な活動をしている。明治十二年(一八七九)初代明新中学校長に就任して、資性剛毅で鳴る教育を推進した。明治四十年(一九〇七)七十一歳で歿した。

墓は、表面に「鷗波富田先生墓」とのみ刻まれている。



富田鷗波墓

瑞源寺墓地

①⑧ 河津直入墓 (笏谷石 東面)

瑞源寺墓地

福井藩士。幼名を鉄之助、のち祐淳、琴廼舎と称す。文政七年（一八二四）十月、福井藩士河津祐順の子として福井城下に生まれる。少年の頃から学問を好み、経書・詩文・書・兵法等に明るかったが、橘曙覧に師事して歌道・国学を修め、門下第一の秀才として知られた。明治七年（一八七四）福井に私塾を開き、国学と和歌を教授して門弟を育てた。明治十五年（一八八二）皇典講究所委員を約一五年間勤め、中央の国学の復興にも功績を遺した。明治三十六年（一九〇三）八〇歳で歿した。

墓は、正面に「河津直入墓」と題し、左側面から裏面・右側面にかけて小伝が刻まれている。

（左側面・裏面・右側面） 四三字×一九行

文政七年甲申十月朔日生る父諱は祐順君母名は通奈君高村氏なり幼名を鉄之助と称す天保九年丙戌五月元服なして孫十郎祐信と云祐信を祐淳となす通称も善太夫となし又済となし終に直入となす家世々越前侯松平家に仕へて福井藩士たり家禄百七十五石なり安政三年丙辰六月父隠居を命せられて家督を襲く大番組に編入せらる同四年丁巳二月藩の明道館句読師を命せらる同六年己未五月大番組にて横浜警衛詰を命せられて武蔵国太田村の陣営に在り越て万延元年庚申四月交代して国に帰る同年同月藩の世譜方見習を命せられて世譜を編修す文久元年辛酉九月世譜



河津直入墓

方本役となり書院番組に編入せらるる同三年癸亥二月藩侯の上京に供奉し同三月国に帰る元治元年甲子四月世譜^(方)御用引請役を命せらるる同年十月藩侯に扈從して豊前小倉に祇徒す是を長州征討の役と云越て慶応元年乙丑二月国に帰る明治二年一月世譜方引請役を免せらるる同年三月皇学科を命せられて明道館に出勤す同年八月明新館準導皇典掛仰付られ四等官に補せらるる同年十二月文学大訓導仰付られ七等官に補せらるる五年八月男正樹に□□□□□□十五年^(下)一月皇典講究所委員分所詰仰付られ二十九年まで十有五年間奉職し四月辞職す同三十三年十二月神宮奉齋会講師となる隠居なして後市の東端に卜居なして専生徒を教育す後江戸町に移住なして私塾を開き皇典と漢籍とに従事する事三年廢塾の後宝永上町に移転し詠歌と国文とを以て後進を誘掖し余年を楽しむ性来一絃琴を嗜むをもて号を琴屋と云ひ又琴廼屋とも云文政七年甲申十月朔日生享年八十歳明治三十六年六月二十五日歿

阿麻賀計理 己死和我多万乃 屋杼里奈利 古礼許廻加羅哀 於幾通記度故廬

⑨⑨ 松平吉品御靈屋 (笏谷石 東面)

瑞源寺境内

福井五代・七代藩主。寛永十七年(一六四〇)福井三代藩主松平忠昌の五男として、福井に生まれた。父の逝去後、吉江(鯖江)に二万五千石の分封をうけ、吉江居館を構えたが、延宝二年(一六七四)四代藩主の兄光通の遺言によって福井五代藩主となり昌親^{まさちか}と名乗った。しかし、光通には妾腹の子直堅があり、松岡には光通の庶兄昌勝がいて、昌親の相続に対して藩内に動揺があった。

そのため昌親は、在職二年にして隠居し、兄昌勝の子綱昌を養子としたが、綱昌は病弱で政務が不可能となり、これが幕府の忌むところとなって貞享三年（一六八六）蝨塞を命ぜられ、石高は半減して二十五万石となった（貞享の大法）。一旦隠居していた昌親は、再び藩主となって吉品と改名した。正徳元年（一七一）七十二歳で歿した。

御霊屋は本堂裏の山中にあり、実母高照院の廟と並んで建立されている。

瑞源寺は臨済宗妙心寺派。吉品と実母高照院の菩提寺として知られる。

〔表 面〕

正徳元辛卯年

当山開基探源寺殿前羽林次将龍山悟徹大居士

九月十有二日

◎山田介堂筆塚（笏谷石 東面）

日本画家。明治元年（一八六八）坂井郡丸岡町に生まれる。初め長崎の南画家王通章に師事し、のち東京へ出て、細谷玄齋・田能村直入・富岡鉄斎の指導を受けた。明治四十四年第五回文部省美

忠霊場境内



松平吉品御霊屋

術展覧会に出品して注目され、大正三年（一九一四）三国町滝谷寺の大襖に大作「葦辺漁夫の図」を描いた。晩年は、芦原温泉に芦隠荘を構えて画作に励んでいる。介堂は、画詩書一体の画家として知られ、長田雲堂・内海吉堂とともに「福井三堂」といわれる。大正十三年京都で歿した。

塚は忠霊場境内にあり、表面に「雲烟供養」、

左側面に「過るとも来るとも今の一時雨」、右側面に「明治三十四年辛丑秋八月 埋筆于此處 円陵介堂」と刻まれている。



山田介堂筆塚

太平の礎	149	癸摘如神碑	63
題目塔	158	伴閑山碑	95
高島鷹洲寿碑	89	久野又兵衛・池田作太郎碑	142
高田藤助碑	130	檜皮吉三郎碑	144
高野春華墓	13	福井平和塔（仏舍利塔）由来碑	168
高野真斎墓	13	藤島神社遷祀碑	115
高村親像	145	藤野巖九郎碑	164
田代養仙墓	119	筆塚	100
橘曙覧歌碑	36	宝加墓	99
橘曙覧黄金舎跡	27	北緯・東経・標高表示石柱	175
橘健子墓	24	細井順子紀功碑	29
茶臼山（龍ヶ岡）古墳改葬地	70		
忠勇安川君碑	135	ま 行	
綱長井	48	前田助藏墓	140
坪川信三像	157	牧田謙斎墓	141
敦賀セメント株式会社記念碑	40	松岡屋吉兵衛石像	37
天壤無窮碑	47	松島清八記功碑	67
天保飢饉塚	123	松平吉品御霊屋	183
天魔池	82	三宅丞四郎機業功績碑	179
道路改修記念碑	107	村田氏寿墓	105
富岡仲次郎像	87	明治神宮記念碑	163
富田鷗波墓	181		
な 行		や 行	
内藤喜右衛門献金碑	90	矢島立軒墓	138
中根雪江和歌の燈籠	146	山田介堂筆塚	184
半井南陽墓	136	山本条太郎像	71
根本志賀墓	139	斎殿清水跡	31
		吉田東篁碑	93
は 行		ら 行	
白山社狛犬	116	勞魂賦	173
芭蕉句碑	82	六地藏宝塔	58

事 項 索 引

あ 行		久津見晴嵐像	73
浅田外吉碑	92	国島君紀徳碑	113
足羽宮碑	57	グリフィス遺愛の日時計と台座	39
足羽神社小燈籠	50	軍馬碑	66・163
足羽敬明墓	131	継体天皇御世系碑	53
足羽山公園展望所屋上石	86	継体天皇石像	83
足羽山古墳群表示石柱	165	小出左織墓	133
荒川汶水碑	102	皇太子殿下（大正天皇）御手植松	156
池田作太郎・久野又兵衛碑	142	小竹才六碑	42
石田一恵碑	64	狛家累代墓	121
石渡八幡祠碑	111	さ 行	
乾出雲墓	42	齋木重一碑	174
上田喜作碑	129	齋藤長君殉職記念碑	135
大久保盤山碑	97	真田地蔵	38
岡倉天心像	36	三界万霊塔	107
岡島佐三郎碑	151	三十三間堂跡	174
か 行		潮田由元墓	132
笠原白翁碑	79	四時庵暮江墓	120
菓子塚	154	死事十二人碑	152
川地柯亭墓	119	松旭齋天一奉納石燈籠	112
河津直入墓	181	松玄院常夜燈	35
北栄造顕彰碑	166	杉田定一記念碑	127
旧福井藩士奉納石燈籠	14	鈴木主税墓	106
橋元近碑	51	西南の役殉難碑	147
九頭龍川修治碑	52	た 行	

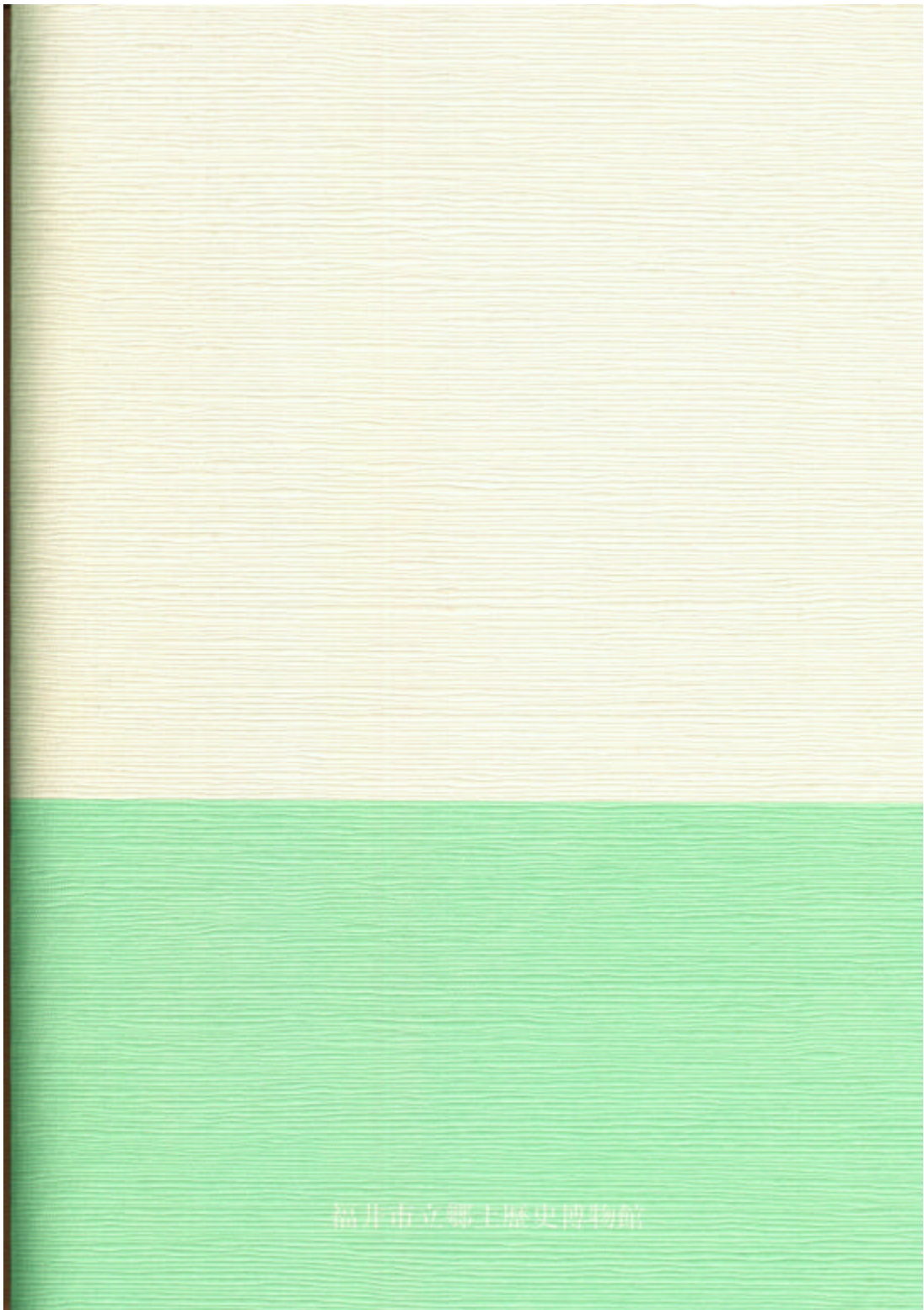
足羽山の主な史跡と墓碑石

発行昭和六三年三月

編集福井市立郷土歴史博物館

〒910 福井市足羽二丁目八番一六号
電話(〇七七六)三五二八四五

印刷河和田屋印刷株式会社



福井市立郷土歴史博物館